

本郷尺地遺跡

一級河川笹川河川改修工事に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

1987

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

本郷尺地遺跡

一級河川笹川河川改修工事に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

1987

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

多野藤岡地域は群馬県の南部に位置し、信濃からは鎭の谷を介して、武蔵からはいわゆる鎌倉道を介して、新しい文化が伝えられる地域でありました。関東山地北端の多野丘陵より北流する鮎川、笹川の氾濫原として形成された藤岡台地は、水位が低く、開発は縁辺部から、小河川沿いに行なわれたようであります。笹川は平常は藤岡台地東側を西にあるいは東に蛇行しながら、北流する小河川であります。豪雨に襲われると氾濫をしばしば繰り返す暴れ川となります。この河川改修事業に先行して、昭和60年度より埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。2年間で国道254号線以北の調査が終了しましたので昭和62年4月より整理事業に着手し、その大要がまとまりました。

発掘及び整理により得られました資料は、特に顕著なものではありませんが、大地に住まいした先人が、営々と大地と共に生活してきた証であります。日常見慣れた大地の中に先人の生き生きした生活の記録が遺されていることを示しています。

調査実施及び整理業務の遂行にあたりまして、県土木部河川課、藤岡土木事務所ならびに県教育委員会文化財保護課の皆様にあたたかまことご尽力、ご指導に感謝いたします。また直接、調査・整理に当たられた担当職員、作業員の労をねぎらうと共に本書が藤岡の歴史の空白の部分の解明に寄与するところあれば幸甚であります。

昭和62年6月30日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、一級河川笹川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書の第一集『本郷尺地遺跡』である。
2. 本郷尺地遺跡は、群馬県藤岡市本郷字尺地および田中東524-1、525番地他に所在する。
3. 発掘調査は、群馬県藤岡土木事務所の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 調査を実施した年月日は次の通りである。

発掘調査	昭和60年4月26日～昭和60年6月29日(昭和60年度)
	昭和61年5月12日～昭和61年7月4日(昭和61年度)
整理作業	昭和62年4月1日～昭和62年6月30日
5. 調査組織は次の通りである。

事務担当	白石保三郎、大沢秋良、田口紀雄、上原啓己、神保侑史、徳江紀、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、並木綾子、今井もと子、石田智子、今井綾子
調査担当	昭和60年度 友広哲也((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員)
	徳江秀夫(同 上)
	小林裕二(現県立松井田高等学校教諭)
	昭和61年度 相京建史((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団主任調査研究員)
	小島敦子(同 研究員)
	松村和男(同 上)
6. 本書作成の担当者は次の通りである。

編 集	小島敦子
本文執筆	神保侑史(I-1)、相京建史・徳江秀夫(I-2、3)、友広哲也(II-1)、松村和男(II-2(1))、小島敦子(II-2(2)～(4)、III)
遺物観察	小島敦子、新井悦子
遺構写真	相京建史、友広哲也、徳江秀夫、小林裕二、松村和男
遺物写真	佐藤元彦((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
図版作成	新井悦子、新谷さか江、高橋とし子、大川明子、長谷川春美、笹尾ヨシ子((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)
	株式会社測研
7. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略・五十音順)





新井房夫、荒巻 実、小島喜平、酒井秀夫、志村 哲、関口正己、早田 勉、中村 宏、藤井藤太郎、古郡正志 藤岡市教育委員会

8. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

9. なお調査にあたって、作業に従事し、また多くの便宜を図っていただいた地元の方々に記して感謝いたします。

凡 例

1. 本書の挿図に入れた方位記号は座標北を表す。
なお、調査に使用したグリッド基準線（Cライン）の方向はN40°Eである。
2. 本書で使用した地形図は以下の通りである。
図1 国土地理院 20万分の1「長野」「宇都宮」
図2 国土地理院2.5万分の1「藤岡」
図3 同 上
3. 本書で使用した遺物実測図のスクリーンパターンは次のことを表す。

	石器の磨り面		鉄釉		灰釉
	銅釉				
4. 遺物観察表中の()は推定復元値を表す。
5. 遺物観察表中の量目欄の「口・底・高」はそれぞれ口径、底径、器高をあらわす。
6. 遺物観察表中の色調は、『新版標準土色帖』を用いて記載した。
7. 遺物観察表5・6の陶磁器の分類・観察基準は当事業団大江正行、飯田陽一、大西雅広の協議による。
8. 遺物観察表2の石材は、群馬地質研究会会員飯島静男氏の分類・同定に拠る。
9. 本遺跡で検出したテフラについては(株)パリノ・サーヴェイに分析・同定を委託した。その報告はP.35に掲載した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査の経過	
1. 発掘調査に至る経緯	3
2. 発掘調査の方法と経過	4
3. 基本層序	6
4. 遺跡の立地と周辺の遺跡分布	7
II 検出された遺構と遺物	
1. 昭和60年度調査地区	9
2. 昭和61年度調査地区	11
(1) 縄文時代の遺物包含層と土坑群	11
(2) 古墳時代前期の遺物を包含する層	27
(3) 溝	28
(4) 粘土採掘坑	31
III 本郷尺地遺跡調査の成果と問題点	
1. 藤岡粘土層について	55
(1) 藤岡の地形と粘土層	55
(2) 沖積地の粘土層	55
(3) 粘土層と縄文時代の遺跡	57
2. 沖積地の古代開発と溝	57
3. 粘土採掘坑について	58
参考文献	60
写真図版	61
付 図	

挿 図 目 次

- 図 1 群馬県の地勢と本郷尺地遺跡の位置
図 2 本郷尺地遺跡の調査地区
図 3 本郷尺地遺跡の基本層序
図 4 藤岡地域の地形とおもな遺跡分布
図 5 A区の溝と出土遺物
図 6 B区の土坑
図 7 縄文時代後期の遺物包含層
図 8 縄文時代後期の土坑群
図 9 土坑の横断面
図10 土坑の出土遺物(1)
図11 土坑の出土遺物(2)
図12 包含層の出土遺物(1)
図13 包含層の出土遺物(2)
図14 包含層の出土遺物(3)
図15 その他の縄文時代の遺物(1)
図16 その他の縄文時代の遺物(2)
図17 その他の縄文時代の遺物(3)
図18 その他の縄文時代の遺物(4)
図19 古墳時代前期の遺物とシルト質粘土の堆積
図20 溝の埋没土層断面
図21 溝の出土遺物
図22 現行地割と粘土採掘坑
図23 粘土採掘坑の作業区画と埋没土層
図24 粘土採掘坑の出土遺物(1) 陶磁器
図25 粘土採掘坑の出土遺物(2) 陶磁器
図26 粘土採掘坑の出土遺物(3) 陶磁器
図27 粘土採掘坑の出土遺物(4) 土鍋(1)糸引き鍋
図28 粘土採掘坑の出土遺物(5) 土鍋(2)ほうろく
図29 粘土採掘坑の出土遺物(6) 瓦
図30 粘土採掘坑の出土遺物(7) その他
図31 粘土採掘坑の出土遺物(8) 鉄器
図32 粘土採掘坑の出土遺物(9) 桶
図33 藤岡台地における粘土層の堆積模式図
図34 笹川沖積地の遺跡分布
付図 本郷尺地遺跡昭和61年度調査地区全体図

写真図版目次

- P L 1 昭和60年度調査地区
1. A区全景
2. A区調査前
3. A区1号溝
4. A区2号・4号溝と落ち込み
5. C区1号土坑
P L 2 昭和61年度調査地区
1. 沖積地を縦断する発掘区(航空写真)
2. 本郷尺地遺跡全景(航空写真)手前が北
P L 3 1. 1号・2号土坑と遺物包含層
2. 5～7土坑埋没土層断面
3. 土坑群全景
4.5 古式土師器を包含するシルト質粘土層
P L 4 1. 発掘調査の開始(南から)
2. I区深掘りトレンチ土層断面
3. IV区深掘りトレンチ土層断面
4. V区土層断面
5. I区全景(北から)
6. I区からII区・III区を望む(北から)
7. II区全景(北から)
8. III区全景(南)
P L 5 1. 1号溝全景(北から)
2. 1号溝東壁土層断面
3. 1号溝遺物出土状態
4. I区から庚申山を望む
5. 2号溝全景
6. 2号溝東壁土層断面
7. 3号溝全景(北から)
8. 3号溝東壁土層断面
P L 6 1. 4号溝全景(北から)
2. 4号溝東壁土層断面
3. 8号溝全景(西から)
4. 5号・8号溝土層断面
5. 9号溝全景(西から)
6. 9号溝東壁土層断面
7. 10号溝全景(西から)
8. 10号溝東壁土層断面
P L 7 1. 粘土採掘坑埋没土層断面
2. 粘土採掘坑埋没土層断面
3. 粘土採掘坑発掘風景
P L 8 1. 粘土採掘坑C・D-44～46G(南から)
2. 粘土採掘坑小間割52
3. 粘土採掘坑小間割60遺物出土状態
4. 粘土採掘坑小間割69桶出土状態
5. IV区粘土採掘坑掘削痕
P L 9 縄文土器
P L10 縄文時代の石器
P L11 縄文時代の石器
P L12 縄文時代の石器
P L13 シルト質粘土層出土の古式土師器
溝の出土遺物
昭和60年度調査地区A区の出土遺物
粘土採掘坑の出土遺物
P L14 粘土採掘坑の出土遺物 陶器
P L15 粘土採掘坑の出土遺物 陶器(内面)
P L16 粘土採掘坑の出土遺物 磁器
P L17 粘土採掘坑の出土遺物 磁器(内面)
P L18 粘土採掘坑の出土遺物 土鍋(2) ほうろく
P L19 粘土採掘坑の出土遺物 瓦・火鉢
P L20 粘土採掘坑の出土遺物 鉄製品
P L21 粘土採掘坑の出土遺物 その他の土製品

本鄉尺地遺跡

I 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯

神流川の一支流である笹川は、藤岡市南部の小丘陵の庚申山の南側に源を発する。本河川の改修工事は過去数年間にわたって治水対策上、河道の変更と護岸工事等が実施されてきたが、藤岡市本郷地区がその対象になってきたのは昭和57年度以後である。即ち、昭和57年4月に県土木部河川課は当該地区の笹川の河川改修工事計画を立てるため、工事計画区域内の埋蔵文化財の有無の調査を県教育委員会文化財保護課に依頼した。文化財保護課は当該地区の埋蔵文化財分布調査を実施し、かなりの範囲に遺物の分布を認め、水田地帯については試掘の必要性を河

川課に回答した。

試掘調査は用地買収が一部進んだ昭和58年11月にJR八高線と藤岡市立東中学校の間について実施した。その結果、住居跡らしき遺構と浅間B軽石下の水田跡らしき遺構等を確認した。これらの遺構の取り扱いには文化財保護課、河川課、藤岡土木事務所の三者で協議され、記録保存の方針が確認された。

発掘調査は当初藤岡市教育委員会が担当することで話が進められていたが、諸開発の埋蔵文化財の発掘調査で藤岡市教育委員会の対応が難しくなり、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、事業団)が担当することで協議が整い、用地買収が進展した昭和60年度より発掘調査に着手した。

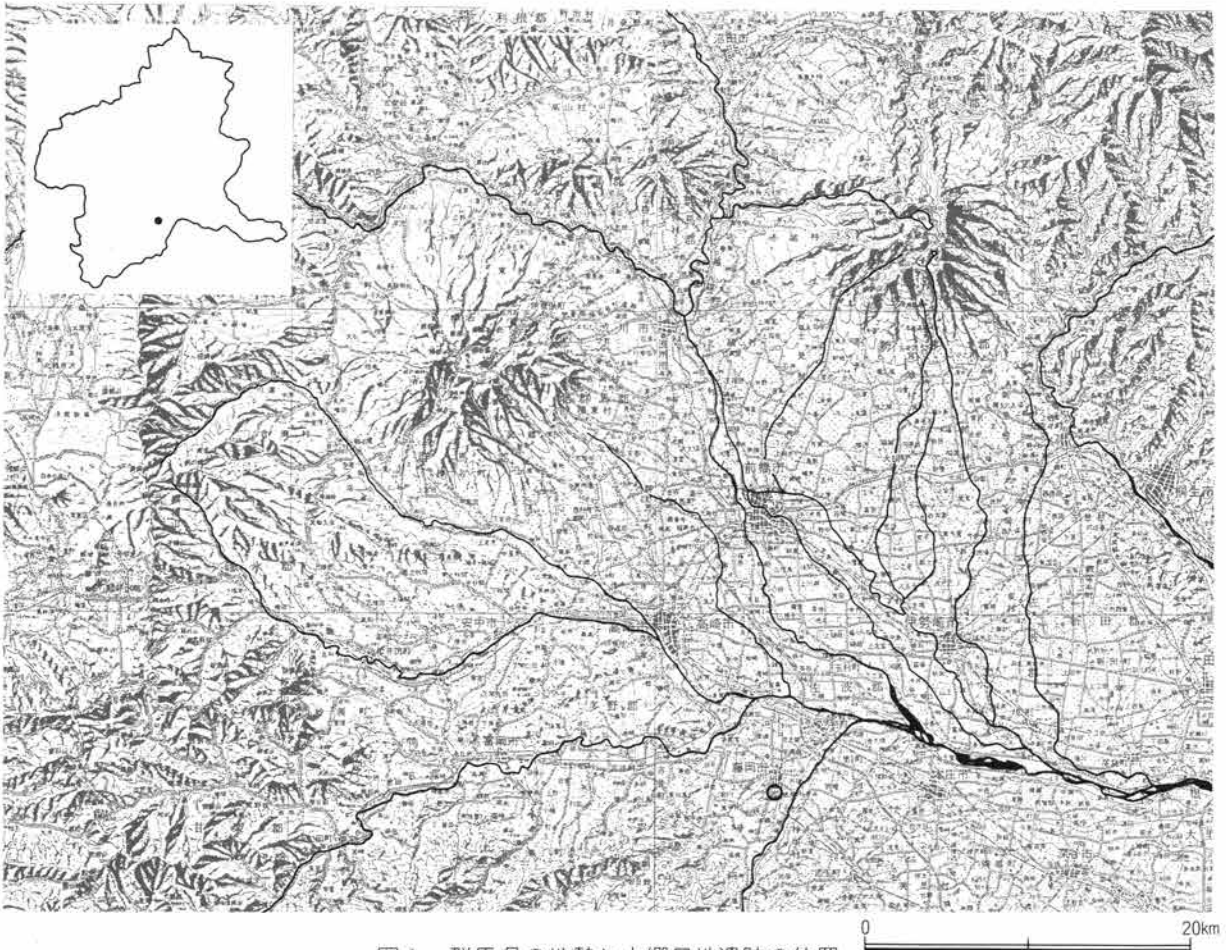


図1 群馬県の地勢と本郷尺地遺跡の位置

I 発掘調査の経過

昭和60年度の発掘調査は4月11日付けで県教育委員会より調査の正式依頼が事業団になされ、4月26日付けで藤岡土木事務所と事業団との間で昭和60年度の「一級河川笹川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約」が締結され、工事が急がされているJR八高線と市道7043号線及び国道254号線バイパス両側の水田の一部約1,075㎡を調査した。

次いで昭和62年度の調査は4月7日付けで発掘調査の委託契約を締結し、市道7043号線と国道254号線バイパスの間約3,000㎡を調査した。本年度の調査は対象地が水田地帯であり、しかも調査期間内に梅雨期がかかり、田植え期の用水路の確保、遺構内の排水等で調査が難行したが、関係者の努力で当初計画どおり調査を完了することができた。

昭和60・61年度の調査で国道254号線バイパスより下流の調査は完了したが、上流部分については用地買収が進展せず昭和62年度以後の対応となった。そこで発掘調査区域が国道で区切られることにより、関係者で協議し、国道より下流部分の発掘調査の遺物等の整理と報告書作成を昭和62年度に行うことにした。

以下に報告するところの内容は、昭和60・61年度に調査した成果であるが、当該区域の発掘調査に際しては終始地元藤岡市本郷田中地区の区長飯島治男氏、同大戸地区の区長戸田義雄氏、藤岡市開発公社、藤岡市企画開発部振興課、藤岡市教育委員会、藤岡市土木部道路課、藤岡土木事務所、藤岡土地改良区、にはご配慮をいただいた。ここに明記しておきたい。

2. 調査の方法と経過

調査範囲の選定 一級河川笹川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は昭和60年度、昭和61年度に調査を行い、継続して翌年度にも調査計画がある。河川改修地域における埋蔵文化財の包蔵地は、群馬県教育委員会文化財保護課の試掘によって明らかにされたが、発掘調査は河川改修工事工程との兼合いから分割して行うことになった。このため、調査区全体に対する統一的な調査方法がとれないため、年度毎に遺構測量は国家座標系に組み入れて、各調査区の遺構の関連性を把握できるようにした。

昭和60年度の調査 昭和60年度の調査は図2に示したとおり、三地区で実施した。A区は字尺地581番地を中心とする775㎡、B区は字田中東508—3番地の150㎡、C区は字田中東505—3番地の150㎡でいずれの調査区も狭小であった。

4月26日の契約から4月中は調査事務所の設営等の準備に務め、5月13日から本格的な調査を開始した。A区は事前の踏査で遺物の散布が確認できたため、重機により調査区全面の表土を排除した後、遺構確認のための精査を実施した。調査区の東端から1号溝を検出したが、西側は土層の識別が困難で遺構確認のための幅1mのトレンチを2ヵ所設定し、2～4号溝を検出した。なおA区からJR八高線までの改修工事対象地域は昭和58年時の試掘調査により遺構が存在しないことが明らかになっており、今回の調査区域からは除外した。B・C区はトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。土坑の存在する可能性のあるC区は精査を進めた。

各地区で検出した遺構の測量に際しては調査区域が点在し、かつ狭小であったことから遺跡内にグリッド等の設定は敢えて行わず、河川改修工事用の幅杭を基準として作図を実施した。そして次年度以降の調査に備えて多角測量を実施し、基準にした杭を国家座標系に組み入れた。

6月4日にA区の埋転を行い、調査のすべてを完

了し、以後調査資料の基礎整理等を行った。

昭和61年度の調査 昭和61年度の調査区は、図2のように市道7043号線(本郷字田中東566-1)から国道254号線バイパス北の昭和60年度調査B区までの約3,000㎡であった。発掘調査は5月6日から現地で調査を開始し、7月4日に終了した。

表土掘削は重機で行い、遺跡内中央から南と北に分けて土砂を送り出した。調査区は現行の道水路に分断されていたので、便宜的にその道水路を利用して5つの発掘区を設定した。発掘区ごとに深掘りのトレンチをいれ、全体的な土層の堆積状況をおさえながら表土を削平した。現状の地目は水田であったが、耕作土の堆積は薄く、床土まで含めて約30cmであった。遺構確認作業を行いながら、グリッドの設定をした。改修工事用のセンター杭がのっている直線を基準線とした5mのグリッドである。座標は西から東へアルファベット、北から南へ数字で表現し、北西の座標でグリッドを呼ぶことにした。

遺構の精査にあたっては、遺構と基本土層との関係、遺構の新旧関係等を理解するよう努めた。遺構の埋没土中の遺物と遺構の関係を知るために、必要に応じて土層観察用のベルトを残して調査を行った。遺物の取り上げは、遺構名、グリッド名、出土層位、出土年月日を記録した。遺構出土遺物で床面にあたるものについては、位置と標高を記録し、遺物番号を付して取り上げた。遺物の洗浄、注記は雨天の日に現地プレハブ内において行った。遺構図面の作成は平板測量によった。粘土採掘坑や溝の平面図には10cm間隔の標高による等高線測量をした。その他必要に応じて部分図等の作成を行った。

本調査の遺構・遺物の整理は昭和62年4月1日より6月30日までおこない、本書の刊行となった。整理の方法等については必要に応じて凡例に示した。

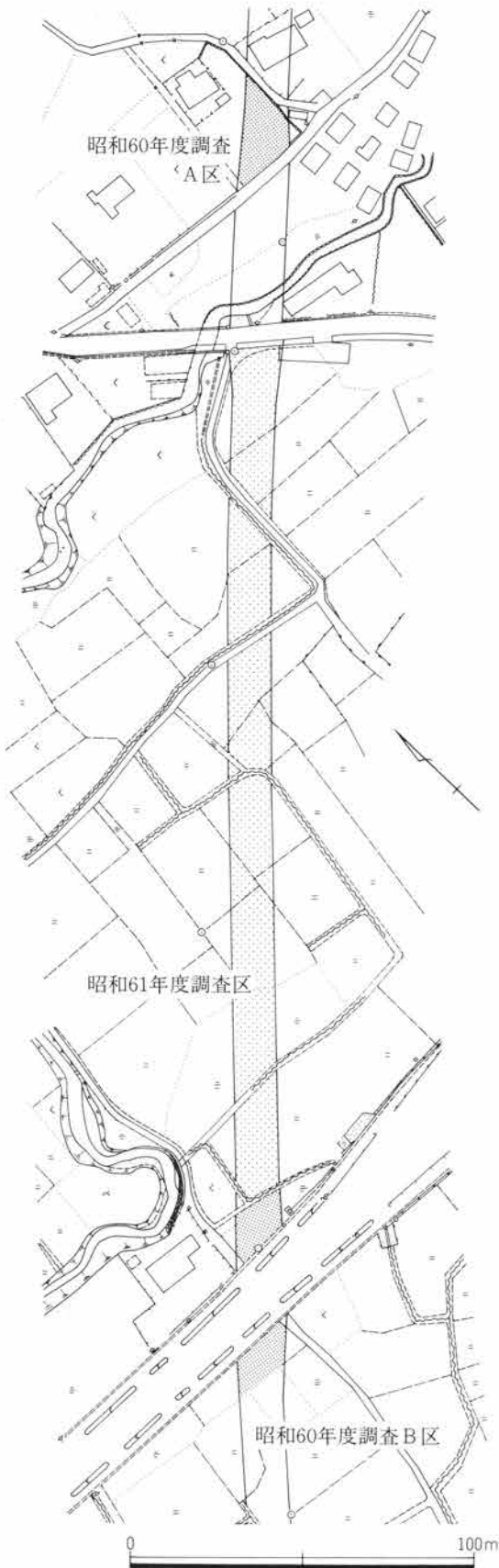


図2 本郷尺地遺跡の調査区

I 発掘調査の経過

3. 基本層序

図3-1は昭和60年度調査A区における基本土層図である。

I層は耕作土である。調査区の西側で10cm、東側で20~30cmと薄い。現状は畑地であったがシルト質の土粒を多く含み、耕作には適していなかったと思われる。

II層はやや茶味を帯びた灰褐色粘質土である。東側に向かって緩やかに傾斜していた。1号溝はこの層を掘り込んでいる。

III層は黒色粘質土である。2~4号溝はこの層を掘り込み、IV層に達している。2号溝の底面はV層に及んでいる。

IV層は灰白色シルト質土層で2号溝の壁面では途中で黒色土の薄い層が縞状にはさまれているのが認められた。

V層は灰黄色シルト質土層である。基本的にはIV層と同じであるが粗い砂粒が含まれている。

VI層は礫層で径5cm以下の円礫を中心としていた。調査区南東の掘り込みはこの層に達していた。なおA区では浅間A軽石層は確認されなかった。

C区の土層は基本的には昭和61年度調査区のそれと同様であったが、確認できたのはV層に相当する部分までである。浅間Bテフラも層としては確認で

きなかった。

図3-2は昭和61年度調査区の基本土層である。

I層は水田耕作土で、厚さ20~30cmである。最下部には赤褐色の鉄分凝集層が薄く見られる。

II層は灰黒色腐植質シルト層である。この土層中よりIV層を利用した粘土採掘坑の掘り込みが確認できる。

III層は浅間Bテフラ層である。遺跡内の一部で純堆積層が認められる。ほとんどはII層より掘り込まれた粘土採掘坑の埋没土に混じっていると見られる。

IV層は黒灰色シルト質粘土層である。この土は近代と考えられる土器生産に利用されている。本遺跡内でも1,800㎡に150基の長方形区画の粘土採掘坑を検出することができた。また本層中に縄文時代後期の土坑の掘り込み面がある。

V層は灰黄白色シルト質粘土層である。遺構との関係では、粘土採掘坑の多くが本層上面で採掘を止めている。また縄文時代の土坑の底面は本層まで達している。

VI層は灰色粘土質シルト層である。

VII層は礫層である。

VI・VII層は発掘調査終了時点で深掘りトレンチを設定して確認した。

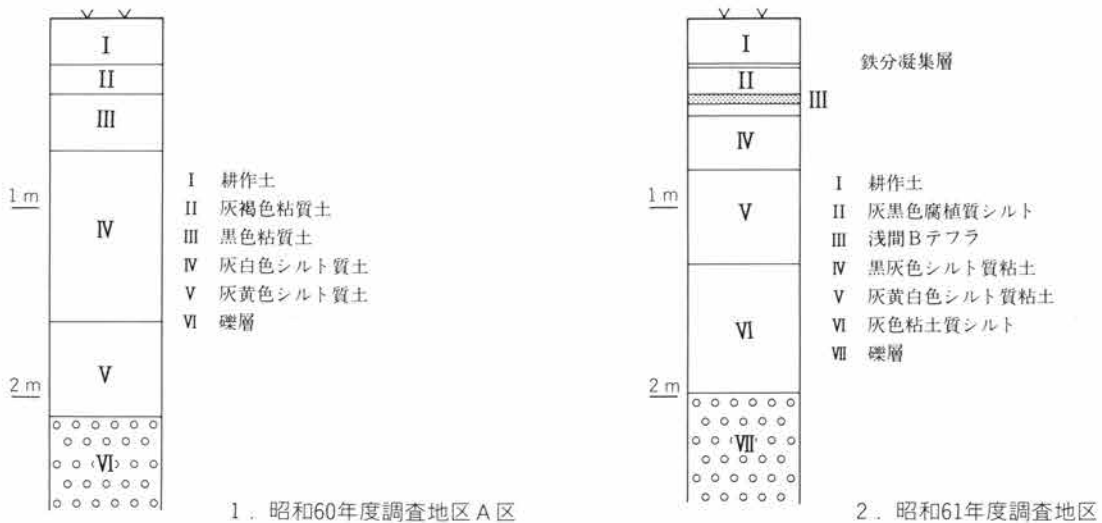


図3 本郷尺地遺跡の基本土層

I 発掘調査の経過

に特有の粘土層がある。この粘土層は「藤岡粘土層」と呼ばれ本地域の地場産業である瓦生産業の原料となっており、藤岡の風土形成に大きな役割を果たしてきた。藤岡粘土層は「水の中で育った」と言われている。この粘土層は降下した火山灰が水中に堆積し、粘土化したものと考えられている。台地部ではこの粘土層の上に風成の関東ローム層が堆積している。このローム層は上部ローム層で、Y P (板鼻黄色軽石層)、B P (板鼻褐色軽石層)が挟在しているが、このローム層中のB Pの堆積にラミナが見られることから上部ローム堆積の半ば頃までこの周辺に水域があったことが推定されているのである。また、藤岡台地の地表面は平坦であるが、少なくとも二条の侵食谷が確認でき、今でも帯条の凹地となっている。これらの沖積地は小規模であるが、この沖積地ぞいに遺跡が分布しているところもあり、埋積の過程では生産域として土地利用された可能性が高い。

神流川左岸の小林や本郷のある帯状の台地も、礫層の上に粘土層が堆積し、そのうえにY Pを挟む風成ローム層が堆積する段丘であり、藤岡台地より新しい地形面である。本書で報告する本郷尺地遺跡はこの段丘と藤岡台地の間に形成された笹川の沖積地内に立地する。笹川は、旧来「天水川」といわれ、庚申山や台地縁辺からのしみ出し水を集めて流れている。庚申山の東斜面や台地縁辺にため池がつくられた時期に沖積地の全面的開発が可能になったものと思われる。また、笹川に合流する庚申山の谷からの流れは「笹堀」と呼ばれていた。もとは山麓の水を集めたものと思われるが、周辺の方画地割の存在とともに沖積地開発の様子を示す資料として興味深い。

藤岡市の遺跡を概観すると、図4のようになる。この図は藤岡市教育委員会によって実施されている遺跡詳細分布調査の成果を編集して作成したものである。日野地区が未報告のため、本図には遺跡分布がプロットされていないが、遺跡の分布は増えるものと考えられる。

旧石器時代の遺跡は、庚申山山麓や西側の段丘などの安定した風成ロームの堆積があるところに検出

されている。しかし表採資料が多く、赤城山南麓のように発掘調査によって石器の内容や石器の広がりかたが明確になってはいない。先述した「藤岡粘土層」の形成と関連して旧石器時代の遺跡分布は考えていかなければならないだろう。

縄文時代の遺跡は台地の縁辺に数多く分布している。特に西側の段丘には小さな谷に区切られた尾根の一つ一つに並ぶように、中期を中心とした遺跡が立地している。また藤岡台地の縁辺には沖積土に埋積された後晩期の遺跡が立地するのが目立つ。沖積跡や谷地遺跡などがそれである。特に沖積跡ではそれらに連続する弥生時代中期の古い様相をもつ土器も出土している。

農耕社会に入ってから遺跡は鮎川や神流川に注ぐ小河川ぞいに点々と分布する。特に緑埜や白石、芦田町周辺、本郷・小林、下栗須の台地部などは遺跡の分布が多く、古墳や古墳群の分布も集中している。遺跡の継続性を加味してみると、これらの地域はやや広い沖積地ぞいにあり弥生時代の後期から農耕集落が成立している伝統集落地域であり、古墳時代から奈良・平安時代まで遺跡が継続して営まれている。藤岡地域全体の中でそれぞれ中心的な地点である。さらに下栗須の南の沖積地内の温井川ぞいにも奈良・平安時代になると遺跡が分布するようになる。図4の範囲からは除外したが、藤岡市北部の沖積地帯では、関越自動車道や上越新幹線の事前発掘調査で奈良・平安時代を中心とした遺跡の発掘調査が実施されている。

また鮎川上流の丘陵部にはこの時期に瓦窯跡や須恵器の窯跡が多く造られるようになり、窯跡群を形成している。ここで作られた瓦はいわゆる国分寺瓦で、また須恵器は群馬県内の古墳や集落遺跡からの出土遺物の中に見られることが、胎土分析の結果などからわかっている。

II 検出された遺構と遺物

1. 昭和60年度調査地区

A区は笹川の右岸の沖積地内に立地し、北西0.2kmの台地上には諏訪神社古墳がある。遺跡地内の地層は約20cmの耕作土の下に、さらに粘質土、シルト層が1.6mが続き、礫層に達している。北半部は層序が乱れ、トレンチを入れた結果、笹川に及ぶまでの範囲で攪乱を受けていた。またA区は耕作土中に埴輪片が多量に混じっていたが、古墳の検出はなかった。周辺小古墳が近年の開発等で壊され、この土砂が客土として持ち込まれたものであろう。検出された遺構は南半部の溝四条である。

1号溝

1号溝はA区中央に検出された。走向は $N0^{\circ}E$ で南北に走る幅の細いものである。上幅0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。底面のレベルは北端が南端より10cm低くなっているが溝の規模からすると流水のあった溝とは考えにくい。埋没土も径1~2mmの灰白色の軽石(As-Aと考えられるが断定できない)を霜降り状に含む灰褐色土一層である。地割に関連する遺構と考えられる。

2号溝

南半部に検出された東西南方向の溝である。3・4号溝と重複して検出された。走向は $W5^{\circ}N$ であ

る。上幅は西端で2.25m、深さは1.3mを測る。埋没土は、上層が、粘性のある暗灰褐色土、中層が、砂と暗灰褐色土のラミナ、下層が、地山灰白色シルト質土ブロックを混入する砂層である。底面の高さは東に向かって下がるが、起伏に富み凹凸が激しい。溝底面に水流によると思われるウォーターホールが多数見られ、内部には砂粒が堆積していた。

3号溝

南北に走り、2号溝と交差・重複する。2号溝との交差部以北の走向は $N5^{\circ}W$ 、以南は $N40^{\circ}W$ に方向を変える。溝幅は北端で3.5m、深さは1.0mを測

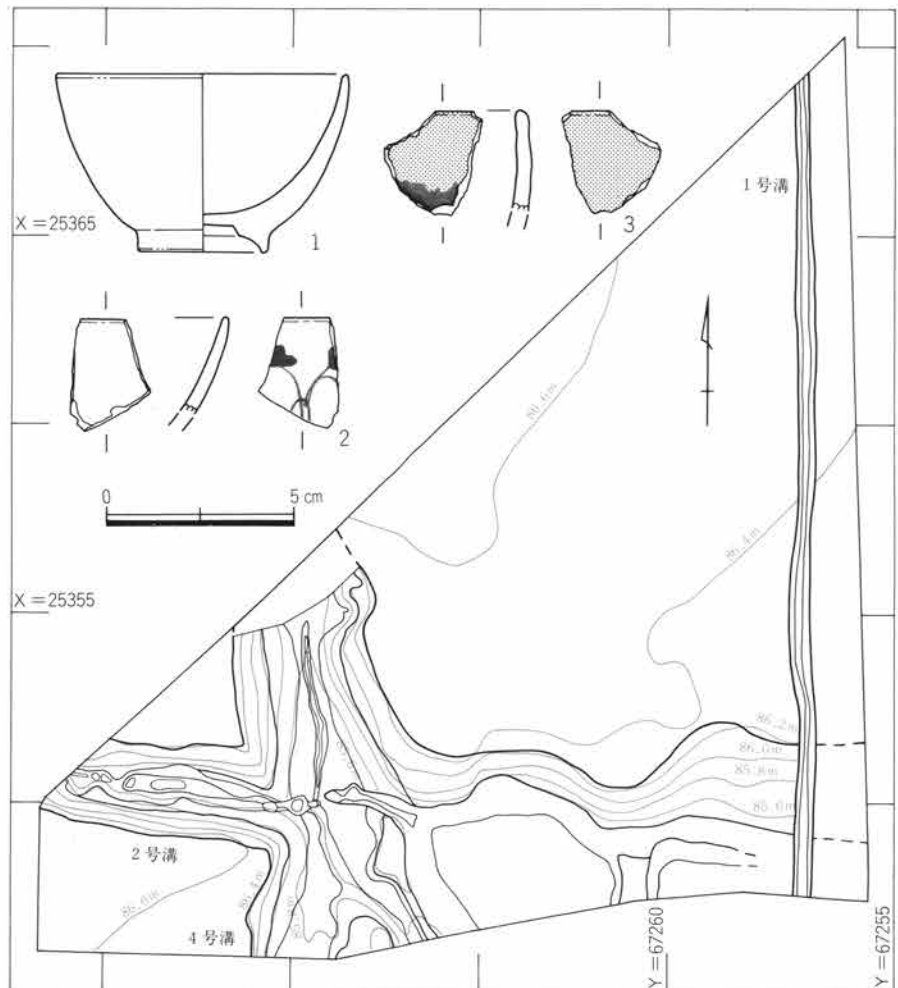


図5 A区の溝と出土遺物

II 検出された遺構と遺物

遺物観察表1 A区の出土遺物 (図5・P L16.17.18)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
1	磁器 小碗	61年度調査 地区A区	口縁～底部	白色・硬・白磁釉	高台部を除き、施釉。露胎部は器面が荒れ、型押しと思われる痕跡あり。	伊万里系 20C
2	磁器 小碗	61年度調査 地区A区	口縁部片	白色・硬・染付	外面に呉須による草文が施される。	伊万里系 18C
3	陶器 碗	61年度調査 地区A区	口縁部片	淡黄灰色・並・鉛釉	内外面に施釉。外面にログロ目あり。	美濃焼 18C

る。底面幅は1～1.5mとやや広いが、中央にさらに一段低い幅0.4mほどの小溝があるのが特徴である。埋没土は上層は灰色味のある茶褐色土、中層は暗灰褐色の粘質土、その下層は砂層である。

4号溝

南北に走向の溝である。2・3号溝が交差した地点からN18°Eの方向に検出された。南端で上幅2.3

m、深さ1.1mを測る。埋没土は、上層は灰色味のある茶褐色土、以下は砂粒の混入は少なく、中層はやや灰色味の強い褐色粘質土、下層は黒色味の強い褐色粘質土である。他の三条の溝に比べて水流の痕跡は乏しい。

この他に、四条の溝が交わる部分の東側に幅5.3m以上、深さ1.9mの落ち込みを確認した。落ち込みの南側は調査区域外に広がり、南限を確認することはできなかった。底面はほぼ平坦である。埋没土はやや粘性のある灰褐色土からなる。底面近くには砂粒が堆積し、他の一連の遺構との関連性を示している。埋没土中から木の枝が出土したが、あまり炭化は進んでいなかった。また埋没土の下層から近世～近代と思われる陶磁器片が3片出土した。

B区は100㎡に満たない狭い範囲の調査となり、幅3mほどのトレンチを入れたに止どまった。調査では幅5mを計る落ち込みの断面を確認した。調査の時点では南北方向に延びる溝状の遺構の一部であろうとの見通しを持っていたが、61年度調査でB区の北側を調査した際には溝の延長は検出できなかった。

C区では西寄りで土坑一基を検出した。この土坑は、地山の灰白色粘土を掘り込んでおり、埋没土は、やや粘性のある暗灰褐色土である。土坑は長さ2.43m、最大幅1.36mの楕円形を呈し、深さは40cm程である。長軸方向はN20°Eで、底面には直径20cm程の小穴が3基並んで検出された。穴列の方向はやや長軸とずれており、N10°Eである。形態的には縄文時代の陥し穴と思われる。埋没土からは非常に摩耗した縄文土器片が一片出土している。

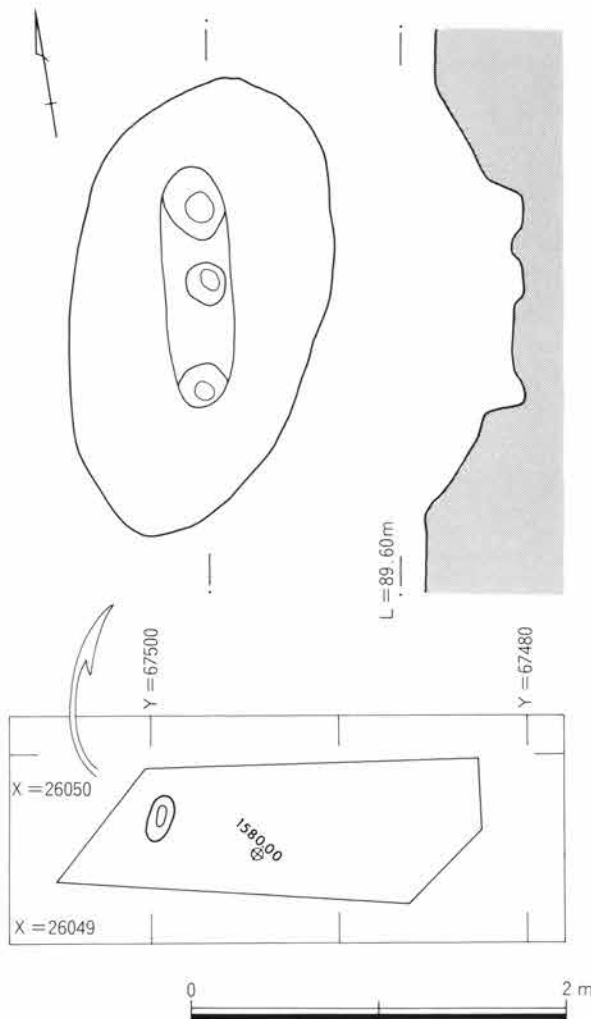


図6 B区の土坑と出土遺物

2. 昭和61年度調査地区

(1) 縄文時代の遺物包含層と土坑群

縄文時代の土坑及び遺物包含層はⅢ区の中央よりややⅣ区寄りで確認された。土坑群は北西側に傾斜する微高地の末端で検出されたものである。包含層の遺物と土坑群を重ね合わせるとかなりの部分が、その上に重なってくるが、それよりも南に若干はず

れた部分に二か所ほどの集中部が認められた。

1号土坑

平面の形状はやや変形の楕円形を呈し、大きさは長径1.45m×短径1.15mを測る。北半部に段を有し南半部が深く、二か所の底部を有する。ほぼ中央のものが、確認面より0.52mであり、南の浅い方が0.46mである。西側に寄った中心の深い部分と段に近い



図7 縄文時代の遺物包含層

II 検出された遺構と遺物

部分から、粗製の深鉢形土器がまとまって出土している。

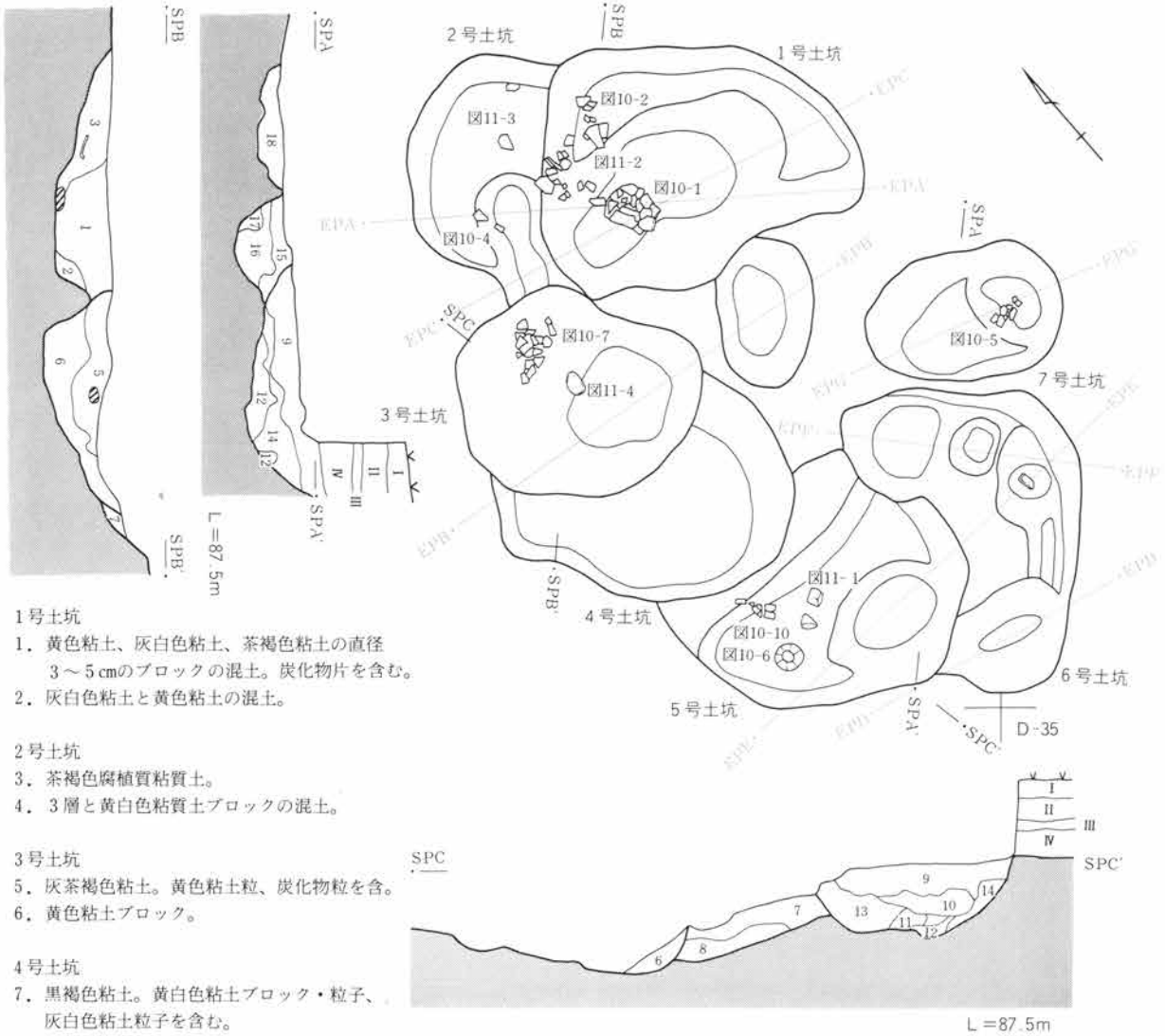
2号土坑

東半部分は1号土坑に切られるため、全体の平面形状は不明であるが、ほぼ楕円形を呈するものと考えられ、大きさは現存部分が1.10m×0.62mを測る。南寄りが長楕円形に一段深くなり、確認面からの深

さは0.25mである。遺物は4点が散在的に出土している。

3号土坑

平面の形状はほぼ楕円形を呈し、大きさは長径1.13m×短径0.92mを測る。東寄りの部分が最も深く、確認面より0.50mである。遺物は西半の一段高い部分から、深鉢形の粗製土器と敲石が出土している。



1号土坑

1. 黄色粘土、灰白色粘土、茶褐色粘土の直径3～5cmのブロックの混土。炭化物片を含む。
2. 灰白色粘土と黄色粘土の混土。

2号土坑

3. 茶褐色腐植質粘質土。
4. 3層と黄白色粘質土ブロックの混土。

3号土坑

5. 灰茶褐色粘土。黄色粘土粒、炭化物粒を含む。
6. 黄色粘土ブロック。

4号土坑

7. 黒褐色粘土。黄白色粘土ブロック・粒子、灰白色粘土粒子を含む。
8. 黄白色粘土ブロック。しまり弱い。

5号土坑

9. 茶褐色粘質土。炭化物片、微細砂、黄白色粘土ブロックを含む。
10. 黒褐色粘土ブロックと黄褐色粘質土の混土。微量の細砂を含む。
11. 黄白色粘土ブロックに少量の黒褐色粘土ブロックが混じる。
12. 黒褐色粘土ブロック。
13. 茶褐色土。黒褐色粘土、灰白色粘土、黄白色粘土のブロックを含む。
14. 黄白色粘土と黄褐色粘土ブロックと黄褐色土の混土。炭化物片、細砂を少量含む。

6号土坑

15. 茶褐色粘質土。9層よりも明るい色調を呈する。砂を少量含む。
16. 黒褐色粘土。直径3～5cm前後の茶褐色粘質土ブロックを含む。しまりは良い。
17. 黄白色粘土と少量の黒褐色粘土の混土。

7号土坑

18. 茶褐色粘質土。少量の黒褐色粘土ブロックと黄白色粘土ブロックを含む。

図8 縄文時代の土坑群

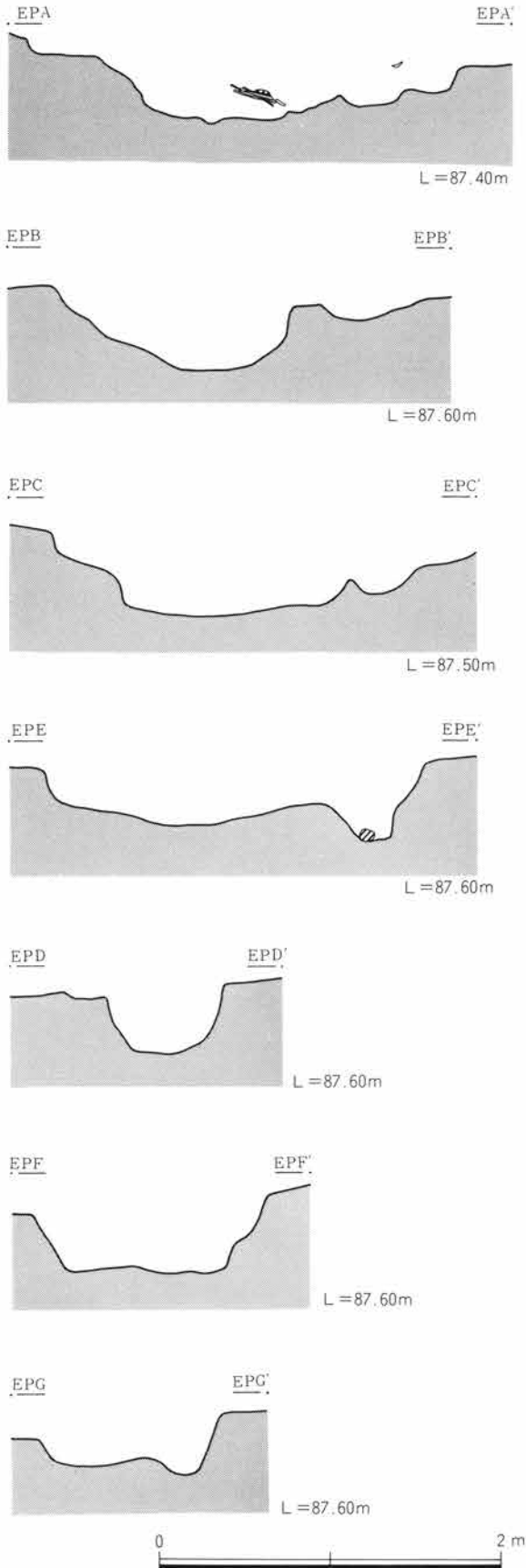


図9 土坑群の横断面

1号土坑よりも新しい。

4号土坑

北西部分は3号土坑に切られるため明瞭ではないが、全体の平面形状はほぼ楕円形を呈するものと思われる。大きさは長径1.40m×短径1.06mであり、ほぼ中央が最も深く、確認面より0.40mを測る。底面より出土している遺物は無い。

5号土坑

全体の平面形状はほぼ楕円形を呈する。大きさは長径1.27m×短径1.11mを測る。東に向かうに従って深くなり、二つのテラス状の段を有する。東端が最も深く、確認面より0.45mを測る。遺物は中央のテラス状の部分から楕円形礫と粗製土器片が出土している。4号土坑と6号土坑よりも新しい。

6号土坑

全体の平面形状は不定円形を呈する。大きさは現存部分で長径1.50m×短径0.69mであり、四か所の深い部分を有する。北西部のものから東まわりに順に、0.35m、0.35m、0.60m、0.40mを測る。遺物は一点礫が出土している。5号土坑に切られる。

7号土坑

平面の形状は楕円形を呈し、長径0.90m×短径0.60mを測る。東側が深く、西側には段を有する。段の部分が確認面からの深さは0.16m、最も深い部分は0.36mである。遺物は東側の最も深い部分から出土している。包含層として取り上げた図12-1の土器は本土坑の直上より出土していた破片が接合したものである。単独に存在するため、他の土坑との切り合いは認められない。

8号土坑

平面の形状は楕円形を呈し、長径0.68m×短径0.44mを測る。7号土坑よりもひとまわり小さいが、全体の形状は類似する。ほぼ中央が最も深いのが、0.14mしか深さはない。本土坑の南側の直上より、図12-2が出土している。1号土坑との切り合いが認められるが、新旧関係は不明である。

II 検出された遺構と遺物

土坑出土の土器(図10)

1は胴部上半から口縁部にかけて外側に直線的に開いて立ち上がる深鉢形を呈する粗製土器である。器面は荒れており剥脱している部分が多くて観察しにくい。調整は外面が削り、内面はナデと思われる。口縁部内面の粘土の接合部には一条の沈線が巡る。胎土には直径1mm前後の砂粒を多く含む。焼成は普通だが、やや脆弱。色調は、明褐色～暗褐色を呈するが、内面の口縁部の一部は灰白色を呈する。1号土坑出土。

1号土坑出土。

2は深鉢形を呈する土器であり、口縁部がくの字状に内湾する。くの字状に張り出した頂部よりもや

や上に一条の浅い沈線が巡る。その上には縄文が施されている可能性があるが、器面の剥脱が著しく不明である。内外面ともによく磨いている。胎土には直径1～3mm程度のやや粗い砂粒を多量に含む。焼成は普通であるが、いたみは顕著である。色調はほぼ明褐灰色を呈するが、外面の一部は橙色を呈し、内面の下部は部分的に黒変している。1号土坑出土。

3は体部がソロバン玉状を呈する鉢形土器である。体部上半には上向きの弧線文を有し、その連結部には円形刺突文及び一条の縦沈線が配される。くの字状に張り出した体部には刻文が施され、その上に一条の横方向の沈線が巡る。体部下半には横方向

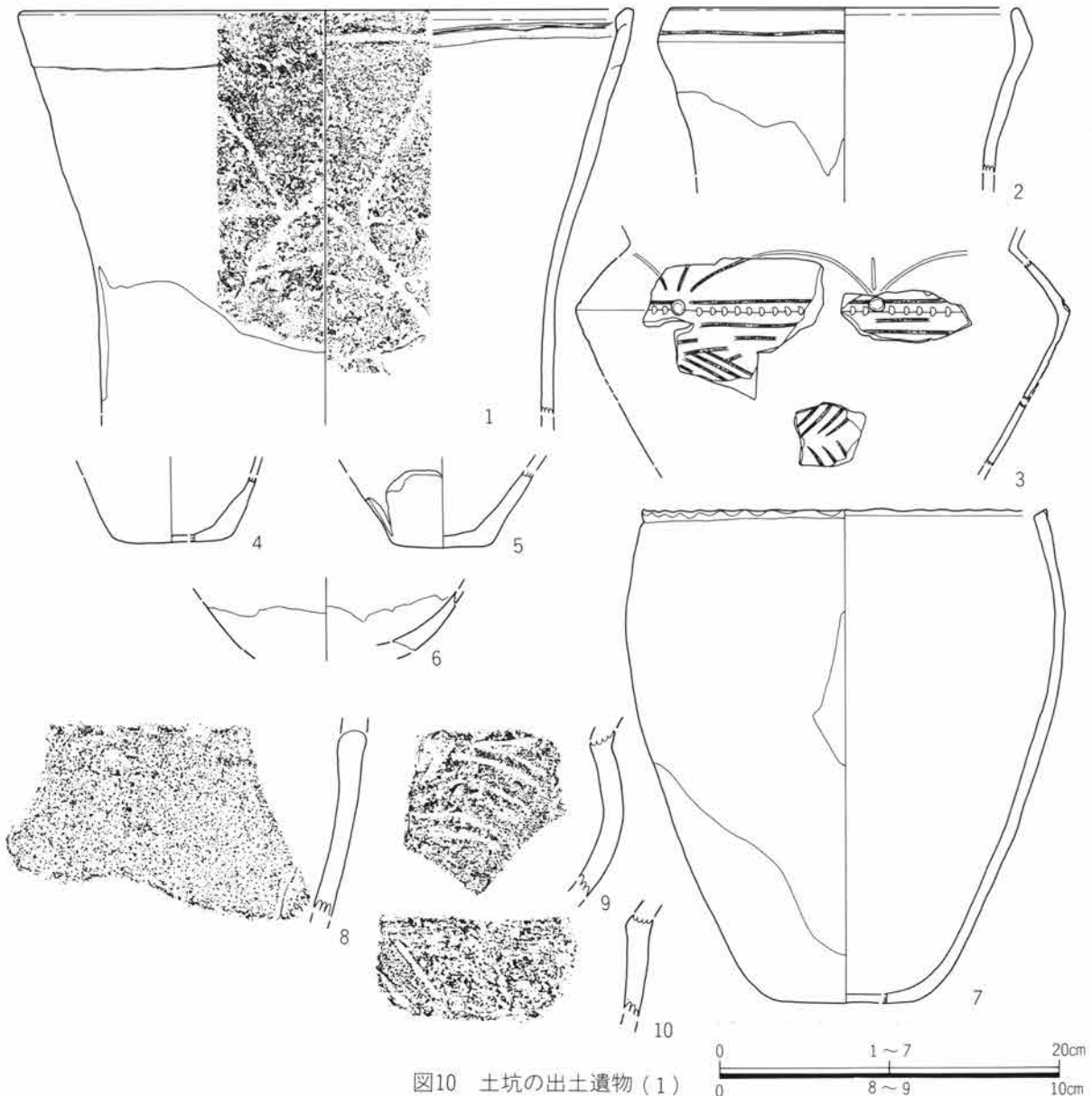


図10 土坑の出土遺物(1)

の二条の平行沈線が、その下には矢羽根状を呈する斜条線文が施文されている。胎土は1に類似する。焼成は比較的良好。色調は外面がにぶい赤褐色を呈し、内面は褐灰色を呈する。3号土坑出土。

4は深鉢形土器の底部であり、器面はかなり荒れており、文様等は不明である。底部中央と胴部は非常に薄くなっている。胎土・焼成は同上。色調は外面底部が淡い赤褐色、外面胴部が暗赤褐色、内面は褐灰色である。2号土坑出土。

5は鉢形土器の底部と思われる。底部中央のみは比較的薄いが、その他はやや厚手につくられている。底部外面は上げ底状にわずかに凹む。胎土は1に近いが、やや粗い。焼成は同上。色調は外面は淡い赤褐色、内面は褐灰色である。7号土坑出土。

6は鉢形土器の底部近くの部分であり、上から見るとドーナツ状に現存しているが、底部はない。調整は内外面ともに磨きである。胴部はかなり薄手である。胎土は1に類似、焼成は良好、色調は淡い灰黄褐色を呈する。5号土坑出土。

7は胴上部に最大径をもち、口縁部がやや内湾する深鉢形土器である。口唇部はやや肥厚し、つまみ痕を有する。器面は剝脱が顕著であるが、外面はヘラ削りしているものと思われる。かなり薄手につくられている。胎土は同上、焼成は比較的良好。色調は外面が淡赤褐色、内面は黒褐色を呈する。1号土坑出土の破片と3号土坑出土の破片が接合した。

8は口縁部破片であり、上端部につまみ痕を有する。文様・胎土・焼成・色調ともに7に類似する。4号土坑出土。

9は胴部にくびれを有し、口縁部にかけて直線的に立ち上がる鉢形土器のくびれ部下の胴部破片であり、外面には斜め右下がりの斜条線文を有し、破片の右側にはそれに直交するように一条の条線が認められる。胎土はかなり細かく、1～2mm程度の砂粒をわずかに含む。焼成は良好。色調は内外面ともに黒褐色を呈する。5号土坑出土。

10は深鉢形土器の胴部破片であり、外面下半部に斜め右下にさがる条線文を有する。内面は磨き。胎

土は1に類似。焼成は普通であるがやや脆弱。色調は内外面とも黒褐色を呈する。5号土坑出土。

土坑出土の石器(図11-1～4)

1は上部が厚く、下半部が比較的薄い不定形礫であり、上端の一部が欠損している。5号土坑内で出土した上部破片と下部破片が接合したものである。

2は楕円形偏平礫を利用した敲石であり、両側は欠損している。上下両端に敲打痕を有する。1号土坑出土。

3は下半部が欠損しているため全体の形状は不明であるが、平面形はほぼ楕円形を呈するものと思われる。片面が平坦で、底面が盛り上がり、断面形は薄いカマボコ状を呈する礫である。2号土坑出土。

4は上部が丸く、右下端が突出する不定形礫を素材とした凹み石であり、表面側のほぼ中央に凹みを有する。横断面形をみると左側がやや薄く、右側が厚い。3号土坑出土。

包含層出土の土器(図12)

1はひさご形を呈する土器であり、口唇部外縁にヘラ状工具により刻みを施し、その下に沈線文、さらに間隔をおいてもう一条の沈線文を配し、その間にRLの縄文を充填している。頸部には磨いたままの無文帯を有し、くびれ部には上下を沈線文で区切った間をヘラ状工具により刻みを入れている。胴部は磨いた後に沈線による交互連弧文を配し、その中に縄文を充填している。胴下半部にも沈線を有し、その下に縄文を施しているが、底部に近い部分にまでは及ばない。内面は横方向に磨いている。ひさご形を呈する土器には口縁部に孔を有するものが多い。この場合には現存部分に孔は認められないもののそれがあつた可能性は高い。胎土は他の土器に比べてかなり細かい。焼成は比較的良好であるが、剝脱が顕著でありいたみがはげしい。色調は内外面とも赤褐色～暗褐色を呈する。C-45Gの7号土坑の上より出土。

2は体部がソロバン玉状に張り出す鉢形土器であ

II 検出された遺構と遺物

り、体部上半には上向きの弧線文を有し、連結部には円形刺突文を配し、その上に縦沈線文を施している。体部のくの字状に張り出した部分よりも少し上には横方向の沈線が一条巡り、その下には縄文が施される。さらにその後くの字状に張り出した頂部に刻み文を施している。体部下半部は横方向の一条の沈線文を配した後に矢羽根状に交互の斜条線文を施している。胎土・焼成は図10-3に類似する。色調は外面がにぶい赤褐色～褐灰色、内面は灰褐色を呈する。C-34Gの8号土坑の上より出土。

3は深鉢形を呈する粗製土器であり、胴部はやや丸みをもちながら立ち上がる。調整は外面が削り、内面がナデである。両面とも剝脱が顕著である。胎土はやや粗く、直径3～5mm程の砂粒も含まれる。

焼成は普通であるがやや脆弱。色調は外面は赤味を帯びる橙色であるが、半分は焼成後の火熱を受け赤褐色を呈し、内面は灰褐色を呈する。C-34G及びC-35G出土の破片が接合したものである。

4は深鉢形を呈する粗製土器であり、胴部はやや開きみに直線的に立ち上がる。調整は外面が削り、内面はナデである。胎土は2に類似し、3よりも細かい。焼成は比較的良好。色調は外面がやや黄色味を帯びるにぶい赤褐色を呈し、内面は暗灰褐色を呈する。C-34Gの4号土坑の上より出土。

5は口縁部が波状を呈する鉢形土器の口縁部であり、器面の剝脱が顕著であり、文様・調整等は不明である。胎土はやや粗く、直径2mm前後の砂粒を多めに含む。焼成は比較的良好。色調は内外面ともに

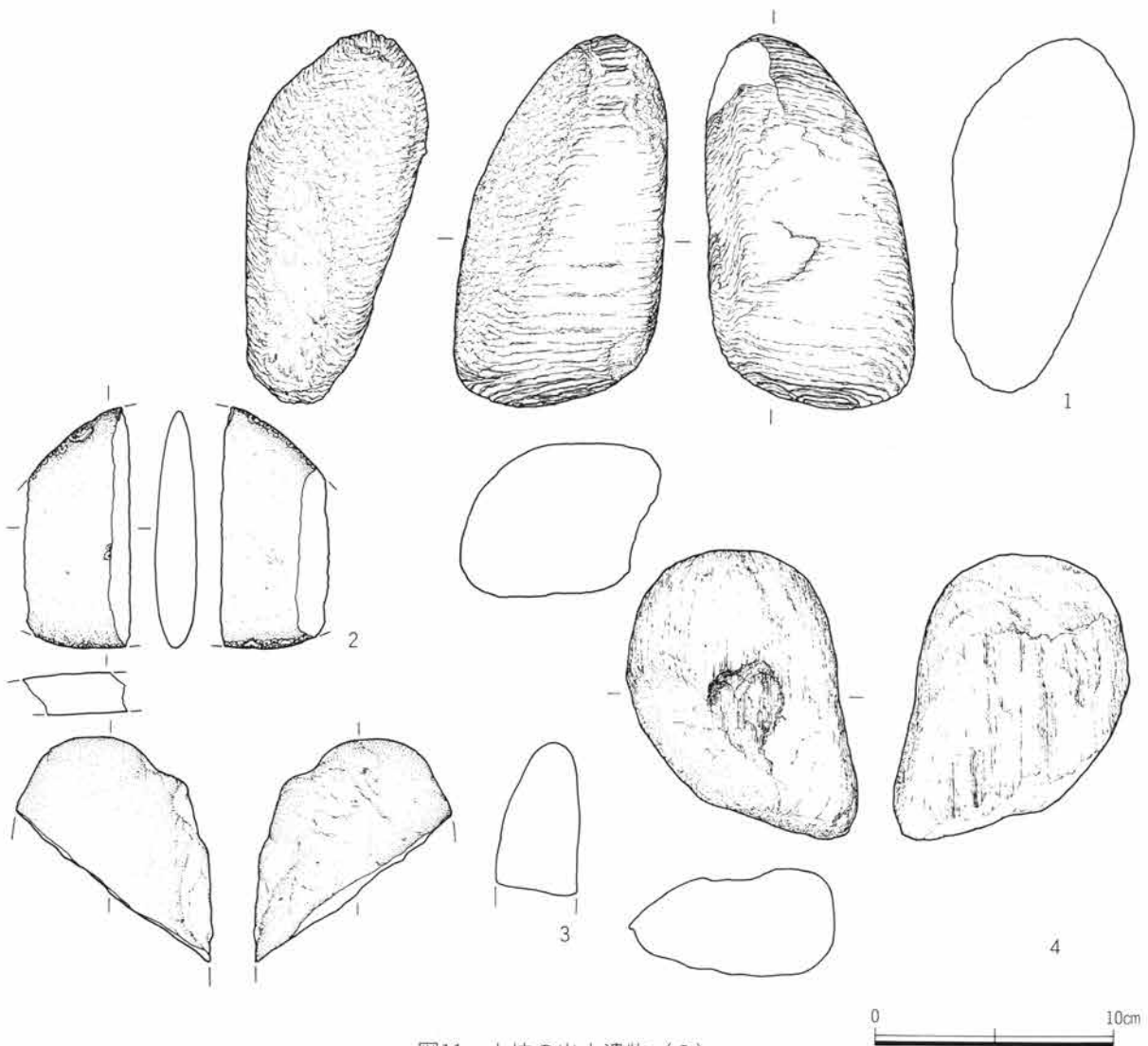


図11 土坑の出土遺物(2)

黒褐色を呈する。D-34G出土。

6は口縁部がラッパ状に開く鉢形土器であり、口縁部は肥厚し上面に平坦面をもち、その内側が張り出す。外面口縁部と括れ部には粘土接合のためのナデ付け痕を有する。胴部の立ち上がりは比較的丸い。胎土は2に類似するが、粗い砂粒も含まれる。焼成は良好であるが、やや脆弱。色調は外面が灰褐色～

橙色、内面は灰白色～黒褐色である。C-35G出土。

7は深鉢形を呈する粗製土器の口縁部であり、口唇部が外側に肥厚しその部分にかなり単位の大きなつまみ痕を有する。器面が荒れているため調整は不明である。胎土はやや粗く、直径2～3mm程の砂粒を多めに含む。焼成は不良。色調は内外面ともに黄色味を帯びる明赤褐色～褐灰色を呈する。C-34G

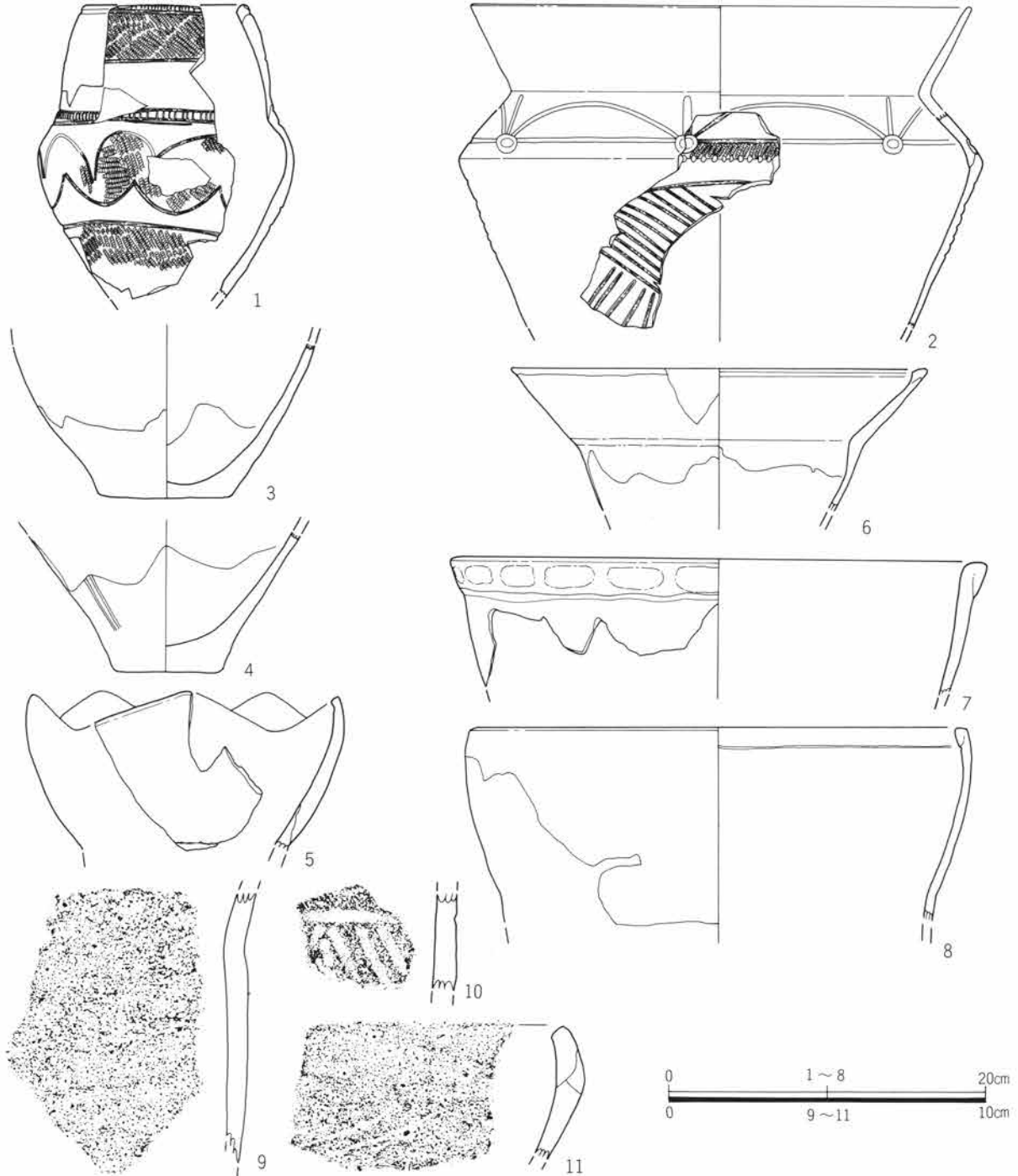


図12 包含層の出土遺物(1)

II 検出された遺構と遺物

出土。

8は深鉢形を呈する粗製土器であり、口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、口唇部は内側に肥厚する。内側の粘土接合部には一条の沈線状のナデ付け痕を有する。全体的にかなり薄手である。内面は横方向に良く磨いているが、外面の調整は剥脱が顕著なため不明である。色調は内外面ともに、淡い茶褐色を呈する。D-34G出土。

9は深鉢形を呈する粗製土器の体部破片であり、調整・胎土・焼成・色調ともに8に類似する。C-34Gの7号土坑上より出土。

10は横方向に一条のやや太めの沈線を配し、その下にも右斜め下方向に平行沈線を施し、左下には斜め左下に同じ工具により刺突を加えている。胎土は非常に細かく、直径1mm以上の砂粒は含まれない。焼成は良好。色調は内外面ともに茶褐色を呈する。D-34G出土。これ一点のみ称名寺式である。

11は鉢形を呈する土器の口縁部破片であり、下半部には斜め右上がりに斜条線文を有する。くの字状に張り出した頂点よりも上には縄文が配されるものかと思われるが、剥脱が顕著なため明瞭ではない。内面はナデ。胎土は2に近いが若干粗い。焼成は比較的良好。色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色を呈する。D-35G出土。

包含層出土の石器(図13-1~3、図14-1~6)

図13-1は分厚いジャガイモ状の礫を利用した敲石であり、突出した部分を敲打面として使用している。敲打により一部剥落している。C-34G出土。

2は表裏とも平坦な隅丸方形の礫を用いた敲石であり、周辺部に弱い敲打痕を有する。C-35G出土。

3は平面形は菱形の角が丸くなった形状を呈し、表面側が盛り上がり、裏面側が平坦であり、断面形は低い山形を呈する。裏面のほぼ中央に凹みを有する凹み石である。C-34G出土。

図14-1は小形の偏平礫であり、形状は上が丸く、下縁が直線的な半円形を呈する。表裏両面は比較的滑らかになっているが、研磨かどうかは石質上判定

しがたい。C-35G出土。

2は横長剥片を利用した使用痕を有する剥片であり、下端には帯状に自然面を残す。直線的な右側縁には比較的細かい剥離痕を有する。縦断面形からすると、上端が薄く、中央部が厚く、下端が中央よりもやや薄くなっている。D-35G出土。

3は断面が正三角形に近い下端がやや幅広の細長い礫を用いた敲石であり、上端及び胴部中央よりやや下の稜の部分に敲打痕を有する。とくに胴部にみられるものは稜部を敲击潰して凹ませて、これ自体を整形しようとしたものとも考えられるものである。C-34G出土。

4は平面形がやや縦長の方形を呈する剥片であり、上端には自然面を残す。縦断面形をみると上端がやや厚く、下に向かうに従って薄くなり、下端は鋭く尖る。下端の縁辺部は使用しているものと思われる。C-34G出土。

5はほぼ円形に近い偏平礫を素材とした礫器であり、表面側は下端に、裏面側は上端に剥離痕を有する。側面下方には敲打痕を有する。表面側がやや盛り上がり、裏面側が平坦であり、断面形は低いカマボコ状を呈する。C-35G出土。

6は磨石・敲石・凹み石であり、三つの機能を有するものである。楕円形礫を素材としている。表面と裏面の平坦部は磨石として、側面及び上下両端は敲石として利用され、そして表面のほぼ中央には凹みを有する。C-34G出土。

その他の縄文時代の石器(図15~図18)

図15-1は磨石・敲石であり、楕円形礫を素材としている。両側面は敲打により比較的平坦になっている。表面側は磨滅が認められ、かなり滑らかになっている。4号溝出土。

2は細長いサツマイモ形の敲石であり、表面側に敲打痕が認められる。裏面は側面からの打撃により剥離されている面が残るが、その他はかなり磨滅している。断面はカマボコ状を呈する。4号溝より出土。

2.昭和61年度調査地区

3は楕円形礫を素材とした
 敲石・凹み石であり、表裏両
 面に凹みを有し、上下両端に
 は弱い敲打痕が認められる。

4号溝より出土。

4は敲石・凹み石であり、
 表裏両面に凹みを有し、両側
 面には敲打痕が認められる。
 楕円形礫を素材としている。
 断面形はほぼ凸レンズ状を呈
 する。4号溝出土。

5は磨石・敲石・凹み石で
 あり、表裏両面に磨痕及び凹
 みを有し、両側面を中心とし
 て敲打痕が認められる。やや
 細長い楕円形礫を素材として
 いる。裏面は側面からの打撃
 により欠失しており、敲打の
 際に欠損したものと考えられ
 る。4号溝より出土。

6は敲石であり、上下両端
 に平坦面をもつ。上部がやや
 幅狭で、下端が幅広の細長い
 礫を素材としている。横断面
 形は不定形な楕円形を呈す
 る。8号溝出土。

図16-1は磨石であり、か
 なり大形の礫を素材としてい
 る。表面側の一部に磨滅痕が
 認められる。裏面側が比較的
 平坦で表面側がやや盛り上が
 り、横断面形は低いカマボコ
 形を呈する。下半部は欠損し
 ている。C-35G出土。

2は隅丸長方形の礫を素材
 としたかなり大形の凹み石で
 あり、表面には五つの凹みを
 有する。下半部は欠損してい

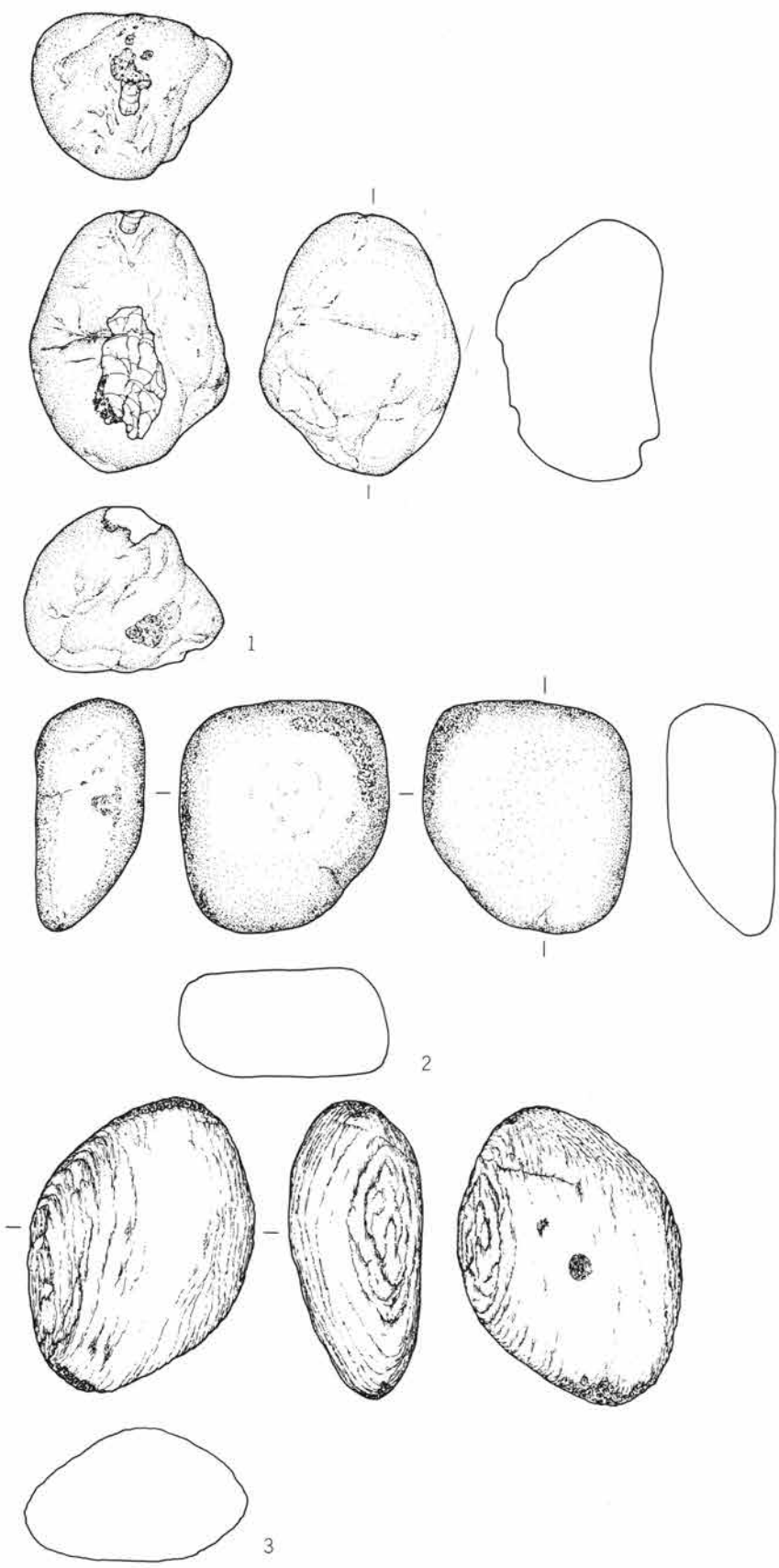


図13 包含層の出土遺物 (2)

II 検出された遺構と遺物

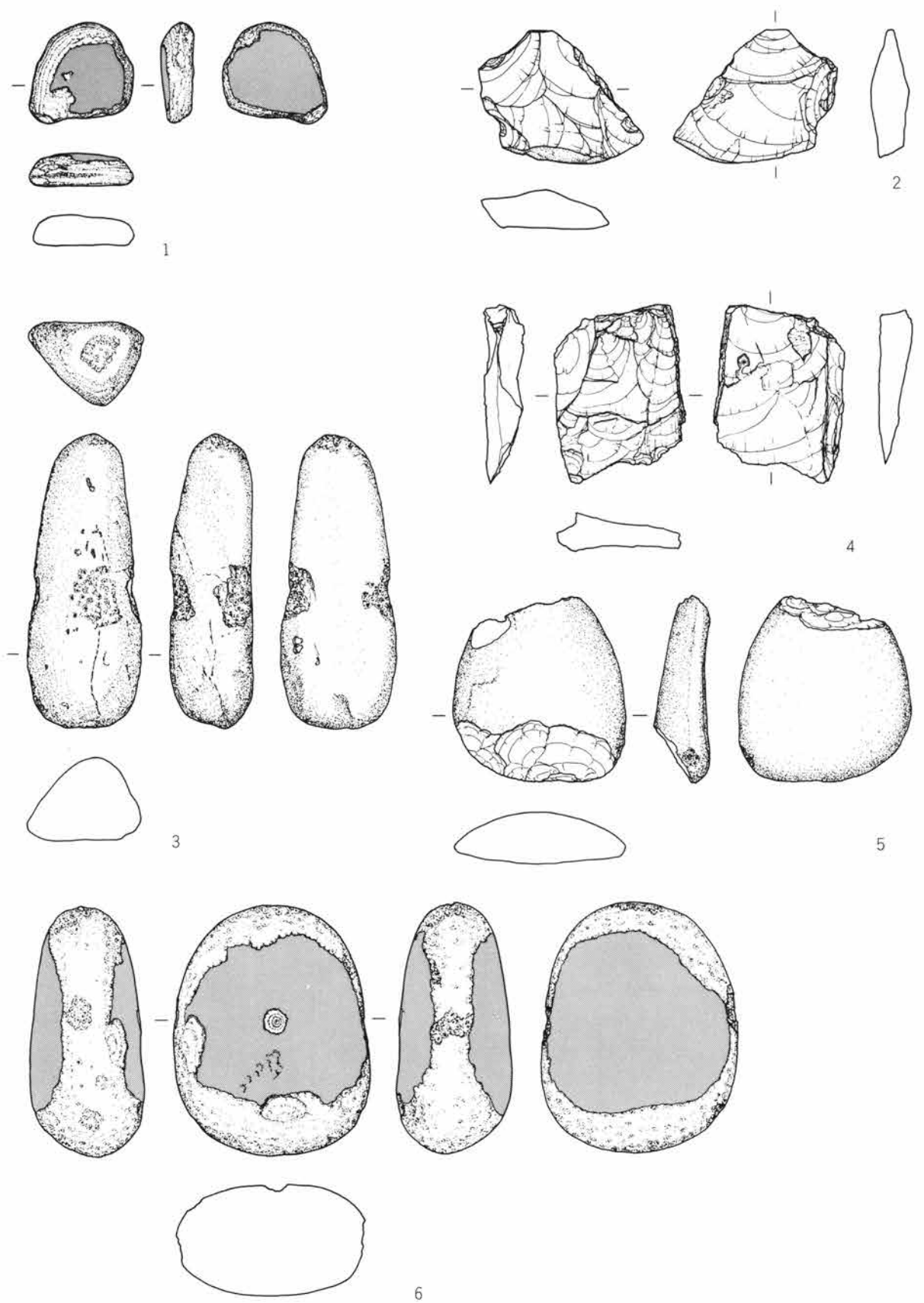


図14 包含層の出土遺物 (3)

0 10cm

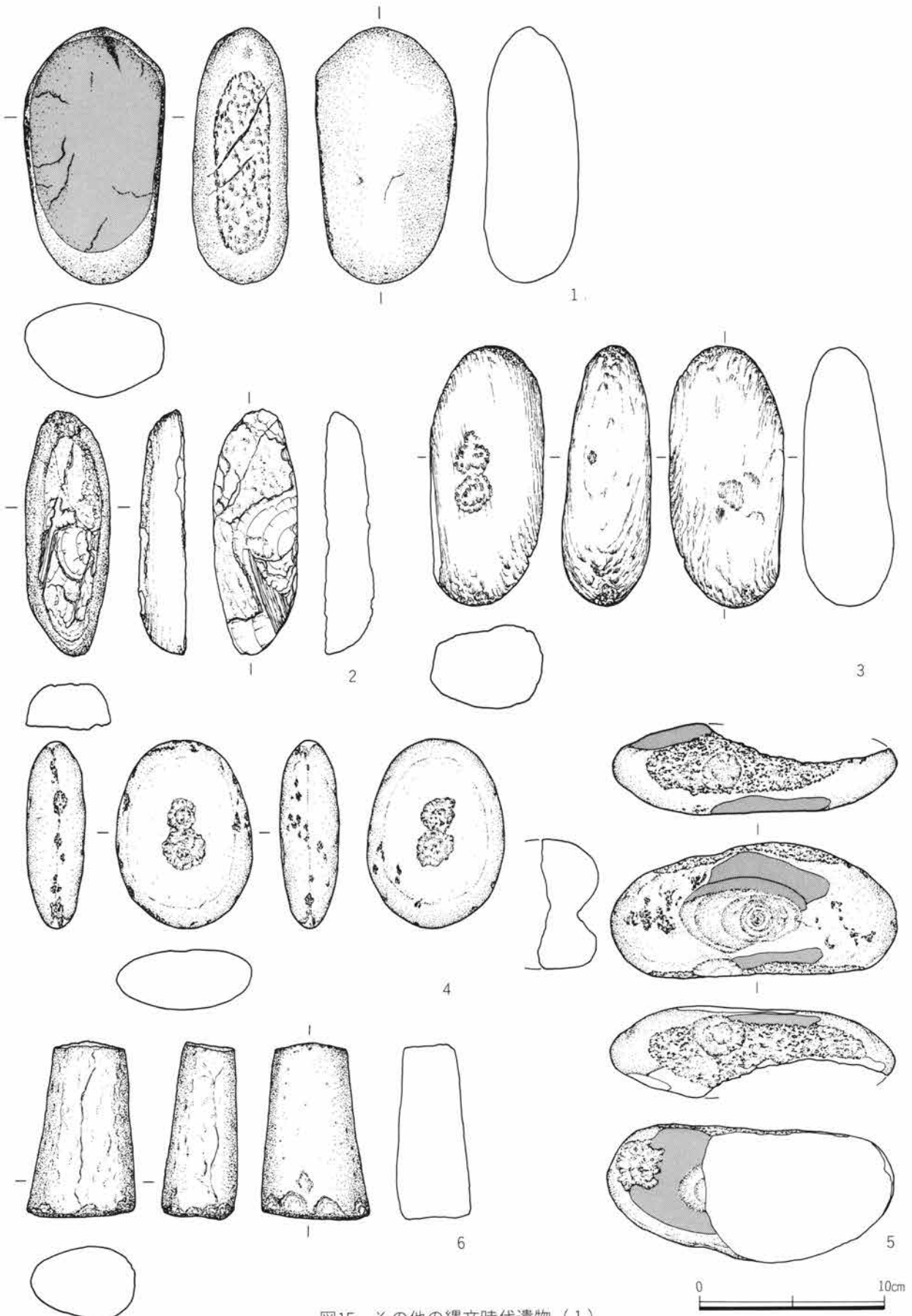


図15 その他の縄文時代遺物（1）

II 検出された遺構と遺物

る。表面側に比べて、裏面側がやや平坦になっている。4号溝出土。

図17-1は打製石斧であり、表面側に自然面を残す。調整剥離は周縁から丁寧に施されており、両側縁は若干潰れている。刃部の表裏両面及び両側縁には使用による磨滅痕を有する。線状痕の方向は長軸方向に対してわずかに傾斜をもつ。裏面先端部が欠損している。IV区粘土採掘坑小間割No.52出土。

2は磨製石器であり、図面上の下縁が直線的になっているほかは欠損している。そのため全体の形

状及び器種は不明である。縄文時代のものかどうかとも認定は難しい石器である。IV区粘土採掘坑小間割No.54より出土。

3は非常に小形のピエス状の石核であり、裏面が平坦で表面側が盛り上がり、断面は三角形を呈する。IV区粘土採掘坑小間割No.46出土。

4は平面形は上が幅広く下端が尖るハート形の剥片である。縦断面形も上が厚く下端が薄い三角形状を呈する。打面は自然面をかなりグチャグチャに敲き潰したものである。胴下半部の両側縁に比較的細かい剥離痕を有する。使用痕もしくは先端を作出するための加工痕とも考えられる。IV区粘土採掘坑小間割No.59出土。

5は縦長剥片であり、剥離面を打面としている。表面側には大きく自然面を残す。上端を除き縁辺部に部分的に剥離痕が認められる。V区粘土採掘坑小間割No.1出土。

6は縦長の偏平礫であり、下端は欠損している。III区4号溝西粘土採掘坑出土。

7は横長剥片であり、表面側には自然面を大きく残す。裏面側では上端の打点が欠失している。縦断

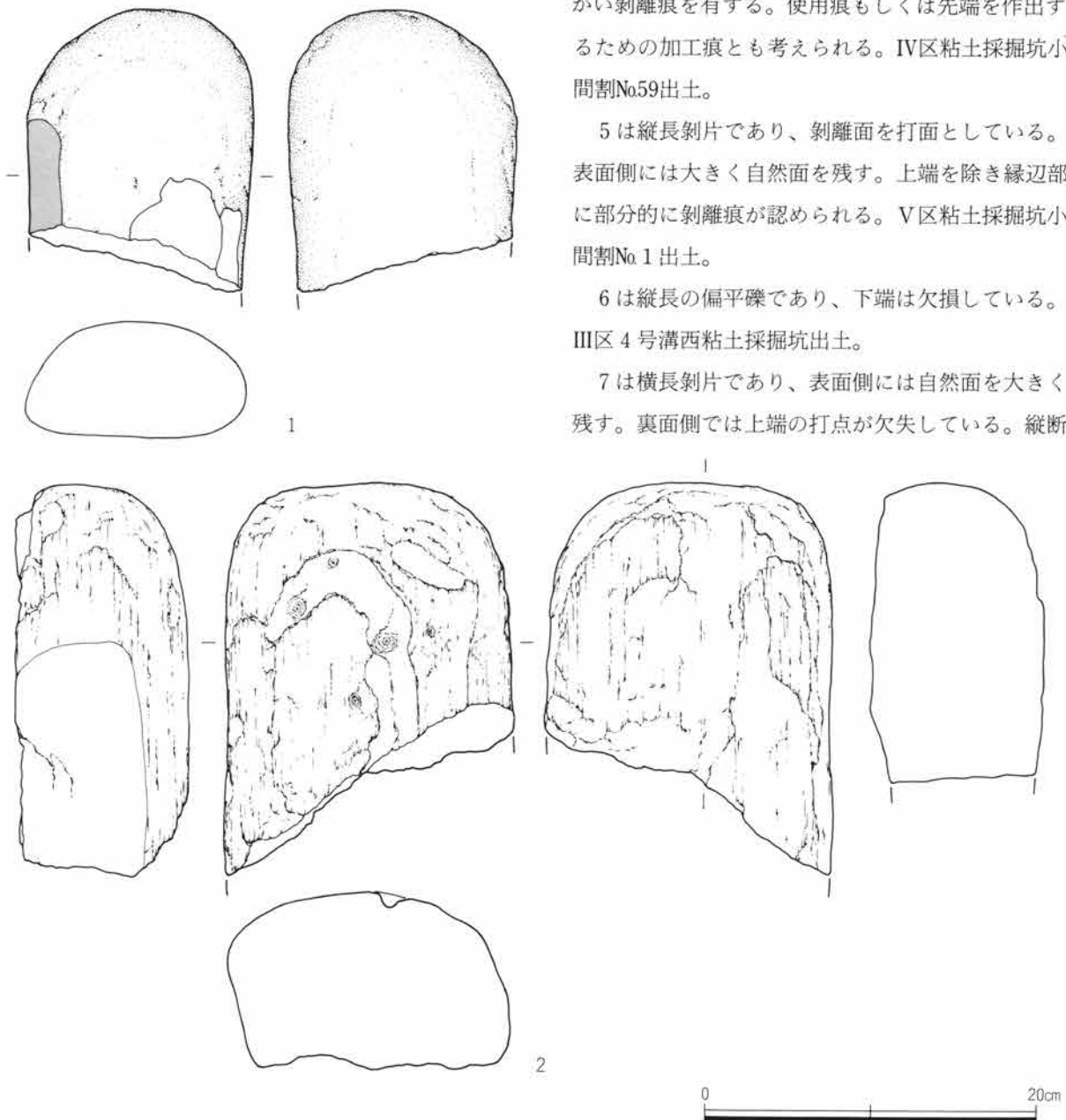


図16 その他の縄文時代遺物(2)

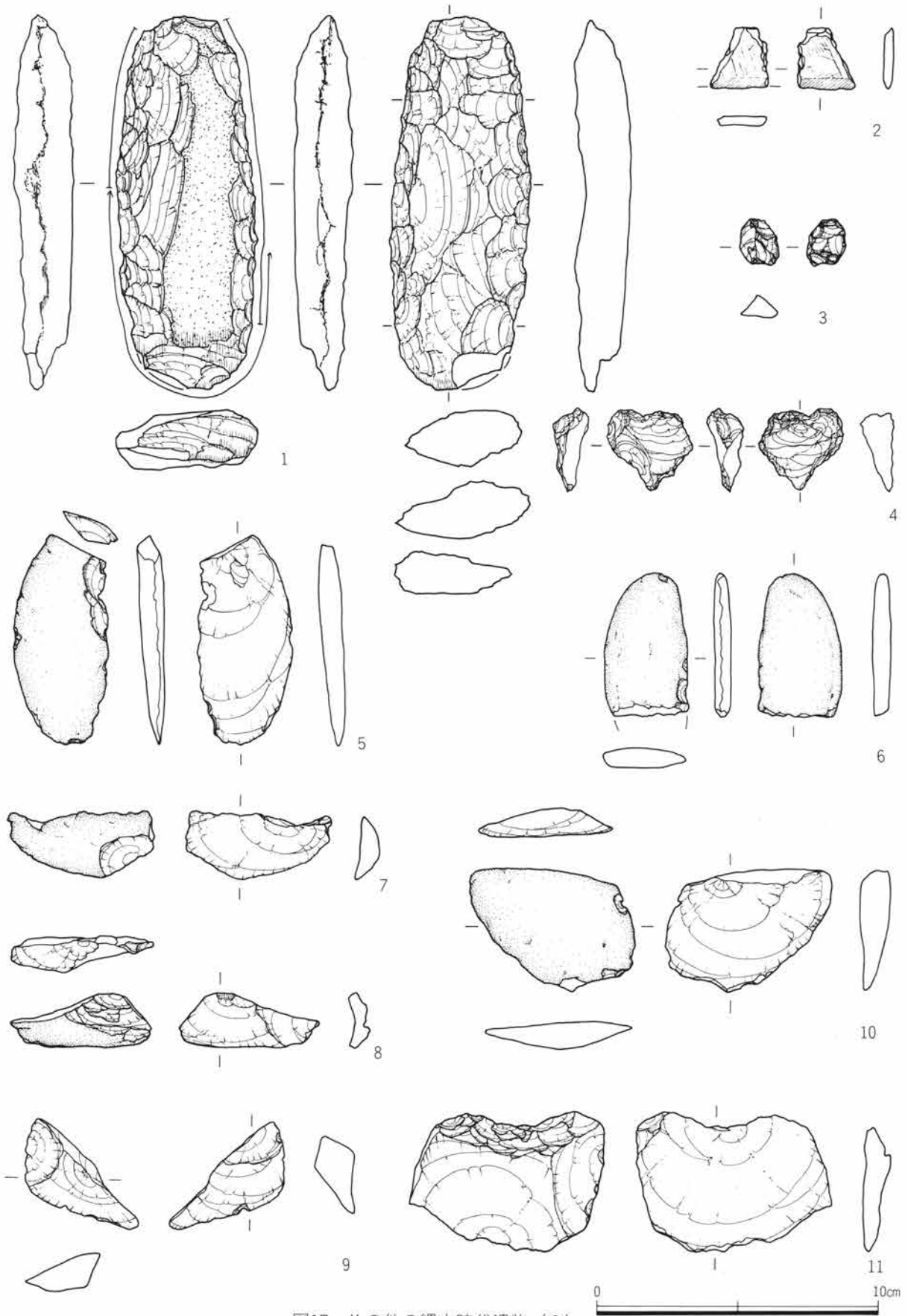
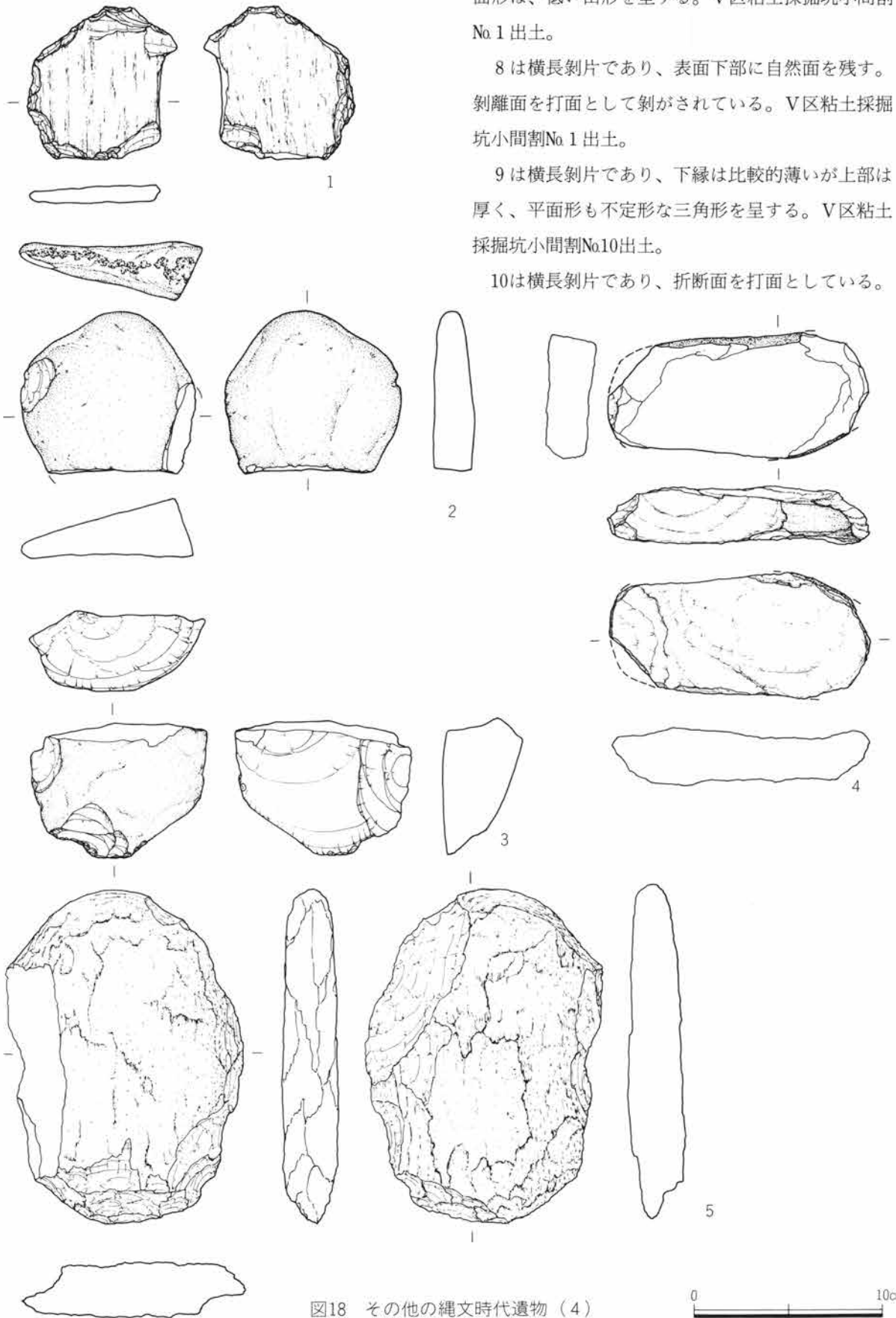


図17 その他の縄文時代遺物 (3)

II 検出された遺構と遺物



面形は、低い山形を呈する。V区粘土採掘坑小間割No 1 出土。

8は横長剥片であり、表面下部に自然面を残す。剥離面を打面として剥がされている。V区粘土採掘坑小間割No 1 出土。

9は横長剥片であり、下縁は比較的薄いが上部は厚く、平面形も不定形な三角形を呈する。V区粘土採掘坑小間割No 10 出土。

10は横長剥片であり、折断面を打面としている。

図18 その他の縄文時代遺物（4）

0 10cm

遺物観察表2 石器 (PL10~12) 長さ・幅・厚さcm 重量g

No	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
図11-1	礫	III区5号土坑No.1	15.6	8.9	7.6	1207.4	黒色片岩	
2	敲石	III区1号土坑No.2	10.0	4.5	1.8	132.9	緑色岩類	
3	礫	III区2号土坑No.2	9.3	9.3	3.5	290.0	緑色岩類	
4	凹み石	III区3号土坑No.2	11.9	9.7	4.5	692.7	緑色片岩	
図13-1	敲石	III区C-34GNo.52	11.2	8.7	5.2	850.6	砂岩	
2	敲石	III区C-35GNo.11	10.0	9.0	4.7	688.4	砂岩	
3	凹み石	III区C-34GNo.78	12.7	9.8	5.7	879.8	雲母石英片岩	
図14-1	礫	III区C-35GNo.26	5.2	5.5	1.7	59.5	雲母石英片岩	
2	U F	III区D-35GNo.6	6.7	8.5	2.0	121.3	黒色頁岩	
3	敲石	III区C-34GNo.66	15.1	6.0	4.3	559.7	緑色岩類	
4	剥片	III区C-34GNo.54	6.1	4.6	1.4	42.3	珩質変質岩	
5	礫器	III区C-35G 4号溝壁	9.6	8.9	2.9	281.4	はんれい岩	
6	磨石・敲石・凹石	III区C-34GNo.9	12.9	10.2	5.7	1135.1	流紋岩	
図15-1	磨石・敲石	III区4号溝No.3	13.8	7.7	5.1	896.3	緑色岩類	
2	敲石	III区4号溝No.4	13.1	4.6	(2.7)	251.2	緑色岩類	
3	磨石・凹石	III区4号溝No.2	14.0	6.7	4.5	577.4	雲母石英片岩	
4	敲石・凹石	III区4号溝No.1	10.4	7.9	3.2	384.9	緑色岩類	
5	磨石・敲石・凹石	III区4号溝No.5	15.4	7.4	(3.4)	689.3	緑色岩類	
6	敲石	III区8号溝No.1	9.5	5.9	3.9	348.9	緑色岩類	
図16-1	磨石	III区C-35G 4号溝壁	16.9	13.8	6.9	2400.0	角閃石安山岩	
2	凹み石	III区4号溝No.6	23.5	17.5	10.6	6000.0	点紋緑色片岩	
図17-1	石斧	IV区粘採坑小間割52	13.2	5.1	2.1	160.1	珩質頁岩	
2	磨製石器	IV区粘採坑小間割54	(2.1)	(2.0)	(0.3)	2.0	頁岩	
3	小形石核	IV区粘採坑小間割46	1.6	1.4	0.8	1.8	玉髓	
4	剥片	III区1400杭付近	2.8	3.0	1.3	8.4	玉髓	
5	剥片	V区粘採坑小間割1	7.3	3.3	0.9	23.5	黒色頁岩	
6	扁平礫	III区4号溝西粘採坑	(5.1)	2.9	0.7	19.1	緑色片岩	
7	剥片	V区粘採坑小間割1	2.4	5.2	0.7	9.8	珩質頁岩	
8	剥片	V区粘採坑小間割1	1.9	5.0	1.0	8.8	珩質頁岩	
9	剥片	V区粘採坑小間割10	3.8	4.0	1.4	12.8	珩質頁岩	
10	剥片	V区粘採坑小間割9	4.3	5.9	1.1	26.9	硬質泥岩	
11	(剥片)UF	III区粘採坑小間割46	5.0	7.0	0.9	31.0	珩質頁岩	
図18-1	礫器	IV区粘採坑小間割21	8.0	7.9	0.8	82.8	雲母石英片岩	
2	敲石	IV区粘採坑小間割52	8.5	11.3	3.1	281.9	砂岩	
3	礫器	V区粘採坑小間割1	7.0	9.2	4.1	300.2	黒色頁岩	
4	礫	V区粘採坑小間割6	13.8	6.7	2.7	396.6	砂岩	
5	礫器	III区D-32GNo.1	19.1	11.7	3.7	1221.9	雲母石英片岩	

やはり表面に自然面を残す。上端がやや厚く周縁部は比較的薄くなっているが、あまり鋭さはない。V区粘土採掘坑小間割No.9出土。

11は横長剥片であり、表面側の上部に剥片作出以前の調整痕が残る。右側縁には一部微細な剥離痕が認められ、使用痕を有する剥片の可能性が考えられる。IV区粘土採掘坑小間割No.46出土。

図18-1はほぼ楕円形に整形された礫器であり、非常に薄い扁平礫を素材としている。右側縁を除いた周縁部より打撃が加えられている。IV区粘土採掘坑小間割No.21出土。

2は敲石であり、下半部が欠損している。上端に

は敲打痕が認められ、左側縁にみられる剥離痕も敲打の際に形成されたものである。表裏両面とも比較的扁平である。IV区粘土採掘坑小間割No.52出土。

3は礫器であり、上面は裏面側からの打撃により欠けている。表面には大きく自然面を残し、調整は先端部から施されている。裏面は主要剥離面を大きく残しているため平坦になっている。V区粘土採掘坑小間割No.1出土。

4は礫であり、表面側は欠損している。両側面に部分的に自然面を残す。裏面及びそれ以外の面は剥離面と考えられるが、磨滅が顕著なため器面観察が困難であり、使用痕等は確認できない。V区粘土採

II 検出された遺構と遺物

掘坑小間割No.6 出土。

5は礫器であり、楕円形偏平礫を素材としている。上端を除いた周辺部に剝離痕を有する。特に表面下縁のものは細かい。左側縁の一部は欠損している。

III区D-32G 出土。

ま と め

本遺跡出土の縄文土器は粘性土の中に長年埋まっていたことと、水分の影響によりかなり器面が荒れて剝脱しているものが多く、文様の観察は非常に困難であった。図示した以外にも同量程度の破片が出土しているが、粗製土器の胴部破片がほとんどであったので今回の報告からははずした。石器の場合にはいわゆるツール類を中心としてそれ以外の遺物もほとんど載せた。しかし、土坑に伴うものは少なく、それ以外の時期の異なる遺構やグリッド出土のものがほとんどであった。全般的にみると石器は敲石・凹石・磨石が多く、他に石斧が1点あり、その他は剝片類であった。従ってここでは土器についての若干の考えかたをまとめてみたいと思う。

土坑出土の土器はいわゆる粗製土器が多く、包含層出土の土器でも精製土器は3点と非常に少ない。しかし、図12-1・10を除きほとんどが加曾利B式に属するものと思われる。加曾利B式土器の編年は現段階では確定しているとは言えず、難しい面があるが、B2式～B3式に比定できるのではなかろうか。C-34Gの7号土坑の上より出土している図12-1を曾谷式土器とみるならば、加曾利B式から曾谷式への過渡期の比較的短期間に同じような場所に本遺跡の土坑群が形成されたことになるであろう。

図10-3及び図12-2は大森貝塚で有名な体部がソロバン玉状を呈する鉢形土器である。両者とも上向きの弧線文をもつものであり、連結部に円形刺突文を有し、その上には縦沈線が入り、円形刺突文の間を横方向の沈線文でつないでいる。両者ともくの字状に張り出した頂部には刻み文を有するが、後者のみに縄文帯が認められる。さらに体部下半の文様

は横沈線の下に方向を変えた矢羽根状の斜条線文を有する。口縁部の器形はそれらには直接接合しないが、頸部破片が存在するので、おそらく図化した2例もくの字状に外側に直線的に開くものと思われる。

さて、寿能泥炭遺跡では、体部がソロバン玉状を呈するものはかなりの数まとまって出土しており、大塚達朗氏により分類がなされている。^(註2) まず、体部上半の文様で、くの字状張り出し部に刻文が配されるものを手法Aとし、そこに細い縄文帯が配されるものを手法Bとして後者を新しい様相とみている。また、上向きの弧線文をもつ一群では縦沈線文と円形刺突文が組み合うものを新しい要素であると氏はみている。そして、手法Bをもつ土器の体部下半に施される文様は羽状沈線文が当地域の本来のものであり、一定方向の斜条線文を最も新しい要素としている。この文様をもつものをB3式としている。本遺跡出土の図12-2の場合には手法Aと手法Bが併存しているわけであり、両手法の中間的様相を呈する土器ということができよう。^(註3) ところで、安孫子昭二氏は『縄文土器大成後期』の中では体部下半の文様が矢羽状になっている茨城県阿波貝塚出土のものまで含めてB3式としているが、解説では体部がソロバン玉状を呈する土器についての編年基準は明らかにされていない。^(註4) ただ、『平尾遺跡調査報告書I』の中で氏が縄文後期中葉の土器中でF₁型としたものが体部がソロバン玉状を呈する一群であり、その解説において連結部の「タテ沈線が省略されることもある。」として縦沈線のないものを本来あるものの省略とみている。この点は大塚氏の考え方と相違が認められる。体部下半の文様について言えば、本来羽状を呈していたものが簡略化され崩れてきて、一定方向に斜条線が施されるようになるというふうに見れば大塚氏の意見には賛成できる。しかし、それをメルクマールとしてB2式とB3式に型式分類していいものかどうかは難しい問題である。加曾利B式土器の編年研究は山内氏の基準に準拠しつつも今後我々が解決していかなければならない問題であ

ろう。

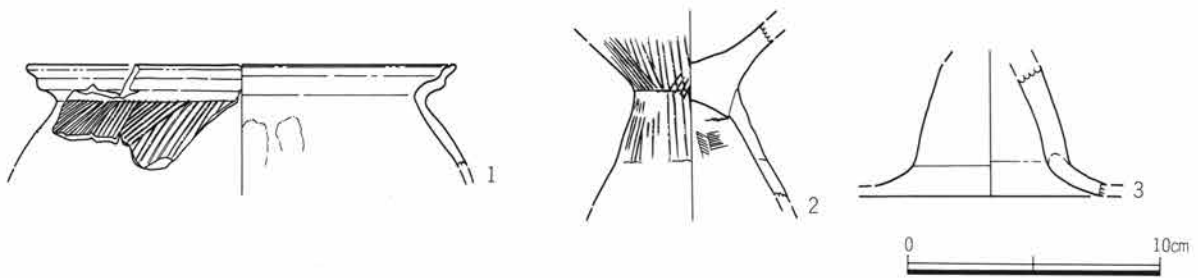
- 註1 安孫子昭二 1981(文献19)
- 鈴木 正博 1980(文献21)
- 鈴木 正博 1981(文献22)
- 大塚 達朗 1983(文献17)
- 註2 大塚 達朗 1984(文献18)
- 註3 安孫子昭二 1981(文献19)
- 註4 安孫子昭二 1971(文献26)

(2) 古墳時代前期の遺物を包含する層

Ⅲ区北西隅は、Ⅲ区に検出された溝などの地山と

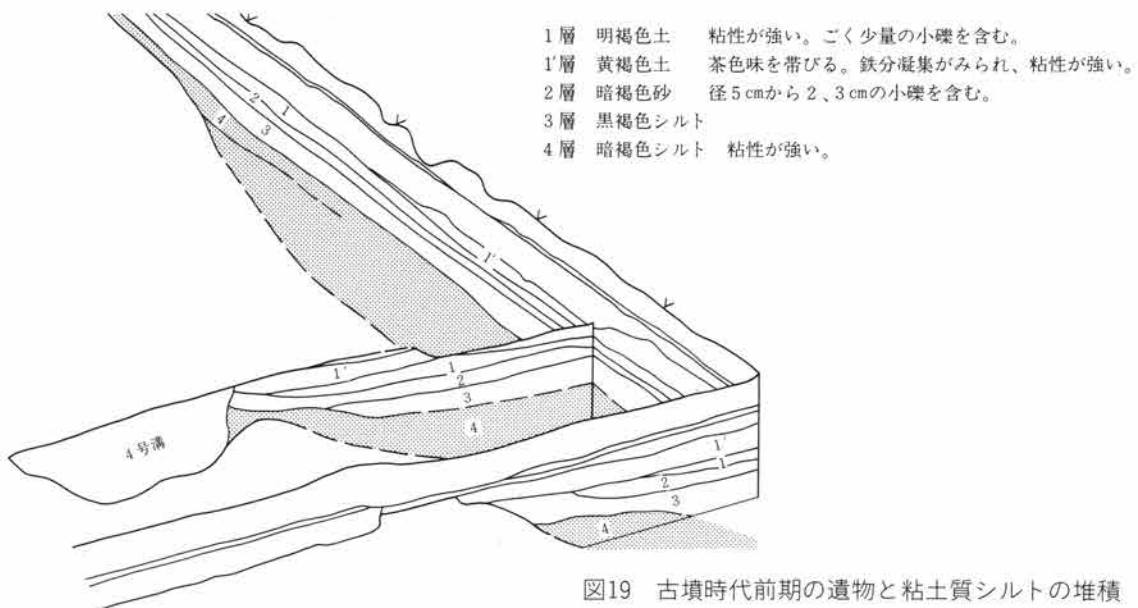
なっている白色粘土層や、黒色粘土層の堆積が水平でなくⅢ区北西隅に向かって落ち込むように傾斜している。この傾斜には、黒灰色や灰色の粘土質シルトがほぼ水平に堆積していて、これらの中には砂の層がはさまれている。この砂の層についてはテフラかどうかの分析をおこなったが、テフラではなく、周辺の河川堆積物と同じものであった。この傾斜がどこまで続くのかは、限定された発掘区の中では明らかにし得なかった。

この傾斜がいつごろのものかについては、確定す



遺物観察表 3 古墳時代前期の土器 (図19・P L18)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴
1	土師器 台付甕	Ⅲ区E30G	口縁部片	細砂、赤色細粒物を含む。 酸化焰・灰白10Y R8/2	外面斜め方向のはけ目整形。内面には指頭痕が残る。口縁部内外面よこなで。
2	土師器 台付甕	Ⅲ区E30G	台部片	中砂、小石を含む。 酸化焰・外面灰白10Y R8/2 内面橙5Y R7/6	外面縦方向はけ目整形。脚部内面縦方向なで。
3	土師器 高杯	Ⅲ区E30G	脚部片	中砂を含む。 酸化焰・橙2.5Y R6/6	脚部内外面なで。すそ部内外面とも横なで。



- 1層 明褐色土 粘性が強い。ごく少量の小礫を含む。
- 1'層 黄褐色土 茶色味を帯びる。鉄分凝集がみられ、粘性が強い。
- 2層 暗褐色砂 径5cmから2、3cmの小礫を含む。
- 3層 黒褐色シルト
- 4層 暗褐色シルト 粘性が強い。

図19 古墳時代前期の遺物と粘土質シルトの堆積

II 検出された遺構と遺物

ることは難しいが、3層中から古墳時代前期の遺物が比較的まとまって検出されていることから、この時期にはシルトや砂がたまるような堆積環境であったことが推定される。本郷尺地遺跡周辺には古墳時代前期の遺跡は堀の内遺跡や塚原遺跡など低台地に立地しており、台地からの土砂流失に伴って遺物が包含されたものと考えられる。

(3) 溝

溝は、9本が調査された。ほとんどが底面あるいは底面近くに砂及び小礫を堆積させており、水が流れていたことを推定させる。

1号溝は、I区北端から10mほど南まで、発掘区を斜めに切るように検出された。遺構が確認できるのは、表土を剥いだII層黄灰褐色シルト層上面である。規模は、上幅0.9m、下幅0.4mほどで、深さは16~18cmほどである。走行はN6°Eである。底面の高さは北端より、南端のほうが8.5cm高く、南から北へ傾斜している。表土直下に現水田の鉄分沈着層があり、色調は変質しているが、概ね暗褐色の締まりの良い土で埋没している。鉄分沈着層のあるレベルには浅間A軽石と思われる軽石粒を大量に含む層がある。中央部やや北側の底面直上で陶器片(図21-1)が出土している。

2号溝は、I区北端から24mほど南にある。遺構確認は1号溝と同様にII層である。規模は、上幅0.7cm、下幅0.3~0.4cmほどで、深さ20~23cmである。走行はN85°Wであるが、発掘区東端と接するところではやや東に向きを変えている。1号溝の走行とは直行するような関係にある。底面の高さは東端のほうが西端より10cm低く、西から東へ傾斜している。埋没土上位には浅間A軽石の純層が堆積しており、天明3(1783)年以前の掘削であることがわかる。埋没土中から陶器片(図21-2・3)が出土している。

3号溝は、II区南端に位置する。1・2号溝に比べて不定形で、上幅1.2~0.7cmで、下幅0.3~0.8cmを計る。中央よりやや東側に二つの突起状の落ち込みがある。これらは埋没土の観察から溝より新しい

ものと考えられるが、詳細は不明である。走行はN70°Wで西端はやや南にカーブする。概ね軽石を大量に含む暗褐色の締まりの良い土で埋没しており、1、2号溝と同様の埋没状態を示している。摩耗した土師器片が3片ほど出土した。

4号溝は、III区北半部に位置する。表土直下で確認された。1~3号溝に比べて規模が大きく、上幅1.8~2.8m、下幅0.1~0.4mを計る。深さは、0.5~0.6mを呈する。調査区域ほぼ中央でやや細くすぼまる。走行はN3°Wで、537番地と550番地の田を画するあぜとトレースしている。現行地割りが4号溝掘削時までさかのぼることを示している。6号溝と重複するが、4号溝が先行する。埋没土は概ね暗褐色と黒褐色の砂とシルトの互層である。底面近くには砂礫層があり、堅く締まっていた。埋没土中からは、摩耗した土師器片や陶磁器片の他、縄文時代のものと思われる凹み石や敲石(図15)が出土している。これは、本溝が縄文時代の遺物包含層を掘り抜いているためとも考えられる。

5号溝はIII区南端に検出された。遺構の平面形態は表土を剥いだ状態ですぐ確認できる。上幅0.4m、下幅0.2~0.3mの規模で、深さ6~9cmの小さな溝である。走行はN82°Eで南端はやや南に湾曲する。後述する6号溝と重複しており、5号溝が後出する。埋没土は砂を含む暗褐色あるいは黒褐色の粘性のある土である。埋没土中からは摩耗した土器片が数片出土した。

6号溝は、III区中央部4号溝の南側に位置する。上幅2.4m、下幅0.2m、深さ1.0mの規模を有する。平面形はIII層の白色粘土層上面まで掘り下げなければ明確に把握することができなかった。北壁には二つの段がある。上の一段は6号溝と走行を等しくする新しい溝との重複によってできたものであるが、平面的には把握できず、同時に掘り下げ調査した。6号溝の最深部は南寄りに偏っている。走行は東半分はN41°Wで、西端はN12°Eとなり北へカーブしている。その延長は前章で述べた粘土質シルトの堆積する谷地形に埋没し、走行は不明である。先述し

た4号溝、5号溝と重複するが、6号溝は両溝に先行する古い溝である。埋没土には多くの砂を含み、砂と砂礫の互層になっているところもある。このような埋没土の様子から水流が推定されるが、西端の底面には強い水流によると考えられる凹穴ができています。埋没土中から摩耗した土師器片や陶磁器片が出土している。

7号溝は、IV区の中央やや北寄りに検出された。後述する近代の粘土採掘坑の底面に平面形が確認できたが、溝の掘り込み面は不明である。走向はN50°Wである。上幅3.0m、下幅0.2m、深さ0.5~0.7mの規模を有する。走向はほぼ東西方向であり、底面の

深さは西側が東側より15cm高く、東側に傾斜している。溝の南側のシルト層上面には広い範囲にわたって凹凸があり、本溝が人工のものでない可能性も示唆している。埋没土は、上半が黒色粘土、下半は砂および砂礫である。

8号溝は、IV区南端近くに検出された。7号溝と同様に粘土採掘坑の底面で遺構確認ができた。走向は南半分はN12°W、北半分はN43°Wである。上幅0.9~1.7m、下幅0.5~1.0m、深さ0.2~0.3mを計り、底面は凹凸が激しく不定形である。底面の深さは、西側が13cm高く、東側に傾斜しており、7号溝と同様である。暗褐色あるいは黒褐色の砂と粘土の互層

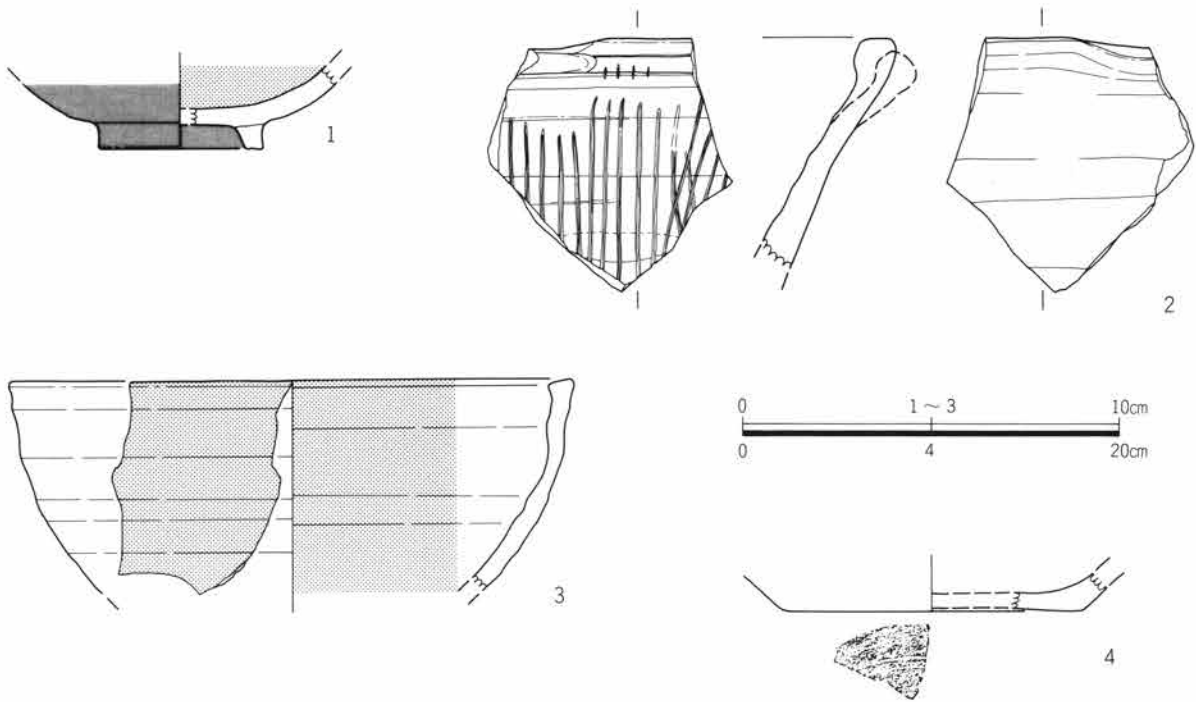


図20 溝の出土遺物

遺物観察表 4 溝の出土遺物 (図21・P L 18)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
1	陶器碗	I区1号溝 No 2	底部片	淡灰色・並・灰釉、胎釉	高台端部を除き、施釉。外面に胎釉、内面に灰釉を掛け分ける。	美濃焼 18C
2	陶器すり鉢	I区2号溝	口縁部片	灰色・硬・自然釉	すり鉢の片口部片である。内面に8+α条のおろし目あり。	製作地不詳 16~17C
3	陶器鉢	I区2号溝	口縁~体部片	灰色・硬・灰釉	内外面に施釉。内面にクロロ目、外面に篋けずりがみられる。	製作地不詳 18.19C
4	土鍋糸引き鍋	I区2号溝	底部片 底(8.0cm)	微細砂・赤色細粒物を含む。 いぶし焼・灰N4/0	内面など。体部外面回転など。底部外面右回転クロロによる削り。	

II 検出された遺構と遺物

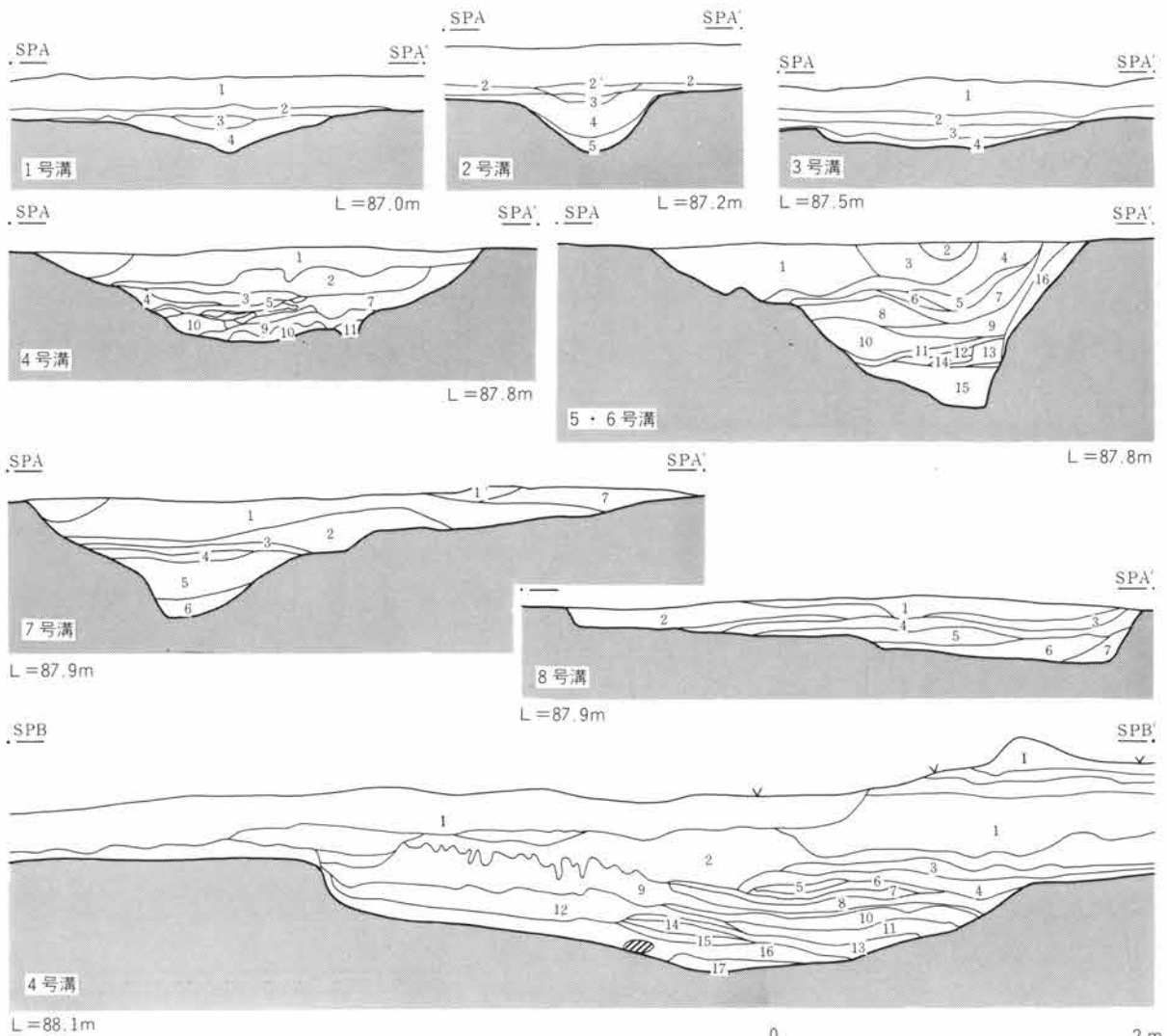


図21 溝の埋没土層断面

▷ 1号溝

- 1層 暗褐色土 浅間A軽石を少量含む。粘性有り。しまりはやや良い。(現水田耕作土)
- 2層 茶褐色土 鉄分のため茶色味を帯びる。多くの浅間A軽石を含む。ジャリジャリする。しまりは良い。(現水田床土)
- 3層 暗褐色土 床土の影響で若干茶色味を帯びる。浅間A軽石を多く含むが2層よりもやや少ない。しまりは良い。
- 4層 暗褐色土 3層よりも若干暗く、浅間A軽石の含まれる量も少ない。3層に比べやや粘性は有る。しまりは弱い。

▷ 2号溝

- 1層 暗褐色土 浅間A軽石を少量含む。粘性有り。しまりはやや良い。(現水田耕作土)
- 2層 茶褐色土 鉄分のため茶褐色を帯びる。多くの浅間A軽石を含む。ジャリジャリする。しまりは良い。(現水田床土)
- 2'層 茶褐色土 鉄分のため茶褐色を帯びる。極めて多量の浅間A軽石を含む。しまりは2層よりも弱い。(現水田床土)
- 3層 暗褐色土 床土の影響で若干茶色味を帯びる。浅間A軽石をかなり多量に含むが、2'層よりも少ない。しまり

は2'層よりも若干良い。

- 4層 暗褐色土 小礫及びカーボン片を少量含む。やや粘性有り。やや砂質。しまりはやや弱い。1層よりも明るく5層よりも暗い。
- 5層 暗褐色土 4層よりも明るい。鉄分を若干含む。かなり砂質であり、微細な砂を極めて多量に含む。しまりは弱い。

▷ 3号溝

- 1層 暗褐色土 浅間A軽石を少量含む。粘性有り。しまりはやや良い。(現水田耕作土)
- 2層 暗茶褐色土 鉄分のため茶色味を帯びる。やや多くの浅間A軽石を含む。しまりは良い。(現水田床土)
- 3層 暗褐色土 浅間A軽石を多量に含む。地山の黄白色粘土の小ブロックを多く含む。しまりは極めて良好。
- 4層 暗褐色土 3層よりもやや暗く、浅間A軽石を極めて多量に含む。サラサラする。地山粘土の小ブロックを少量含む。3層よりもややしまりは弱い。

▷ 4号溝 中央セクション

- 1層 暗褐色土 鉄分を含み、全体にやや茶色味を帯びる。径5mm前後の小礫を極少量含む。砂質。しまりは良い。

2. 昭和61年度調査地区

- 2層 暗褐色土 1層よりも若干暗い。小礫は含まれず、1層よりも粘性は有る。(わずかにシルト質)
- 3層 黒褐色土 1・2層よりも暗い。粘性も2層よりも強い。しまりは極めて良好。(ややシルト質)
- 4層 暗褐色砂 部分的にブロック状にやや粘性のある暗褐色土を含む。
- 5層 暗褐色粘土 少量の砂を含む。しまりはやや弱い。(シルト質)
- 6層 暗褐色砂 しまりは良い。4層よりもやや暗い。
- 7層 黒褐色土 3層よりも若干明るい。しまりは極めて良好。粘性有り。(シルト質)
- 8層 暗褐色砂 色調は6とほぼ同じ。しまりは良い。暗褐色粘質土を少量含む。
- 9層 暗褐色粘土 粘性は強い。粘性は7層よりも強い。(シルト質)
- 10層 暗褐色砂 8層よりも若干暗い。小礫を少量含む。しまりは良い。
- 11層 暗褐色土 砂及び小礫を多く含む。しまりは良い。

▷ 4号溝 東壁セクション

- 1層 黒褐色土 5mm～2mm程の小礫を多量に含む。しまりは極めて良い。やや砂質ではあるが、粘性もある。
- 2層 明褐色砂 非常に粒子の細かい砂。しまりは良い。北側は後の侵食により凹凸が認められる。鉄分により若干赤味を帯びる。
- 3層 暗褐色粘土 黒色小粒子(径1～2mm)を少量含む。粘性は有り。しまりは良い。
- 4層 暗褐色粘土 黒色小粒子(径1～2mm)を少量含む。3層よりも若干明るい。極めて細かい砂を少量含む。しまりは3層とほぼ同じ。粘性は3層よりもわずかに弱い。
- 5層 明褐色土 鉄分を含み、かなり赤味を帯びる。砂を多く含む。粘性有り。
- 6層 暗褐色土 小礫(径1cm～5cm)を少量。1～2mm程の粗い砂を多量に含む。しまりは良。
- 7層 暗褐色土 極めて細かい砂を少量含む。黒色小粒子を少量含む。粘性有り。しまりは極めて良い。
- 8層 暗褐色砂 やや粒子が粗く、直径1～3mm程度のものも含まれる。しまりは良い。
- 9層 暗褐色土 かなり粘性が強いが、極めて粒子の細かい砂も含まれる。鉄分を含み、全体にやや赤味を帯びる。しまりは良く、粘性は強い。
- 10層 暗褐色砂 黒色粒子(1～5mm)を少量含む。若干粗めの粒子によって構成される。しまりは弱い。粘性はほとんど無し。
- 11層 暗褐色砂 10層よりもやや粗い粒子によって構成される。(石英粒子も認められる)しまりは弱い。粘性もほとんど無し。
- 12層 黒色粘土 極めて細かな砂の粒子を少量含む。しまりは良い。粘性は強い。
- 13層 暗褐色粘土 鉄分を含み、若干赤味を帯びる。黒色粒子をかなり細かい砂によって構成される。わずかに鉄分を含む。やや粘性有り。しまりは弱い。
- 14層 暗褐色砂 かなり細かい砂と暗褐色土によって構成される。粘性は有る。しまりはやや良い。
- 15層 暗褐色砂 やや粗めの砂によって構成される。一部暗褐色粘土ブロックの溶混も含まれる。やや粘性有り。しまりは良い。(水が湧く)
- 16層 暗褐色砂 かなり粗い砂と小礫(5mm前後～1cm)によって構成される。しまりは悪く粘性は弱い。
- 17層 暗褐色砂 2層よりも粗い砂によって構成される。5mm前後の小礫を含む。しまりは2層よりも弱い。
- 18層 暗褐色砂 しまりは良い。粘性有り。白色粘土の黒色粘土よりはやや明るい。

▷ 5号・8号溝

- 1層 暗褐色砂 径5mm～1mm前後の結晶片岩などの小礫を少量含む。砂粒の粒子はやや粗い。しまりは良い。
- 2層 黒褐色土 砂を多く含む。
- 3層 黒褐色土 径2mm前後の白色バッチを少量含む。粘性強い。
- 4層 黒褐色土 砂を多く含む。粘性有り。
- 5層 黒色粘性土 砂はほとんど含まない。
- 6層 黒褐色土 粘性有り。4層よりも暗い。非常に細かい砂を少量含む。
- 7層 黒色粘性土 砂は含まれない。しまりは良い。
- 8層 暗褐色砂 かなり粒子は粗い。径2～3mm程度の白色粒子と微量の黒色粘土粘土を含む。粘性土を塊状に含む。
- 9層 暗褐色砂 8層よりもやや明るい。構成粒子も細かく、やや粘性有り。
- 10層 暗褐色砂 8層より粒子は細かい。黄褐色粘性土の粒子を少量含む。
- 11層 暗褐色土 粘性有り。細かい砂を少量含む。
- 12層 暗褐色砂 若干粘性有り。
- 13層 暗褐色砂 径2～3mm程度のやや粗い粒子を含む。
- 14層 暗褐色土 粘性が強い。細かい砂を少量含む。
- 15層 暗褐色砂 床面付近に径2～3cm程の若干黄色味を帯びる白色粘土ブロックを含む。全体に構成粒子は粗く径2～5mm程度の小礫を含む。
- 16層 暗褐色土 9層よりも暗く、粘性も強い。しまりも良い。

▷ 9号溝

- 1層 黒色粘土 しまりは良い。ほぼ単一的。細かい砂を極少量含む。
- 1'層 黒色粘土 色調は1とほぼ同じであるが、砂を含まず。1層よりも粘性が強い。
- 2層 黒色粘土 黄色味を帯びる白色粘土の地山、粒子は径2～3mm程度を少量含む。しまりは良い。
- 3層 黒色粘土 2層よりも黒味が強く、地山の粒子をほとんど含まない。しまりは良い。
- 4層 黒色粘土 地山粒子を多量に含む。しまりは良い。
- 5層 暗褐色砂 多量の地山ブロック及び粘土、多くの黒色粘土ブロックを含む。砂粒は比較的細かい。しまりは良い。
- 6層 暗褐色砂 径1～3cm程の結晶片岩の礫を多く含む。地山粒子ブロックはほとんど含まれない。黒色粘土ブロックをやや多く含む。しまりは良い。
- 7層 黒褐色土 地山粗粒子(径2～5mm程度)少量含む。細かい砂が多量に混じる。しまりはやや弱い。

▷ 10号溝

- 1層 暗褐色砂 粒子の大きさは中粒。しまりは良く、粘性は若干有り。
- 2層 黒色土 非常に細かい砂を多く含む。粘性土を含む。粘性は強い。
- 3層 暗褐色砂 極わずかに黒色粘性土を含み、粘性は弱い。粒子はやや粗い。
- 4層 黒褐色粘性土 細粒の砂を少量含む。しまりは良い。
- 5層 暗褐色砂 粒子の大きさは粗粒。地山粒子微量。白色微粒子を少量含む。
- 6層 暗褐色砂 5層より粒子は細かく、地山粒子は含まれない。黒色粘土を少量含む。
- 7層 暗褐色粘性 非常に細かい砂を少量含む。6層よりも暗い。しまりは良い。

II 検出された遺構と遺物

になっている。底面から10cmほど浮いた状態で、敲石(図15-6)が出土している。

(4) 粘土採掘坑

III区からV区にかけては、表土を剥いだ状態で、四角の区画をもった坑群が検出された。これらの坑は、IV層(黒色粘土層)を掘抜き、V層(白色粘土層)上面まで達しているものがほとんどであった。なかにはV層を掘り込んでいるものも数箇所あった。このような坑は、四隅がきちんと把握できるものだけを数えても150基以上に及び、検出面積は1,800㎡に及ぶ。これら坑は粘土採掘の作業痕跡と思われる。

1) 作業区画と小間割

1,800㎡にわたって検出された粘土採掘坑は、幅10m、長さ約80mほどの作業区画をもっている。発掘区内ではこの作業区画が7区画確認できた。これらの区画には間に幅60~75cmの掘り残し部分を区画に平行して施設しているところが二ヵ所あり、計画的に掘削が実施されていたことがわかる。作業区画の方向は、N5°Eである。V区の北端の東西方向のやや幅の広い掘り残し部は現行の馬入れの下に検出された。また、A区画の東側の掘り残し部や、C区画の南側の掘り残し部は現況の田のあぜにトレースして検出されている。これらの調査結果からこの粘土採

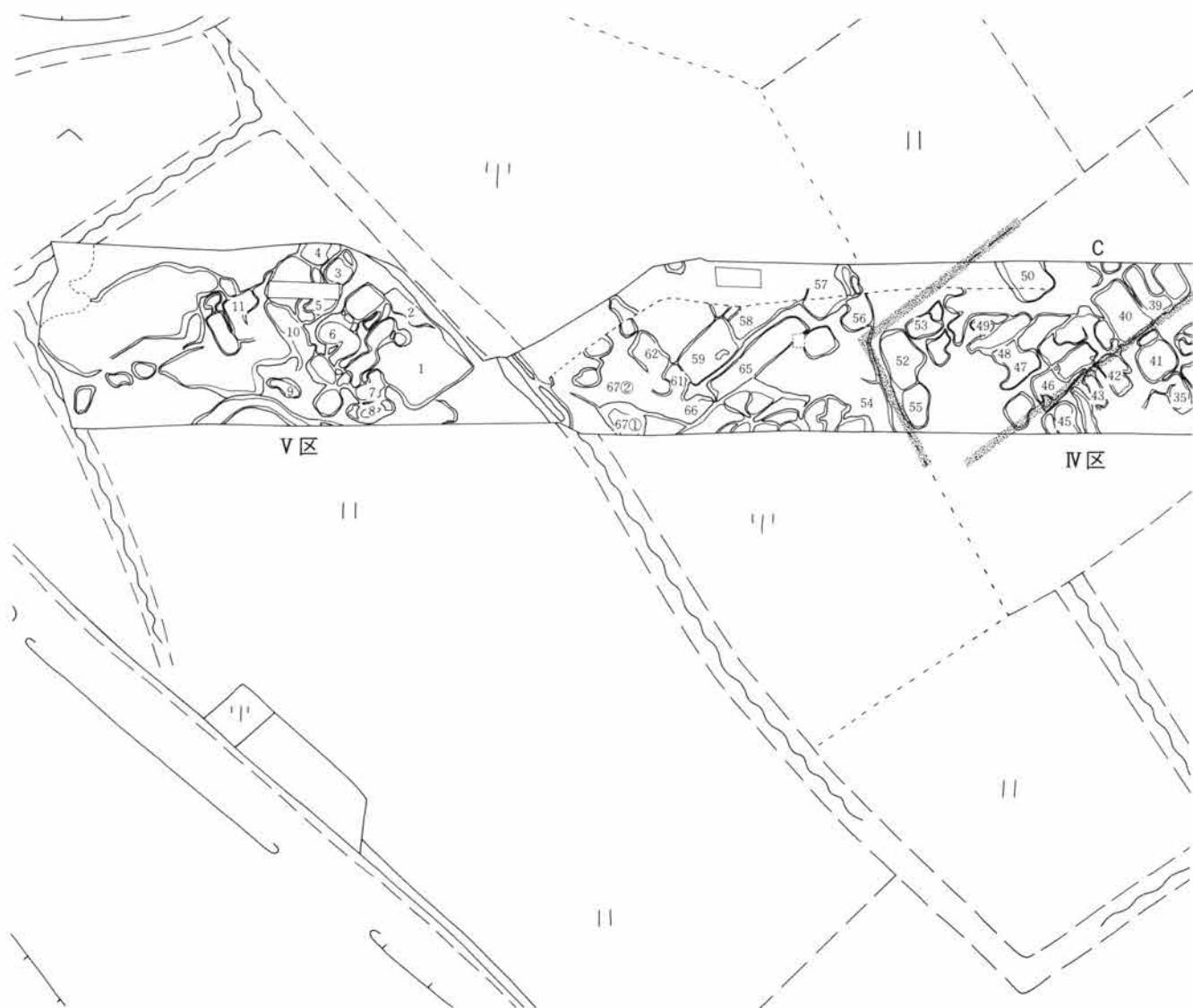


図22 現行地割と粘土採掘坑

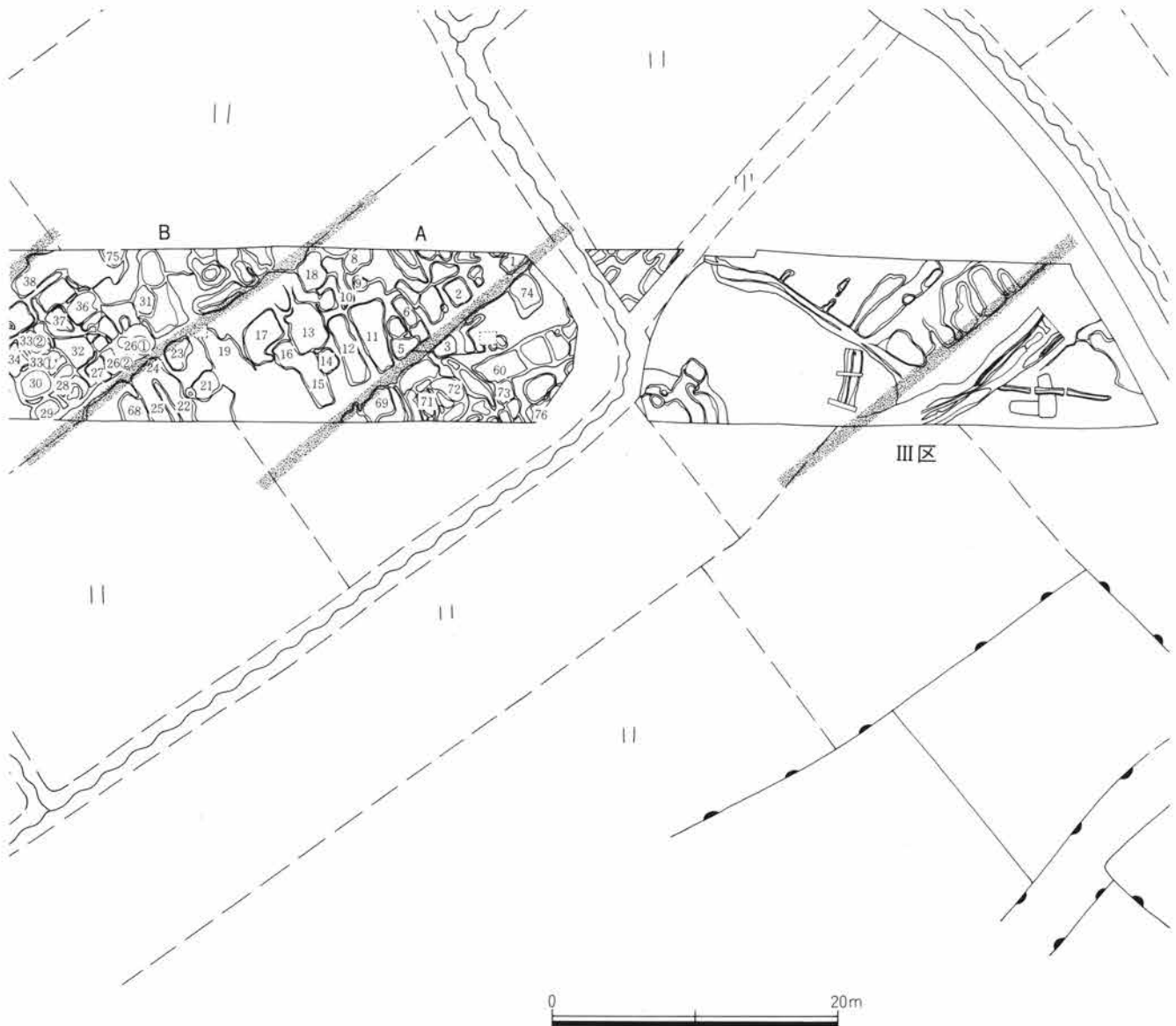
掘の作業区画は、現行地割りに合致して作られていることがわかる。したがって、現行地割りは少なくともこの粘土採掘の時期まで遡ることになる。

作業区画の中は、大小の坑によって構成されている。厳密な大きさの規制はないようであるが、良く見ると幅2mほどの掘削の単位が看取できる。小間割には11、12、15、22、25、39、40のように東西方向に掘り進むものと、60、65のように南北方向に掘り進むものがある。深さはまちまちである。もっとも深いものは、小間割20の60cm、26の70cm、30の60cmで、これらは黒色粘土層の下の白色粘土層まで掘り抜いている。他のものは20~30cmの深さで掘削

が止まっており、黒色粘土だけを掘っている。先述したような埋没状況から掘削を終了していると考えれば、このような掘削状況はこの粘土採掘坑は主に黒色粘土を採取する目的であったことが想定できる。

2) 掘り込み面と埋没土層

これらの坑は、III~V区で表土を剥いだ段階で確認され、坑自体の掘り込み面はどこであったかは平面的には明らかでない。しかし、III区西壁の北端の土層断面観察から浅間Bテフラを切り込んでこの坑が掘削されていることがわかった。この断面では浅



間Bテフラの上には灰黒色腐植質シルトが9cm堆積しており、坑の掘削は浅間Bテフラの降下した1108(天仁元)年よりは後で、ある時間を経過した時点であることがわかる。II区の2号溝の埋没土中に検出されている浅間A軽石は、この土層断面では確認されなかった。浅間Bテフラの上にある腐植質シルトの上層はすぐに表土になってしまっていて、遺構掘削後の土砂流失も考えられる。浅間A軽石の降下があったとしても今は流されてしまっていて、浅間A軽石が遺構の中に流れ込んでいたのか、浅間A軽石を切り込んで遺構が掘られたのかわからない。したがって、断面の観察によっても坑群の掘削の下限を確定することはできないことになる。

坑の埋没土は、軽石を大量に含んだ黒褐色の砂質土と、地山の黒色粘土や白色粘土のブロックを混じる黒褐色砂質土が、大きなブロックで重なったような状態になっている。これは自然な堆積状況ではなく、掘り上げた土を戻していると考えられた。大量に含まれた軽石は、浅間山起源のものであることは判断できたが、純層ではなかったため、降下年代を確定できる浅間Bテフラであるか浅間A軽石であるかは分析できなかった。しかし、含まれている量が大変多かったので、攪乱されているものが遠くから流失し、土壌化したものとは考えにくい。おそらくこの坑群は、降下して厚く堆積していた軽石の層を

本郷尺地遺跡試料テフラ分析報告 パリノ・サーヴェイ株式会社

1 分析試料と目的

分析の対象とした試料は、本郷尺地遺跡III区西壁北端部(以下北端部は省略し表記する)より採取されたNo1・2の2点(図1)I区2号溝2'層の計3点である。これらの試料について、テフラであるか否か、更にテフラであればどの示標テフラに対比されるかという点を明らかにする(テフラ分析)。

2 分析方法(テフラ分析・鉱物分析)

採取された試料約50gについては超音波洗浄を行ない、実体鏡下で軽石、スコリアや石質岩片の色調、形態、量等を観察した。その後、分析篩を用いて1/4~1/8mmの粒子を篩別し、テトラプロモエタン(比重2.96)で重液分離を行った。重鉱物については、約300個を偏光顕微鏡下で同定して重鉱物組成を測定した。なお、テフラの層相や屈折率による同定には、新井(1979)を参考にした。

3 分析結果

III区西壁のNo1及びI区2号溝2'層試料には軽石が多く含まれており、テフラの純層と考えてよい。

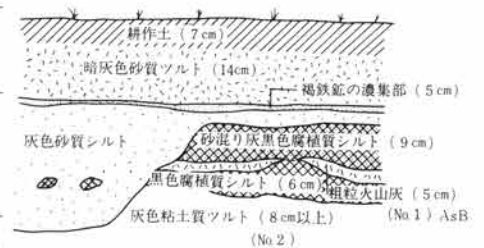
III区西壁No1は、層厚5cmで、最大径0.7cmの軽石や、最大径0.2cmの石質岩片を含んだ粗粒火山灰層である。軽石は淡灰褐色で、暗灰色のスコリアやガラス質安山岩等の石質岩片を混える。重鉱物組成は、斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱である。さらに斜方輝石(γ)の屈折率は、1.707~1.711(モードは1.710)であった(図1)。以上のような層相、鉱物組成、屈折率等の特徴から、本テフラ層は浅間Bテフラ(1108年、新井、1979)に対比される。従って本テフラは遺構によって切られているので、遺構の年代は1108年以降と考えられる。

III区西壁No1の上位に堆積しているI区2号溝2'層にも、軽石が多く含まれている。軽石は灰白色で、スコリアはほとんど含まれていない。石質岩片の量も浅間Bテフラに比較すると少ない。軽石および石質岩片の大きさは、最大で各々0.5cm、0.2cm程度である。重鉱物組成は、斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱で表される(図2)。さらに斜方輝石(γ)の屈折率は、1.708~1.711(モードは1.710)であった。以上のような特徴から本テフラ層は、浅間A軽石(1783年)に対比される。

表1 テフラの岩石学的特徴

試料名	重鉱物組成	斜方輝石の屈折率 (モード)	対比されるテフラ (噴出年代)
I区2号溝2'層	opx>cpx>mt	1.708~1.711(1.710)	浅間A軽石(1783A.D)
III区西壁No1	opx>cpx>mt	1.707~1.711(1.710)	浅間Bテフラ(1108A.D)

opx: 斜方輝石、 cpx: 単斜輝石、 mt: 磁鉄鉱、噴出年代は新井(1979)による。



文 献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究—第四紀研究、11、p. 254~269
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、157、p. 41~52

II 検出された遺構と遺物

表土とともに掘り避けておいて、下層の粘土を採取した粘土採掘坑で、あとから避けておいた軽石を含んだ表土をもどしたものと考えられる。

3) 出土遺物

多量の遺物が遺構確認時あるいは掘り下げ時に埋没土から出土している。遺物の出土状況は、埋め戻された土の中に混入するような形であり、もっとも時期のわかり易い陶磁器をみても16～20世紀のものが混在している。数箇所、小間割の底面について完形に近いかたちで、土鍋、火鉢などが出土している。また、鉄製品の破片や縄文時代の石器(図17・18)が数点出土している。

陶磁器 陶器222点、磁器157点が出土している。破

片が多く、遺構に伴って出土したと思われるものはない。遺構の性格が生活跡でないことを考えれば当然のことといえよう。陶器は口縁部片58点、底部片35点、体部片129点で、そのうち口縁部・底部の残る破片93点中33点を実測・図示した。瀬戸焼・美濃焼系統のものがもっとも多く、他に唐津系・京焼系や益子焼、常滑焼が含まれている。時期は18世紀のものがもっとも多い。磁器は口縁部片45点、底部片22点、体部片90点で、そのうち口縁部・底部の残る破片67点のうち34点を実測・図示した。18世紀から20世紀の伊万里系のものがほとんどであるが、1点中国青磁と思われるもの(図26-62)がある。これらの陶磁器のうち口縁部・底部の残る破片と陶器体部片2点、磁器体部片4点について焼成系統・製作年代をま

表1 陶磁器の系統・製作年代

		陶 器								磁 器
世紀	部位	瀬戸焼	美濃焼	瀬戸・美濃系	唐津系	京焼系	益子焼	常滑焼	系統不詳	伊万里系
16	口縁部 底 部			2						
17	口縁部 底 部	2	2 5	2 2					1	1
18	口縁部 底 部	1	13 8	10 4	9	5 3		1	2 1	25 11
19	口縁部 底 部		1				1		1	9 8
20	口縁部 底 部									8 2
不詳	口縁部 底 部								13 10	1

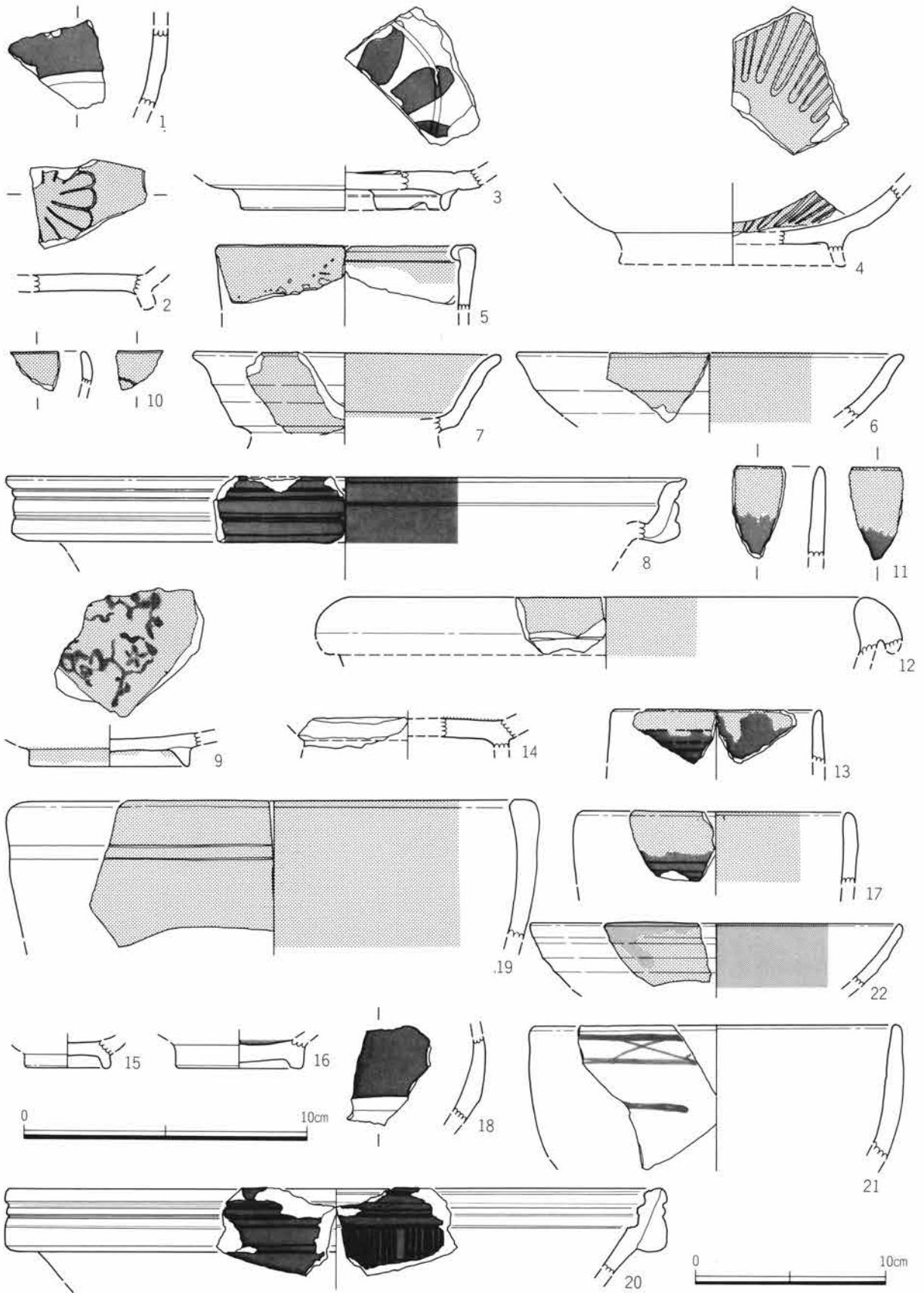


図24 粘土採掘坑の出土遺物 (1) 陶器

II 検出された遺構と遺物

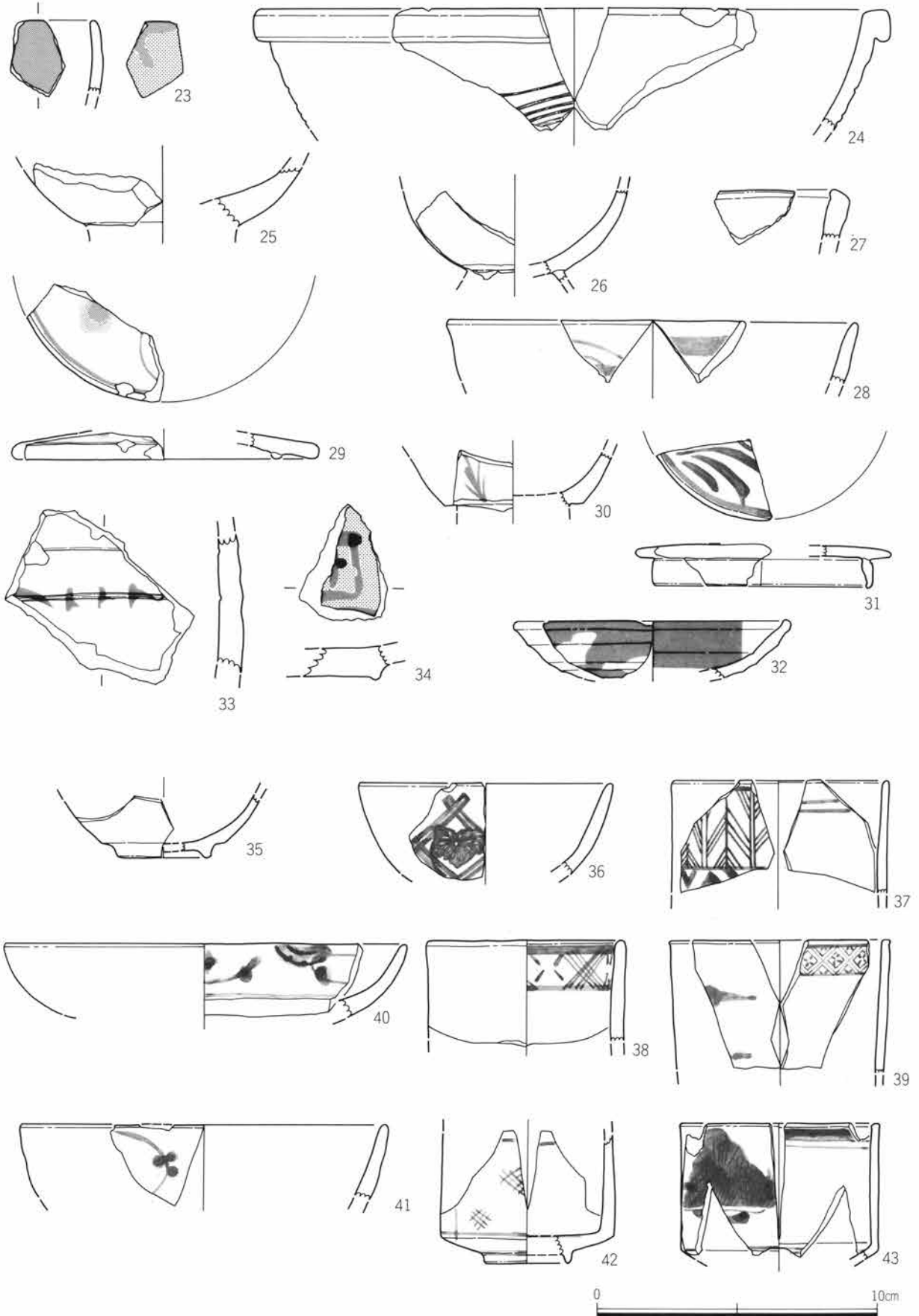


図25 粘土採掘坑の出土遺物（2） 陶磁器

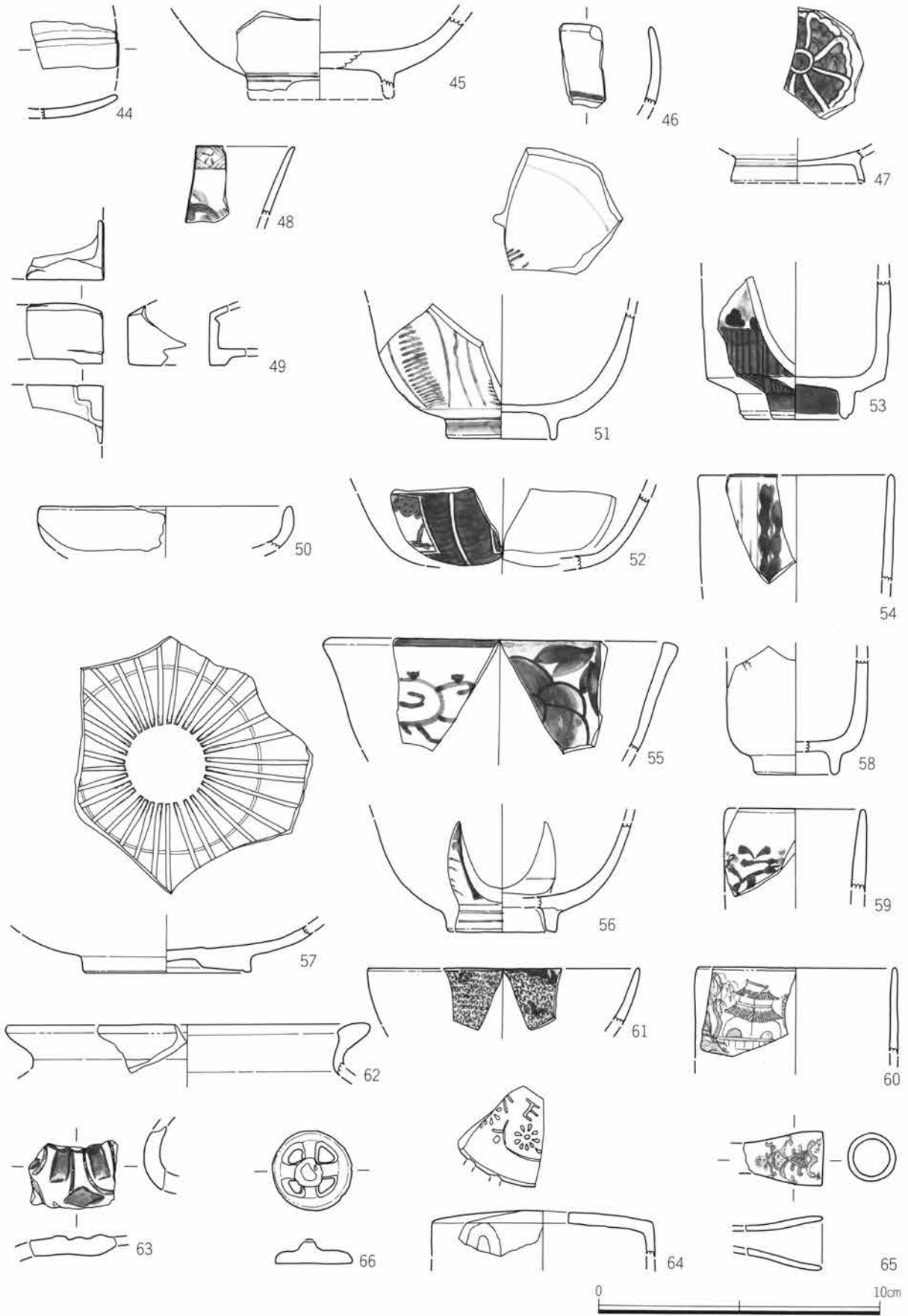


図26 粘土採掘坑の出土遺物 (3) 磁器

II 検出された遺構と遺物

遺物観察表 5 粘土採掘坑の出土遺物 陶器 (図24.25・P L14.15)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
1	陶器碗	IV区粘採坑小間割No28	体部片	淡灰色・硬・鉄釉(天目)	体部外面下方が露胎となり、他は施釉される。釉は厚く施釉。	瀬戸・美濃16C
2	陶器皿	IV区粘採坑	底部片	淡黄灰色・硬・灰釉	内面のみ施釉。内面中央に菊花の印花文あり。露胎はやや酸化さみ	瀬戸・美濃16C
3	陶器皿	IV区粘採坑小間割No55	底部片	淡黄灰色・硬・長石釉、鉄絵	内面に花文のように見える鉄絵が描かれさらに長石釉を施釉。外面は露胎となる。重ね焼き痕あり。	瀬戸焼17C
4	陶器皿	IV区粘採坑小間割No59	底部片	灰色・硬・灰釉	内外面に菊花の押圧施文あり。施釉は高台内面を除き全体に施される。	瀬戸焼17C
5	陶器小香炉?	IV区遺構確認面	口縁部片	淡黄灰色・並・灰釉	施釉は内面を除いて施される。	美濃焼17C
6	陶器皿	IV区粘採坑小間割No18	口縁部片	淡灰色・硬・灰釉	釉は内外に施される。口縁部がやや端反りとなる。	瀬戸・美濃17C
7	陶器皿	IV区粘採坑小間割No62	口縁部～体部	淡灰色・硬・灰釉	内外に施釉される。口縁部は端反りとなる。	瀬戸・美濃17C
8	陶器鉢	IV区粘採坑小間割No33	体部片	淡黄灰色・並・鉄釉	すり鉢の口縁部片で独特の口作りを呈す	製作地不詳17C
9	陶器皿	IV区粘採坑小間割No15	底部片	淡灰色・硬・灰釉、呉須	高台端部を除き、内外に施釉。内面に梅花印判の染付あり。	瀬戸・美濃17C
10	陶器碗	IV区	口縁部片	淡灰色・硬・透明釉、鉄絵	柳茶碗の口縁部片である。	瀬戸焼18C
11	陶器碗	IV区	口縁部片	淡黄灰色・並・飴釉	内外面に施釉される。釉中に乳灰色の釉が禾目状に垂れ下がる。	美濃焼18C
12	陶器鉢	IV区1480杭付近	口縁部片	淡黄灰色・並・灰釉	片口と思われる口縁部片で、折返し口縁を丸くまとめている。	美濃焼18C
13	陶器小碗	IV区粘採坑小間割No67	口縁部片	淡黄灰色・並・灰釉、飴釉	内外面に施釉。外面側に鎧手の列点が三条施される。	美濃焼18C
14	陶器皿	IV区粘採坑小間割No7	底部片	淡黄灰色・並・灰釉	内面のみ施釉。他は露胎となる。	美濃焼17C
15	陶器小杯	IV区粘採坑小間割No67	底部片	淡黄灰色・硬・長石釉	内面のみ施釉。	美濃焼18C
16	陶器碗	IV区粘採坑小間割No56	底部片	淡黄灰色・並・鉄釉(天目)	内面のみ施釉。釉色は暗褐色を呈し、カセている。	美濃焼18C
17	陶器碗	IV区粘採坑小間割No58	口縁部片	淡灰色・硬・飴釉、長石釉	外面下方に長石釉と飴釉を掛け分けた条線が三条施される。	瀬戸・美濃18C
18	陶器碗	IV区粘採坑小間割No72	体部片	淡灰色・硬・鉄釉(天目)	外面体部下方を除き、施釉。釉の発色は飴釉がかかる。	瀬戸・美濃18C
19	陶器鉢	IV区遺構確認面	口縁部片	淡灰色・硬・灰釉	内外面に施釉される。口縁部は肥厚し、外面に篋削りと二条の条痕がみられる。	瀬戸・美濃18C

2.昭和61年度調査地区

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
20	陶器鉢	IV区粘採坑小間割No67	口縁部片	暗赤褐色・硬・鉄釉	内面に9+α条のおろし目あり。口縁部外面に顕著な玉縁様の突帯を設ける。	常滑焼か？ 18C
21	陶器碗	IV区粘採坑小間割No32	口縁部片	灰色・並・陶胎染付	外面に格子文を具須で描く。施釉部分全体に貫入が入る。	唐津系 18C
22	陶器皿	IV区粘採坑小間割No46	口縁部片	灰色・硬・銅釉	内面および口縁部外面周辺のみ銅釉を施こし、釉色は淡緑色を呈す。	唐津系 18C
23	陶器皿	IV区粘採坑小間割No48	口縁部片	淡黄灰色・並・銅釉	釉は内面と口縁部外面のみ施釉。釉色は淡緑色を呈す。	唐津系 18C
24	陶器鉢	IV区粘採坑小間割No26	口縁部片	淡燕脂色・並・三島手	内外面に施釉。体部外面に三島手の刷毛施文あり。	唐津系 18C
25	陶器碗	IV区粘採坑小間割No52	体部片	淡灰色・硬・透明釉	内外面に厚く施釉。釉は透明感の強い淡黄色を呈し、細かな貫入が入る。	京焼系 18C
26	陶器小碗	II・III区	体部～底部片	淡灰色・硬・透明釉	口縁部際を除き、内外面に施釉。釉は淡黄色を呈し、細かな貫入が入る。	京焼系 18C
27	陶器皿	IV区粘採坑小間割No41	口縁部片	淡燕色・並・三島手	三島手の口縁部片である。	唐津系 18C
28	陶器碗	IV区粘採坑小間割No20	口縁部片	淡黄灰色・並・染付	内外面に具須による施文あり。	美濃焼 19C
29	陶器水注の蓋	IV区粘採坑小間割No59	口縁部片	淡黄灰色・硬・鉄釉、銅釉	外面のみ施釉と絵付あり。絵付は鉄絵と緑色釉で彩文し、透明釉を施す。	益子焼 19C
30	陶器碗	IV区C53G	体部片	淡灰色・硬・鉄絵	高台部周辺が露胎となり、その他に施釉外面に鉄絵あり。	京焼系 18C
31	陶器水注の蓋	IV区粘採坑小間割No63	口縁部片	灰色・硬・染付	天井部外面のみ施釉され、具須による絵付が施される。具須は淡い青色を呈する。	製作地不詳 19C
32	陶器燈火皿	III区粘採坑小間割No12	口縁部片	灰色・並・鉄釉	体部外面下方は露胎となり、他を施釉。油煙付着。釉色は錆色を呈す。	製作地不詳 18.19C
33	陶器皿	IV区粘採坑小間割No44	体部片	灰色・並・長石釉、鉄絵	内面に鉄絵が施され、内外面に長石釉が施釉される。端折皿か？	唐津系 18C
34	陶器皿	V区	底部片	淡黄色・軟・長石釉、赤絵	内面に鉄絵が施され、内外面に施釉。	美濃焼 16～17C

遺物観察表6 粘土採掘坑の出土遺物 磁器 (図25.26・P L 16.17)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
35	磁器小杯	IV区粘採坑小間割No20	底部片	淡灰色・硬・青磁釉	高台端部を除き施釉。釉は生掛け、露胎部は酸化ぎみ。青磁釉は青白磁色に近い。	伊万里系 17C
36	磁器小碗	IV区粘採坑小間割No59	口縁～体部片	淡灰色・硬・染付	印判でます形中に施文。具須はくすんだ青色を呈す。	伊万里系 18C
37	磁器猪口	IV区粘採坑	口縁部片	白色・硬・染付	内面に二条の圏線、外面に矢羽根様の染付あり。具須はわずかにくすんだ青色を呈する。	伊万里系 18C

II 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
38	磁器 猪口	IV区粘採坑 小間割No68	口縁部片	白色・硬・染付、青磁釉	口縁部内面に変形格子文を染付。外面に青磁釉を施す。呉須は山呉須、青磁釉は淡緑色を呈しているが、厚く施釉。	伊万里系 18C
39	磁器 猪口	IV区粘採坑 小間割No18	口縁部～体部片	白色・硬・染付	口縁部内面に変形菱形文、外面に意匠不明の染付文が施される。呉須は淡い青色を呈する。	伊万里系 18C
40	磁器 小碗	IV区粘採坑 小間割No5	口縁部片	白色・硬・染付	外面に梅樹文を呉須で施す。呉須はくすんだ青色を呈する。	伊万里系 18C
41	磁器 皿	IV区粘採坑 C37G	口縁部片	白色・硬・染付	内面に梅樹文を呉須で施こし、圏線が二条施される。呉須は山呉須。いわゆる「くらわんか手」	伊万里系 18C
42	磁器 小杯	IV区粘採坑 小間割No26	口縁部～底部片	白色・硬・染付	内面に圏線、外面に格子様の染付が施される。呉須は山呉須。	伊万里系 18C
43	磁器 小碗	IV区粘採坑 小間割No26	口縁部～体部片	白色・硬・染付	内面に圏線が染付けされ、外面に松様の施文がなされる。呉須は山呉須。	伊万里系 18C
44	磁器 皿	IV区粘採坑 小間割No39	口縁部片	白色・硬・白磁釉(染付か)	白磁釉が全体的に施され、口縁部に口錆が施される。内外面に菊皿としての押圧痕あり。	伊万里系 18C
45	磁器 小碗	IV区C37G 粘採坑	口縁部～底部片	淡灰色・硬・染付	外面に染付による圏線あり。呉須は淡い青色を呈す。	伊万里系 18C
46	磁器 皿	IV区C36G 粘採坑	口縁部片	白色・硬・色絵	内面に釉剥きがあり、蛇の目となる。蛇の目に淡緑色の釉が施される。おそらくは赤絵の一部と考えられる。	伊万里系 18C
47	磁器 向付	IV区粘採坑 小間割No2	底部片	白色・硬・染付	内面に輪花様の花文を呉須で施し、外面に三条の圏線がある。きわめて薄作りで呉須は青みの深い青色を呈す。	伊万里系 19C 景德鎮窯 16C～17C
48	磁器 蓋物の蓋	IV区粘採坑 小間割No67	口縁部片	白色・硬・染付、青磁釉	内面に変形格子文と不明の意匠あり。外面に青磁釉が施される。呉須は淡い青色青磁釉は淡緑色を呈す。	伊万里系 18C
49	磁器 水滴	IV区C36G 粘採坑	隅部片	白色・硬・染付、色絵	型物である。底面に脚を設け、天井部外面に型押施文があり、さらに赤絵が施される。	伊万里系 18C
50	磁器 皿か仏飯器	IV区1480杭 周辺	口縁部片	白色・硬・瑠璃手	内外に施釉され、釉色はややくすんだ青色を呈す。	伊万里系 19C
51	磁器 小碗	IV区粘採坑 小間割No18	体部～底部片	白色・硬・染付	内面に圏線と見込文様、外面に芭蕉文様の施文が呉須で施される。呉須は淡い青色を呈する。	伊万里系 19C
52	磁器 小碗	IV区粘採坑 小間割No55	体部片	白色・硬・染付	内面に圏線、外面に窓絵を施し、部分的に施文空間を呉須で埋める。呉須は淡い青色を呈する。	伊万里系 19C

2.昭和61年度調査地区

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
53	磁器 小杯	IV区C37G	底部片	淡灰色・硬・鉄釉、染付	外面体部下半に錆色の鉄釉が施され、それより上方に染付が施される。さらに掛分けがなされる。内面は白磁釉。	伊万里系 19C
54	磁器 猪口	IV区粘採坑 小間割No67	口縁部片	白色・硬・染付	外面にと草様の染付あり。具須はペロ藍	伊万里系 19C
55	磁器 鉢	IV区C53G I層中	口縁部片	白色・硬・染付	内面に植物文、外面に唐草文が施される。具須はペロ藍。	伊万里系 19C
56	磁器 小碗	IV区粘採坑 小間割No61	体部～高台 部片	白色・硬・染付	内面に圈線、外面に具須による施文あり。高台部は露胎となり、酸化ぎみ。具須はペロ藍。	伊万里系 19C
57	磁器 皿	IV区粘採坑 小間割No46	底部片	白色・硬・白磁	高台は蛇の目高台。畳付周辺が露胎となり、白磁釉が施される。内面に型押しによる菊花の押圧文あり。	伊万里系 19C
58	磁器 小杯	IV区粘採坑 小間割No44	体部～底部	白色・硬・クローム釉他不詳	56と同様の手法の小杯である。絵付の色合いも共通する。	伊万里系 20C
59	磁器 小碗	IV区粘採坑 小間割No58	口縁部片	白色・硬・クローム釉他不詳	内面は白磁釉、外面にクローム青磁釉が施され、緑色釉、鉄色釉、白色釉で草花文様の意匠が施される。	伊万里系 20C
60	磁器 猪口	III区D35G No7+IV区 小間割No49	口縁部片	白色・硬・染付	銅版染付により、楼閣文が施される。具須はペロ藍。	伊万里系 20C
61	磁器 碗	IV区粘採坑 小間割No58	口縁部片	白色・硬・染付	型紙印判による染付。具須はペロ藍。	伊万里系 20C
62	磁器 袴腰香炉	IV区	口縁部片	白色・硬・青磁釉	端部は還元ぎみの紫白色を呈する。青磁釉の発色は砧手を呈し、出来優れる。	龍泉窯 14C
63	磁器 型物	IV区粘採坑 小間割No59	型物部分片	灰色・軟・赤絵	外面のみ施釉。赤絵、緑色絵、黒色絵が施されている。型押しの細部をさらに篋で劃文する。内面に指頭圧痕が残る。	伊万里系 17～18C
64	磁器 蓋物	IV区遺構確 認面	肩部片	淡灰色・軟・長石釉	型押し成形による。内外に施文。天井部外面に花文その他の文様が押出され、肩部下に貼付の剝落あり。	伊万里系 時期不詳
65	磁器 急須	IV区粘採坑 小間割No40	把手片	白色・硬・染付	印判による染付が施される。	伊万里系 時期不詳
66	磁器 つまみ	IV区粘採坑 小間割No5	宝珠欠	淡灰色・硬・淡い瑠璃手	ペロ藍を用いて淡い青色釉を外面のみに施す。	伊万里系 19～20C

II 検出された遺構と遺物

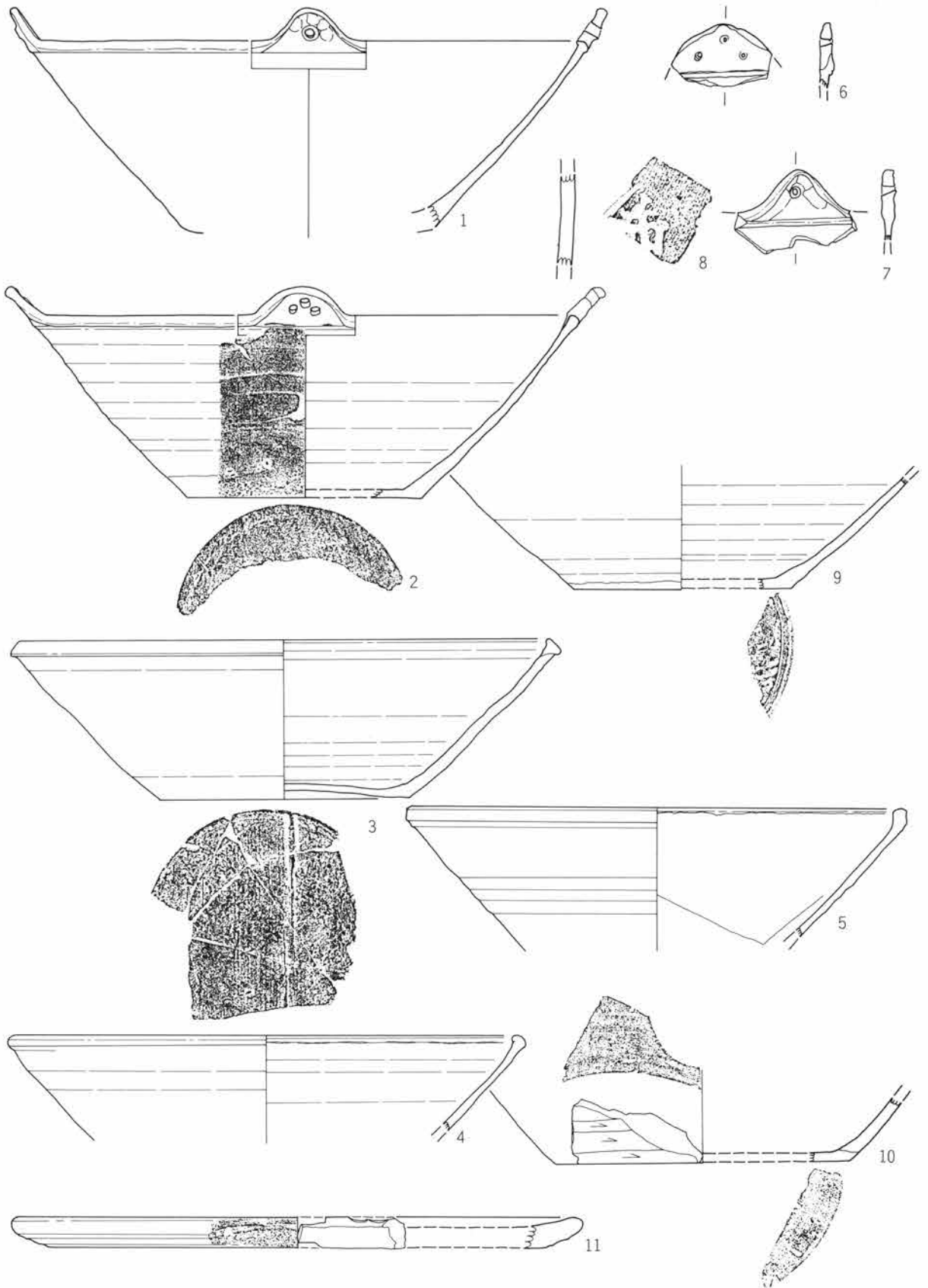


図27 粘土採掘坑の出土遺物（4）土鍋

とめたのが表1である。年代的には、16～20世紀のものが混在しており、廃棄されたものが土砂にまざりこんだものと考えられよう。

土鍋 土鍋の破片はいぶし焼成のものが101点、酸化焰焼成の軟質のものが108点出土した。いぶし焼の土鍋は101点のうち25点6例の接合資料があり、それも

含めて10点を図示した。形態的には①いわゆる鍋型の深いものと、②いり鍋と考えられる浅い皿状の二者がある。

前者は繭を煮る糸引き鍋である。多くの破片が出土したが、完形に接合できたものは皆無である。胎土その他の特徴や出土位置から同一個体と思われる

ものを、復元して図化している。(図27) いわゆる内耳はなく、2～3個の穿孔のある把手をつけたもので、1個体についている把手の数を確認できる資料はなかった。おそらく把手の形態から口縁の相対する位置に一对(2個)と考えられる。3～5の体部の資料も把手が付され则认为られるが接合できる資料がない。把手の穿孔はつり下げものと思われるが、ひもや自在鉤などの使用によって磨擦を受けていると判断できるものはなかった。成形は、粘土ひもの積み上げによるものと思われるが、薄い器壁に仕上げられている。

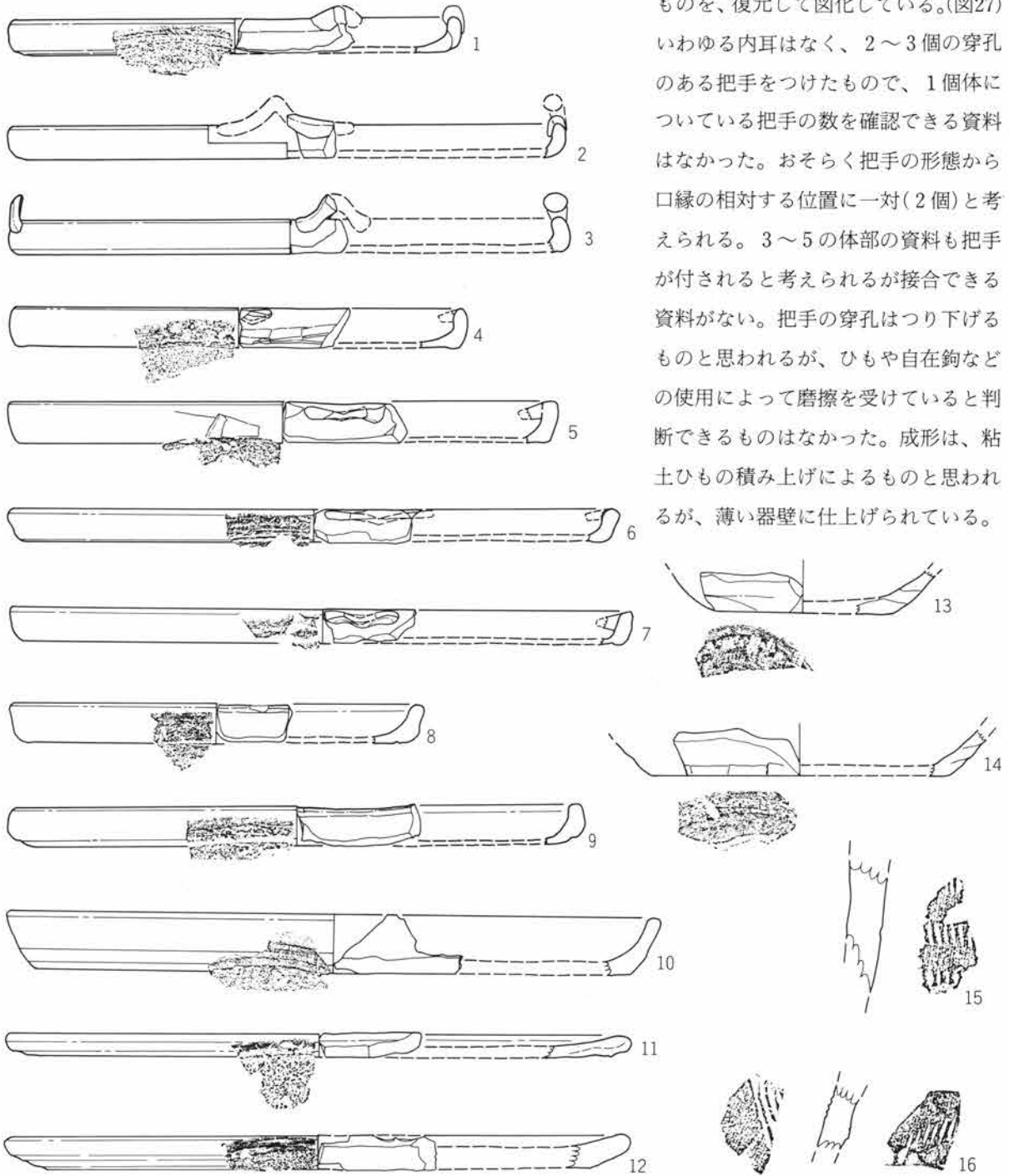
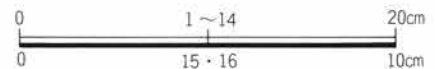


図28 粘土採掘坑の出土遺物(5) ほうろく



II 検出された遺構と遺物

底面は、砂(石)目が看取できる。また11のように幅広い工具によるなでによって砂目が消されているものもある。8は体部の破片である。「山に市」と読める印判が付されている。

浅い皿状の土鍋は口縁部1点(13)が出土した。厚い器壁で、底部は深いものと同様に砂目がついている。

酸化焰焼成の軟質の土鍋は、115点の破片が出土した。そのうち口縁部片は68点、底部片は47点である。いわゆるほうろくと呼ばれる豆いりや焼き餅に使用される土鍋である。酸化焰焼成の土鍋もいくつかの形態に分けることができる。

①盤状の体部につり手がついているもの

②盤状の体部に偏平な内耳がついているもの

③皿状の体部で耳が付されないもの

④やや厚手の土師質のもの

これらの形態ごとに数点を図示した。(図28)

1～3はひも状の粘土をまるく貼付けてつり手にしたもので、図示した3点とも破片であるのでつり手の数や貼付け位置は明確でない。平らな器形であるので水平に下げるために中世のほうろくと同様に三カ所のつり手があったものと考えられる。底面は砂目底である。4～8は偏平な内耳を付したもので、これも破片であるので内耳の数や貼付け位置は不明である。9、10は上記二形態のどちらかの体部片である。盤状の体部の形に特徴があるので図示した。

遺物観察表 7 粘土採掘坑の出土遺物 土鍋(1)系引き鍋 (図27・P L18,19)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴
1	土鍋系引き鍋	V区粘採坑小間割No7	口縁～体部口(38.5cm)	微細砂・白色細粒物を含む いぶし焼成・褐灰10Y R5/1～4/1	一孔を穿つ把手一個を残す。穿孔は焼成前で内側からと見られる。口唇部は玉縁状に肥厚させる。孔周辺にはおさえの指頭圧痕が残る。内外面は横方向の丁寧なで整形。体部外面下端は横方向の笥削り。
2	土鍋系引き鍋	IV区粘採坑小間割No4	口縁～底部片口(37.4cm) 底(16.4cm) 高 12.7cm	微細砂、赤、白細粒物を含む。 いぶし焼成。 外面灰黄褐10Y R6/2 内面褐灰10Y R4/1	三孔を穿った丸い山形の把手が一個残存。焼成前、外側からの穿孔である。内外面は横方向の丁寧なで。体部外面下端部は荒れた器面をみせており、無調整か？底部外面には周縁1.5cmほどを除いて砂目が残る。
3	土鍋系引き鍋	IV区粘採坑小間割No60	口縁～底部片口(36.7cm) 底(17.6cm) 高 11.0cm	微細砂、白、赤色細粒物を含む。 いぶし焼成。 灰N4/0	口唇部は玉縁状に内外面ともに肥厚させる。体部外面および内面横方向のなで。整形時の砂目を消すように幅3～4cmほどの板状工具で平滑になでている。手は残存しないが、1,2同様に一對つくとと思われる。
4	土鍋系引き鍋	IV区粘採坑小間割No52	口縁～体部片口(35.2cm)	微細砂を含む。 いぶし焼成。 灰N4/0	口唇部は玉縁状で、特に内面には大きく肥厚する。内外面とも丁寧なで。
5	土鍋系引き鍋	IV区粘採坑小間割No13	口縁～体部片口(34.0cm)	微細砂、赤、白色細粒物を含む。 いぶし焼成。 外面黒褐10Y R3/1 内面にふい橙10Y R7/3	口唇部は内湾し、内側にやや肥厚する。内外面は横方向の丁寧なで。
6	土鍋系引き鍋	IV区粘採坑小間割No59	把手	微細砂を含む。 いぶし焼成。軟質。 黄灰2.5Y R6/1	三孔を穿った把手の破片である。穿孔は焼成前、内側からの穿孔であるが、外側へ最後まできちんとあけきらず、中途半端である。穿孔の周辺には指頭圧痕が顕著である。

2.昭和61年度調査地区

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴
7	土鍋 糸引き鍋	IV区粘採坑 小間割No56	把手	緻密。 いぶし焼成。 灰N4/0	一孔を穿った丸い山形の把手の破片である。 焼成前、内側からの穿孔である。穿孔の周縁は指頭によるおさえ、などが顕著である。
8	土鍋 糸引き鍋	IV区粘採坑 小間割No59	体部片	微細砂、白色細粒物を含む。 灰N4/1	糸の印判がある。
9	土鍋 糸引き鍋	III区C35G	体部下位～底部 底(15.3cm)	緻密。 いぶし焼成。 灰N4/0	内外面ともなで。底部片外面には砂目残り、 成形時に台から離すときの工具痕と思われる 平行する沈線がみられる。
10	土鍋	IV区粘採坑 小間割No73	体部下位～底部 底(20.6cm)	微細砂、赤色細粒物を含む。 還元焰焼成。 灰N4/0	内面は、横方向のなで。外面は右回転ロクロ による篋削り。1～9の土鍋より厚手で、異なる 器種と考えられる。
11	土鍋	IV区	口縁～底部片 口(39.0cm) 底(34.6cm) 高 2.1cm	微細砂、白色細粒物を含む。 還元焰焼成。 灰5Y6/1	内外面とも横方向なで。底部外面に砂目が残 る。

遺物観察表8 粘土採掘坑の出土遺物 土鍋(2)ほうろく (図28・P.L13)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴
1	土鍋	IV区粘採坑 小間割No73	口縁～底部片 口(28.0cm) 底(26.4cm)	細砂、雲母を含む。 酸化焰焼成 にぶい橙5Y R6/4	内外面なで。底部外面には砂目が残る。口唇 部にはつり手の接合部がわずかに残っている。
2	土鍋	IV区	口縁～底部片 口(34.4cm) 底(33.6cm) 高 2.1cm	微細砂を含む。 酸化焰焼成 橙7.5Y R6/6	つり手接合部が残る口縁部破片である。内外 面とも丁寧になでられている。底面には砂目 が残る。体部下端から底部スス付着。
3	土鍋	IV区粘採坑 小間割No63	口縁～底部片 口(34.4cm) 底(34.6cm)	細砂を含む。 酸化焰焼成 橙5Y R6/6	つり手接合部の残る口縁部破片である。内外 面なで。底面には砂目と細い棒状の工具痕が ある。
4	土鍋	IV区粘採坑 小間割No69	口縁～底部片 口(28.4cm) 底(27.8cm) 高2.5cm	微細砂、雲母を含む。 酸化焰焼成 にぶい橙2.5Y R6/4	突起状の内耳の剥落部が残る破片である。内 面には幅狭のなで痕が横方向にみえる。底部 外面には砂目が残る。
5	土鍋	IV区粘採坑 小間割No67	口縁～底部片 口(35.0cm) 底(33.5cm) 高 2.6cm	細砂、雲母を含む。 酸化焰焼成 橙5Y R6/6	先端部欠損の突起状内耳のついた破片であ る。内外面とも横位のなで。底部外面には砂 目が残る。
6	土鍋	IV区粘採坑 小間割No74	口縁～底部片 口(38.3cm) 底(37.0cm) 高 2.1cm	微細砂、石英を含む。 酸化焰焼成 橙2.5Y R6/6	突起状内耳の接合部がわずかに残る破片であ る。整形はなでであるが、底部外面周 縁部には2～3条の沈線様の工具痕が残る。
7	土鍋	IV区粘採坑 小間割No5	口縁～底部片 口(39.6cm) 底(38.0cm) 高 2.2cm	微細砂を含む。 酸化焰焼成 橙5Y R6/6	わずかに先端を欠く突起状内耳の残る破片で ある。内外面なで。底部外面には砂目が残る。

II 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴
8	土鍋	IV区粘採坑 小間割No11	口縁～底部片 口(26.4cm) 底(24.6cm) 高 2.3cm	細砂を含む。 酸化焙焼成 橙5Y R6/6	内耳やつり手の付かない部分の破片である。 内外面は丁寧になでられ、底部外面には砂目が残る。
9	土鍋	IV区粘採坑 小間割No8	口縁～底部片 口(35.6cm) 底(34.7cm) 高 2.5cm	微細砂、雲母を含む。 酸化焙焼成 にぶい橙5Y R6/4	内耳やつり手の付かない部分の破片である。 内外面は丁寧ななで。底部外面には周縁部に段がつくほどの沈線がめぐり、その内側には砂目が残る。
10	土鍋	IV区粘採坑 小間割No11	口縁～底部片 口(41.0cm) 底(38.0cm) 高 3.7cm	細砂を含む。 酸化焙焼成 橙5Y R6/6	他の土鍋に比べ、器高の高いものである。体部下半は横方向寛削り。底部外面には砂目が残る。
11	土鍋	IV区粘採坑 小間割No73	口縁～底部片 口(39.2cm) 底(37.0cm) 高 1.4cm	細砂、細雲母、白色細粒物を含む。 酸化焙焼成 橙5Y R6/6	皿状の土鍋である。内外面なで。底部外面に砂目が残る。
12	土鍋	IV区粘採坑 小間割No10	口縁～底部片 口(41.4cm) 底(38.4cm)	細砂、細雲母、白色細粒物を含む。 酸化焙焼成 橙5Y R6/6	皿状の土鍋である。内外面なで。底部外面は凹み、砂目が残る。
13	土鍋	IV区粘採坑 小間割No74	底部片 底(10.6cm)	中砂、雲母、石英、赤色細粒物を含む。 酸化焙焼成 橙2.5Y R6/8	体部外面なで。底部外面は寛削り。内面はなで。
14	土鍋	IV区	体部下位～底部 底(18.6cm)	微細砂、雲母、白色細粒物を含む。 酸化焙焼成 にぶい黄橙10Y R7/3	体部外面下部横方向寛削り。外面上半及び内面は丁寧ななで。底部外面も丁寧になでられて平滑に仕上げられている。
15	土器	IV区粘採坑 小間割No26	体部片	微細砂、白色細粒物を含む。 酸化焙焼成 橙2.5Y R6/6	外面に短い平行沈線が三段みられる。
16	土器	IV区	体部片	微細砂、雲母を含む。 酸化焙焼成 にぶい橙7.5Y R6/4	内面には斜め方向の平行沈線、外面には横方向に四条の沈線が刻まれている。

9は丸く仕上げているし、10はやや深目の体部である。11、12は皿状の体部をもつもので、いぶし焼の1点(図-13)と同形態のものである。やはり底部は砂目底である。13～16は厚手の破片で1～12とはだいぶ形態の異なるものである。へら削りで整形されている。15・16にはたたき目によると思われる条線がある。

瓦 瓦片は151点が出土している。その多くは小破片で、酸化焙焼成の褐色を呈するものが27点含まれている。図示したものは形態が復元できるものに限った。1は酸化焙焼成の丸瓦である。2～4は、いぶし焼の瓦片で、4、5は表面がよく研磨されており、「磨き」の技法が用いられている。5は瓦片を、用いた円盤状のもので、打ち欠いて整形されている。用

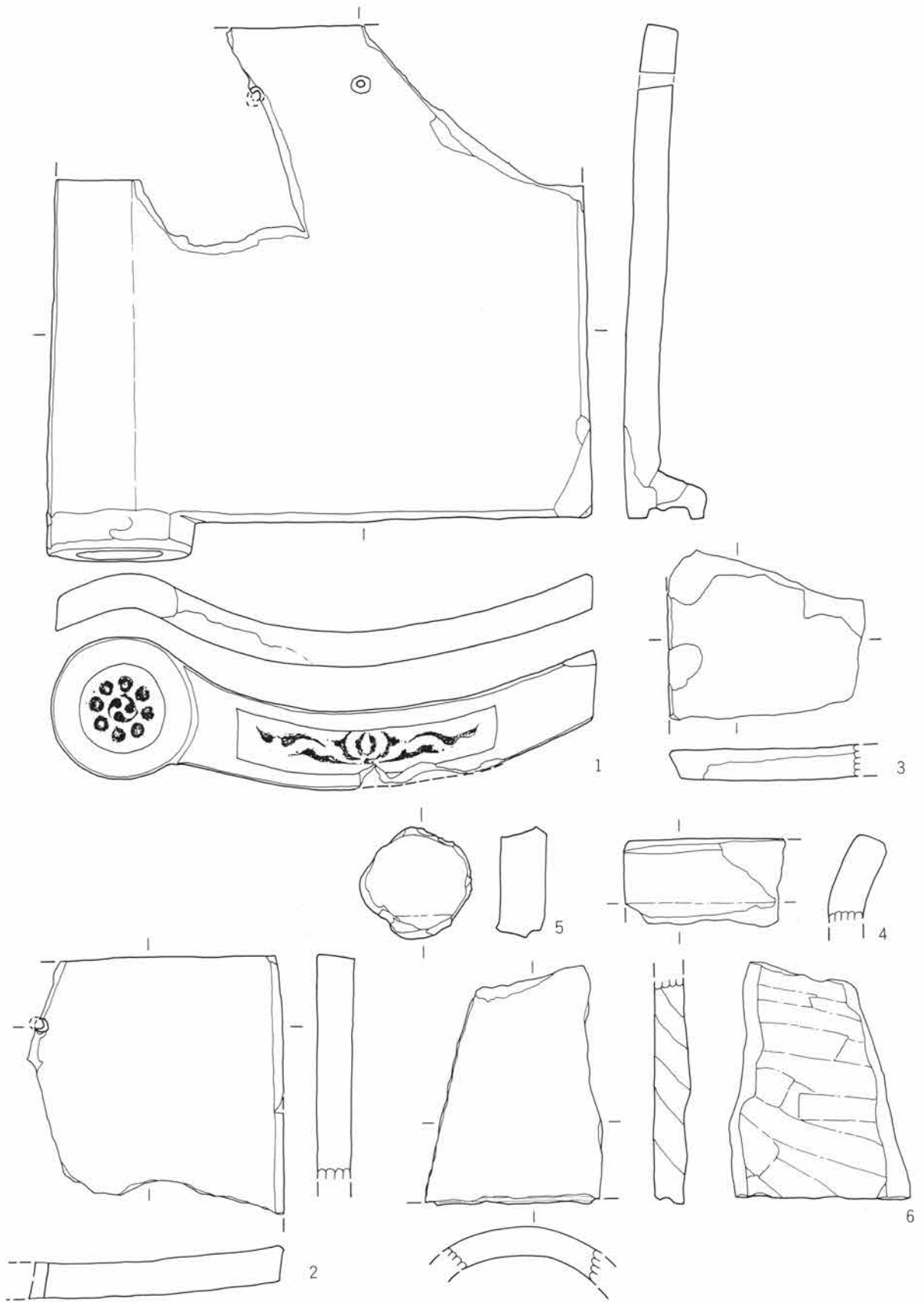


図29 粘土採掘坑の出土遺物(6) 瓦

0 10cm

II 検出された遺構と遺物

遺物観察表9 粘土採掘坑の出土遺物 瓦 (図29・P L19)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	備考
1	棧瓦 並刺巳付 唐草軒瓦	V区粘採坑	一部欠損 幅 28.3cm 長 25.4cm 垂長 4.1cm 巳径 7.3cm	微細砂、白色細粒物を含む。 いぶし焼 灰5Y R5/1	垂れには唐草文、小巳には連珠三ツ巳文が施される。上部にくぎ穴が二孔穿たれる。	明治時代初期か？
2	瓦	V区粘採坑	隅部破片	微細砂、白色細粒物を含む。 いぶし焼・灰N4/0	上面、側面は良くなでられている。くぎ穴が一孔残存している。	
3	瓦	III区 C 53G	側縁部破片	微細砂、赤、白色細粒物を含む。 いぶし焼・灰N4/0	上面がよく磨かれている。	
4	瓦	IV区粘採坑 小間割No64	側縁部破片	微細砂、赤、白色細粒物を含む。 いぶし焼・灰N4/0	やや湾曲のきつい瓦である。一般の棧瓦ではない可能性もあるが、詳細は不明である。	
5	瓦	IV区	完形 径 4.0cm	微細砂、白色細粒物を含む。 いぶし焼・灰N5/0	瓦片の二次利用による円盤状の土製品である。	
6	丸瓦	IV区粘採坑 小間割No2	端部破片	細砂、赤色細粒物を含む。 酸化焰焼成 外面 灰黄褐10Y R4/2 内面 におい黄橙10Y R6/3	底面には成形時の圧痕が沈線様に残っている。	

遺物観察表10 粘土採掘坑の出土遺物 その他 (図30・P L19・20)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	備考
1	不詳	V区粘採坑 小間割No1	一部欠損	微細砂を含む。 還元焰焼成 灰黄褐10Y R6/2	角形の土製品であるが、何か大きな器物に付着する部分と思われる。下面はゆるく内湾している。	
2	不詳	V区粘採坑 小間割No. 1	破片	細砂、白色細粒物を含む。 還元焰焼成 灰白10Y R7/1	断面三角形の突帯が付されている。外面には篋による調整、内面には指頭の指紋が明瞭に残る。	
3	不詳	IV区	破片	微細砂を含む。 いぶし焼 褐灰10Y R5/1	内面には砂目が部分的に集中して残る。内面に折れ曲がっていく部分が2ヵ所あるが、全体の器形は不明である。	
4	不詳	IV区粘採坑	把手か？	細砂、雲母を含む。 還元焰焼成 におい褐7.5Y R6/3	外面はよくなでられている。内面には指頭圧痕が残っている。	
5	不詳	IV区	破片	微細砂、赤色細粒物を含む。 還元焰焼成 褐灰10Y R4/1	下面は、凹んでいるところがあり、型づくりを想起させる。	
6	不詳	IV区粘採坑 小間割No72	口縁部片 口(12.2cm)	微細砂を含む。 還元焰焼成 におい橙7.5Y R7/3	内外面とも回転なで。	
7	土師器 甌？	III区	体部～底部 片	中砂、雲母、赤色細粒物を含む。 酸化焰焼成、軟質 橙5Y R6/6	底面に二孔、側面に一孔が穿たれている。整形は摩耗が著しく明確でない。	

途は不明である。1は、二偶を欠くが、ほぼ完形の
 棧瓦である。V区小間割11の南側の比較的大きな作
 業区画に底面直上で検出されたものである。軒に並
 べられたいわゆる「唐草」で、剣垂には唐草文、小巴
 は連珠三ツ巴文が作出されている。上部には瓦を止
 めるためのくぎ穴が二孔うがたれている。

その他の出土遺物 1～4、7、11はそれが何であ
 るかよく分からない遺物である。4は把手の剥落し
 たものか。5は火鉢の五徳のようなものか。9、10
 は火鉢の縁にのせた土製品と思われる。12は小型の
 火鉢でIV区小間割52の底面に接して検出されたもの
 である。13～15は土管と思われる酸化焰焼成の筒型

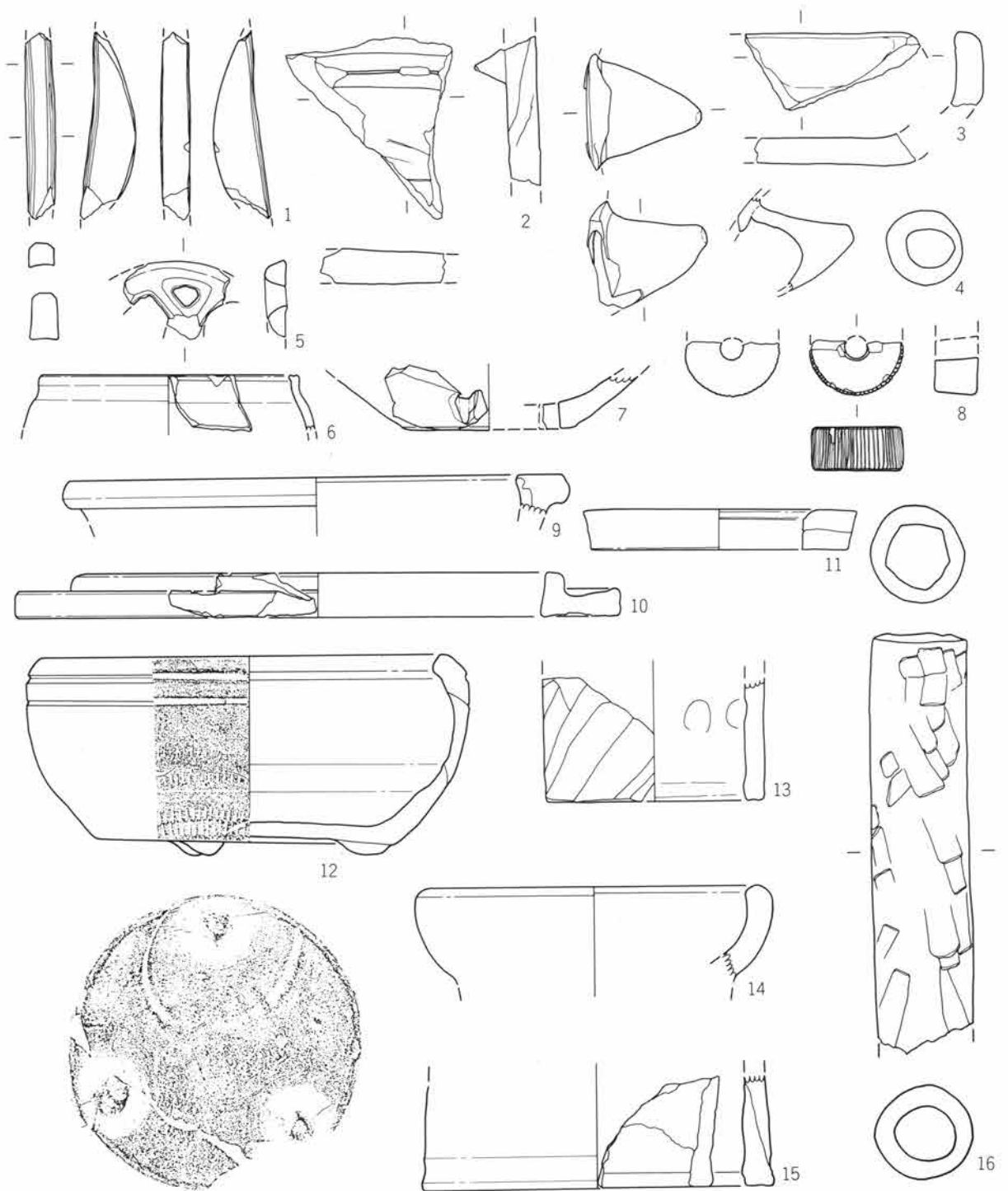


図30 粘土採掘坑の出土遺物 (7) その他

II 検出された遺構と遺物

のものである。16はわらを燃やす際に空
気調節のために用いられた筒型の土製品
である。16がV区粘土採掘坑小間割11で
先述した棧瓦とともに採掘坑の底面直上
で出土した他は、みな粘土採掘坑の埋没
土に混在して出土した。

鉄製品 鉄製品の破片は112片が出土し
た。そのうち10点を図示した。1・2は
角釘、3～7は様々な形態・用途の金物
である。8は蹄鉄、9・10は桑切鎌であ
る。桑切鎌の茎が本例のような形態を
示すのは特徴的であり、分布論的な考察が

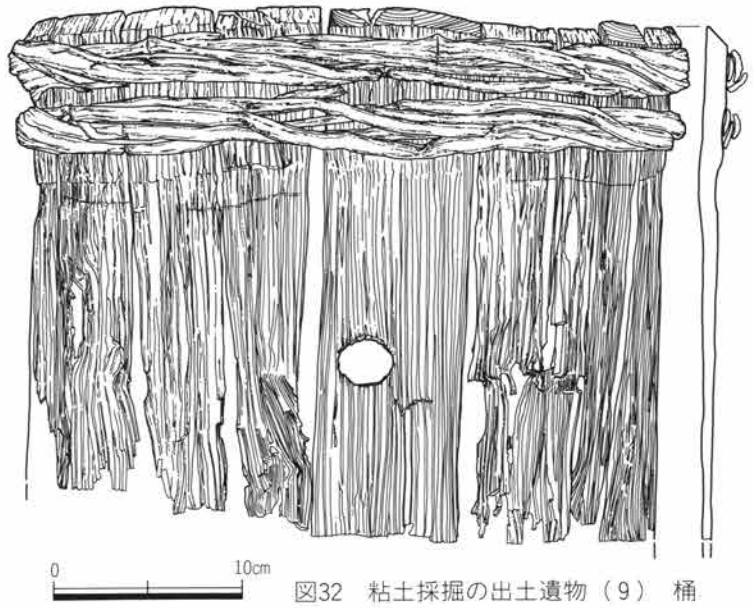


図32 粘土採掘の出土遺物（9）桶

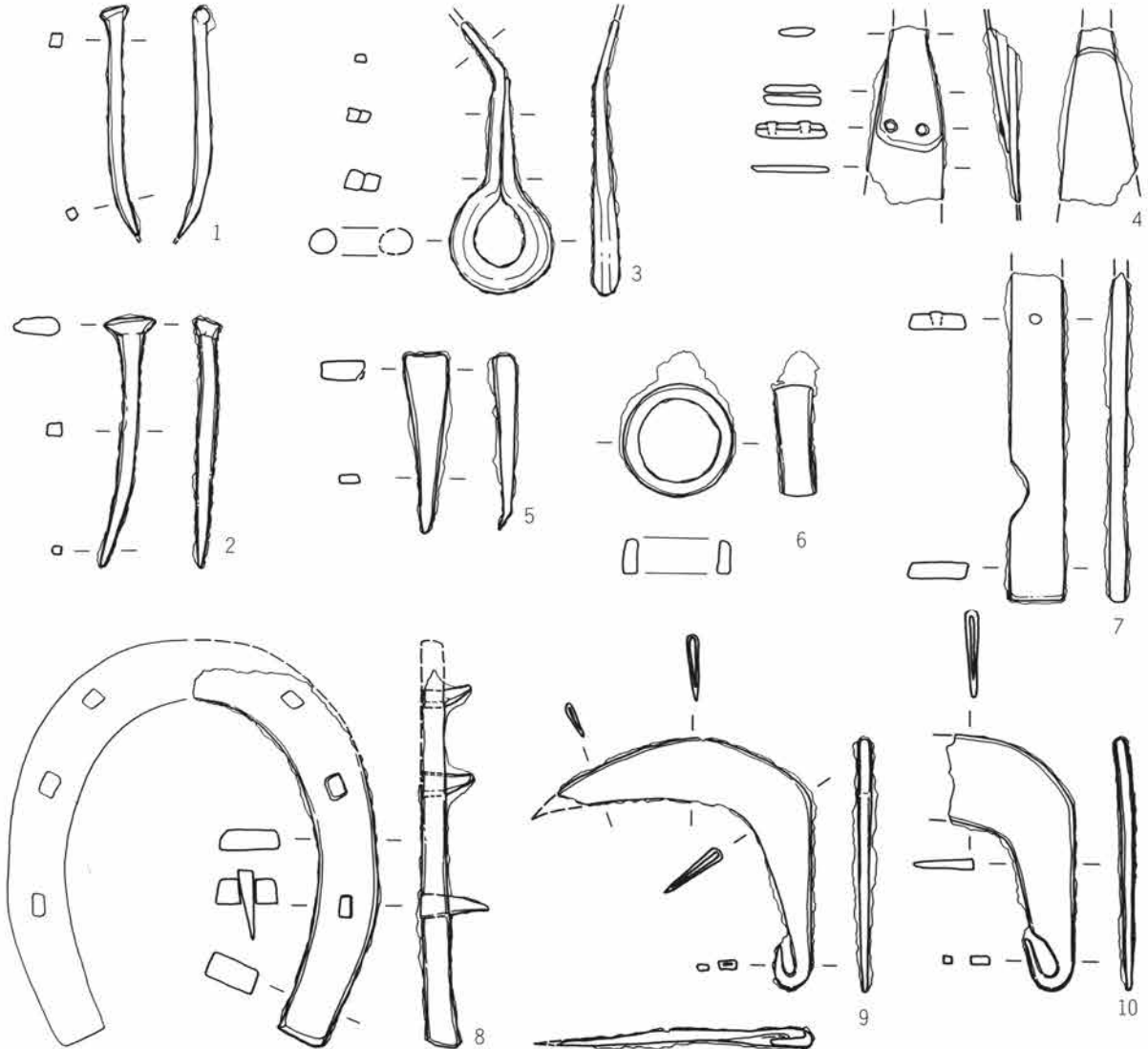


図31 粘土採掘坑の出土遺物（8）鉄器

2.昭和61年度調査地区

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・色調	特徴	備考
8	紡輪	IV区粘採坑 小間割No71	半欠	微細砂、赤色細粒物を含む。 還元焙焼成 褐灰10Y R6/1	体部外面には、5~7条/1cmの条線が刻まれている。中央には一孔が穿たれているが、内面には回転時の使用痕と思われる細かい横方向の条線がみられる。	
9	不詳	IV区粘採坑 小間割No20	口縁部片 口(23.7cm)	微細砂を含む。 いぶし焼・灰Y R5/0	上面及び側面は丁寧に研磨されている。	
10	不詳	IV区粘採坑 小間割No57	破片 口(21.0cm) 底(29.0cm) 高(2.1cm)	微細砂を含む。 酸化焙焼成 橙5Y R6/6	全面よくなでられているが、底面は使用のためか器面が荒れている。口縁部内面には全面スス付着。	火鉢の縁か？
11	不詳	IV区粘採坑 小間割No46	破片 口(13.2cm) 底(12.3cm)	微細砂を含む。 還元焙焼成。硬質。 灰N4/0	内外面篋削り。	弧状の把手か？
12	火鉢	IV区粘採坑 小間割No52	口縁~底部 口 19.5cm 底 14.4cm 高 9.5cm	微細砂、白色、赤色細粒物を含む。 いぶし焼 外面 暗灰N3/0 内面 褐灰10Y R5/1	体部上半に二条の沈線が巡り、下半は平行たきが五段施される。底部には三足の突起が付され、接合部は弧状に篋で調整されている。	
13	土管	III区	体部~底部片	細砂、白色、赤色細粒物を含む。 酸化焙焼成 橙5Y R6/6	外面斜め方向のなで。内面横方向のなでが施されるが、粘土の接合痕が残る。指頭によると思われる圧痕も見られる。	
14	土管	IV区	口縁~体部 口(15.7cm)	細砂、赤色、白色細粒物を含む。 酸化焙焼成 にぶい橙5Y R6/4	土管の継ぎ目部分と思われる。内外面とも横方向のなでが施される。	
15	土管	IV区粘採坑 小間割No16	体部~底部片 底(16.8cm)	細砂、赤色、白色細粒物を含む。 酸化焙焼成部 橙5Y R6/6	外面縦方向なで。内面横方向のなで。底は内外面とも丁寧に横方向になでられ内面には緩やかな稜が残る。内面下部から底部にかけてスス付着。	
16	筒型土製品	V区粘採坑 小間割No4	半欠	細砂、赤色細粒物を含む。 酸化焙焼成 浅黄橙10Y R8/3	内面には砂目残り、平坦であるので、平らな粘土を筒状に丸めたものと思われる。外面は篋状工具でなでられているが器面は荒い。	わらを燃やすときの煙突か？

遺物観察表11 粘土採掘坑の出土遺物 鉄器 (図31・P L20)

番号	器種	出土位置	量目	特徴	備考
1	鉄器 角釘	IV区粘採坑 小間割No11	先端部欠損 長 6.5cm	断面四角の鉄釘である。先端がやや湾曲する。	和鉄
2	鉄器 角釘	IV区粘採坑 小間割No67	完形 長 7.0cm	あたまの部分が楕円形を呈する。サビ割れあり。	和鉄
3	鉄器 つり金物	IV区粘採坑 小間割No59	完形 長 7.6cm 幅 2.9cm		和鉄
4	鉄器 工具	IV区粘採坑 小間割No6	両端欠損 幅 2.0cm	ソフテックス写真の観察によれば、薄い鉄板を止め金具で二カ所止めている。	和鉄

II 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土位置	量	目	特徴	備考
5	鉄器 工具	V区粘採坑 小間割No2	完形 長 5.0cm 幅 1.3cm		断面が方形になるくさび形の工具である。	和鉄
6	鉄器 責金物	IV区粘採坑 小間割No67	完形 外径3.1cm 内径2.2cm 幅 1.2cm		板目のきたえはだが外面にみえる。	和鉄
7	鉄器 細板状鉄器	IV区粘採坑 小間割No59	半欠 長 9.0cm 幅 1.5cm 厚 0.4cm		下端から2.2cmのところに幅1.8cm、奥行き0.5cmのえぐりがある。また7.9cmのところには留金具があるのがソフテックス写真から判明した。	和鉄
8	鉄器 蹄鉄	IV区粘採坑 小間割No62	半欠 長 (11.2cm) 幅 (10.4cm) 厚0.8cm		征目のきたえはだがみえる。端は完存。丸くなる方が欠損している。打ち込まれた釘が残っている。	和鉄
9	鉄器 桑切り鎌	IV区粘採坑 小間割No63	刃先欠損 刃長 5.1cm 茎長 4.5cm		茎尻に特徴のある新身の桑切り鎌である。茎末端を折り曲げ、茎穴状に仕立てて茎穴としている。	和鉄
10	鉄器 桑切り鎌	IV区粘採坑 小間割No59	刃部欠損 茎長 5.2cm		9と同様の桑切り鎌であるが、刃部は欠損している。これも茎末端を折り曲げ、茎穴状に仕立てて、茎穴としている。	和鉄

期待される。

結桶 IV区小間割69で、口縁部を下にして倒立状態で検出された。体部下半から底部は欠損している。確認時にはすでに脆弱であり、ウレタンフォームで固め、土ごと取り上げた。口縁部外面を面取りした片木を丸く並べ、口縁部寄りに竹を編んだタガを二条巡らしている。この二条のタガの下に押し付けられたような凹線が体部に残っており、もう一条のタガが巡っていたことが考えられる。また体部中央には直径2.8cmほどの円孔が一孔穿たれている。今回、材質同定や内容物の分析は行っていない。

III 本郷尺地遺跡調査の成果と問題点

1. 藤岡粘土層について

(1) 藤岡の地形と粘土層

I章—4で述べたように、藤岡地域の地形は、主に氷河時代の鮎川や神流川によってつくられた扇状地がその後の河川の下刻によって台地化した地形すなわち藤岡台地をその中心としている。従来、藤岡台地は一地形面としてとらえられることが多かったが、北方の利根川寄りや鮎川左岸の丘陵と接する部分も含めて数面の地形面に分けることができる。これらの地形面区分をするには、ローム層や指標テフラ層の堆積状況や、粘土の存在の解釈など更新世の台地面を覆う堆積物・土壌の発達や、完新世の沖積作用による谷地形の埋積等の問題を明らかにしなければならない。そしてこれらの地形環境の変化は、遺跡分布と大きく関わってくると思われる。考古学的な観点からの藤岡台地周辺の地形発達の解明が必要である。

藤岡の地形を語る際に最もクローズアップされるのは粘土層の存在である。この粘土層は古代には埴輪や古瓦、近世以後には瓦の生産に利用され、藤岡の生活と大きく関わってきた地層である。1962年に新井房夫はこの粘土層を「藤岡粘土層」と呼び、藤岡台地における粘土の分布や堆積状況を詳細に紹介した。^(文献7)そして、粘土層の形成過程を群馬県北西部全体を視野に入れた地形発達史として位置付けたのである。すなわち藤岡粘土層にはBPより上層にある上部粘土層とBPより下位にある下部粘土層があり、下部粘土層と上部粘土層の下位が水成堆積であることから、岩鼻 Mud flow 堆積物が烏川をせき止めて藤岡地域に湿潤な地形を出現させ、その水中にロームが堆積したものが藤岡粘土層だとしたのである。以後藤岡台地の地形発達を述べる際には、藤岡地域に湿潤な地形＝水域の時期があったことが言われる^(文献6)

ようになった。

BPやYPは考古学的には旧石器時代を考えるうえで不可欠な指標テフラである。これらのテフラを挟在して粘土層が存在することは、藤岡地域の旧石器時代の遺跡の分布とその環境との関連を把握する上で重要である。粘土の成因が水域であるとすれば、遺跡分布は限定されてくるであろう。藤岡地域の旧石器時代の遺跡は、まだあまり数を知られていないが、その分布は、粘土層の形成過程と大きく関わっていると考えられる。

(2) 沖積地の粘土層

従来問題にされてきた「藤岡粘土層」は、中部ローム層から上部ローム層に相当する更新世の堆積物から形成された土壌であった。しかし、藤岡地域の発掘調査が進むなかで、ローム層のない沖積地に別の粘土層の堆積がみられることが判明した。

本郷尺地遺跡の基本土層は、表土下の腐植土層中に浅間A軽石と浅間Bテフラを挟み、さらに腐植質シルト9cmの下に、粘土層が堆積している。粘土層の厚さは1.5cmほどで、その下は礫層となる。残念ながら、本遺跡の調査ではこの粘土層中のテフラの同定を行うことができなかったが、少なくとも肉眼で確認できるテフラ層はなかった。このような沖積地内の層序は、従来言われてきた「藤岡粘土層」の層序とは明らかに異なるものであり、藤岡地域の沖積地に分布する粘土層は、いわゆる「藤岡粘土層」ではないと言わなくてはならない。

一方、同年発掘調査した長瀬線バイパス用地内の中大塚遺跡では、YPを確認したが、その下位に粘土層は確認できていない。^(註1)長瀬線バイパスは藤岡台地表面に残る浅い凹地内に沿って路線が作られている。この凹地は藤岡台地を東西に二分するような位置にあるが、これは台地上に残された古い侵食谷の

III 本郷尺地遺跡調査の成果と問題点

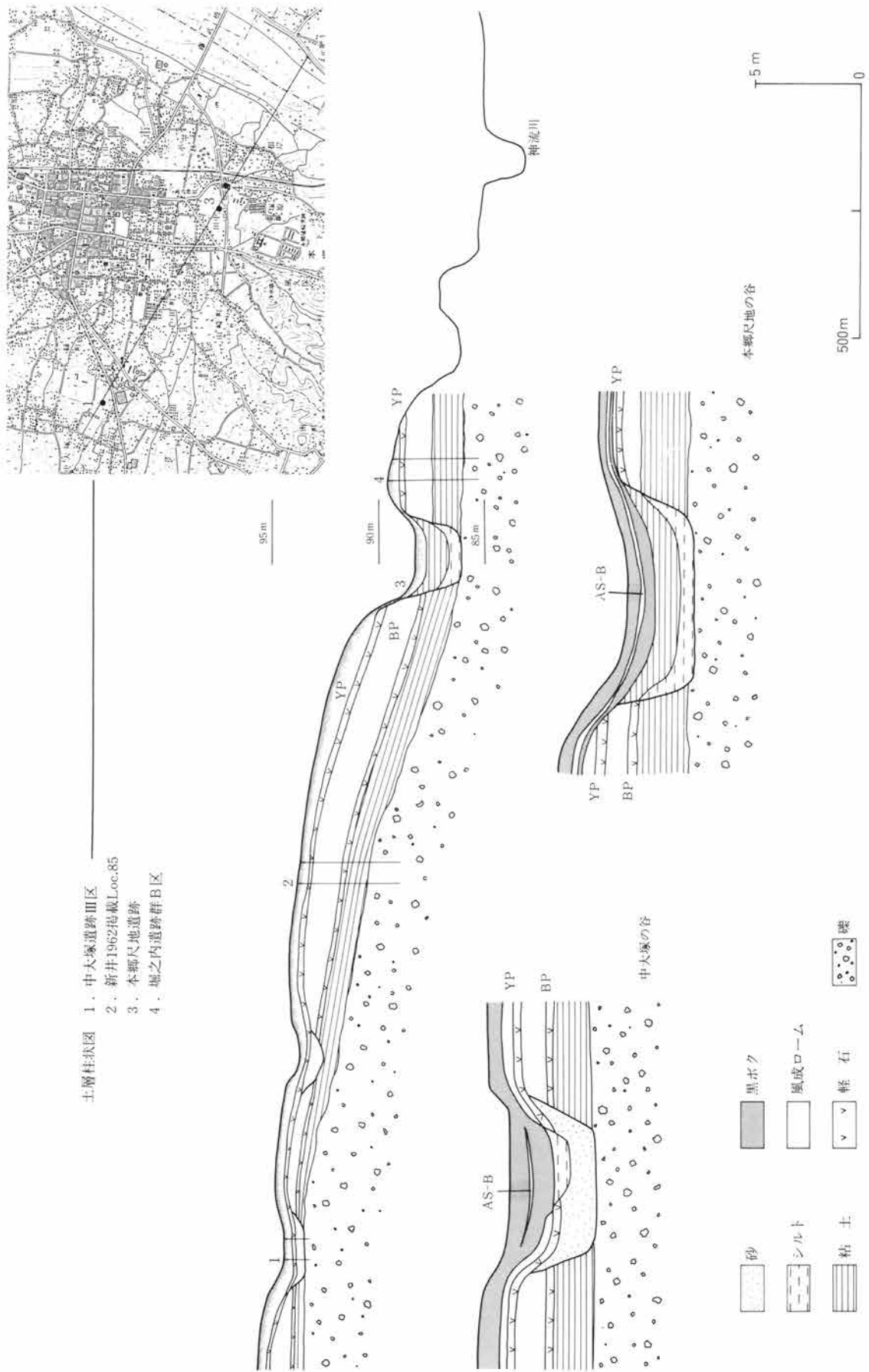


図33 藤岡地域における粘土層の堆積模式図

跡であり、同じような凹地は他にもいく筋か認めることができる。図33は本郷尺地遺跡の東を流れる沖積川から藤岡台地上の中大塚遺跡までの横断面を模式的に画いたものである。BP下の粘土層が堆積する台地部は、風成ロームをさらに堆積させて台地となる。その一部では台地にいく筋かの侵食谷ができ、シルトや砂を堆積させる。中大塚遺跡がこれにあたるが、その後YPの降下があり、風成ロームを堆積させ、完新世には黒色腐植質土によって谷の埋積が進む環境にあったものと思われる。これに対して本郷尺地遺跡のある谷は完新世のテフラのみが堆積する新しい沖積地ということが出来る。これらの土層は藤岡市教育員会で発掘調査した堀之内遺跡群や株木遺跡の土層柱状図に照らしてみても矛盾はない。台地部と沖積地の粘土層は違った堆積過程によって形成されたものと考えられる。そして台地部には粘土層の堆積しない埋積谷が存在する。^(註2)

(3) 沖積地の粘土層の堆積と縄文時代の遺跡

本郷尺地遺跡では、沖積地の粘土層の中に縄文時代後期の遺物包含層が検出された。これらの遺物は直下に土坑の掘りこみを伴っており流れ込みではない。土坑の掘りこみ面は明確ではなかったが、粘土層上面から縄文土器の出土があり、土器を包含する粘土層を10~20cm掘り下げた段階で土坑の平面形が確認された。土坑の壁や底面も粘土層であるが、これは遺跡東の段丘西斜面の裾部であって、前章で述べた台地部の粘土層の可能性が大きい。土坑廃絶後も粘土の堆積は続き、谷部の埋積は進行したと考えられる。

藤岡市小野地区の後期から晩期の土器を出土した谷地遺跡では、「台地上から本遺跡と同時期の遺物が出土したという記録があり(註1)、集落址が広がると考えられ、また56年度の谷地遺跡の調査において多量の土器とともに「埋設土器」が確認され、台地の上下では遺跡の性格が異なっていると考えられる。」とし、崖線下の遺跡について言及している。このような縄文時代の遺跡の立地も、完新世初期の環

境と大きく関わっていると考えられ、それを明確にする手段としてYP降下以後の沖積地に堆積する粘土層に注目していく必要がある。

この粘土層の形成については、現時点では明らかでないが、水成堆積によるものと思われる。本郷尺地遺跡では、摩滅した古式土師器がシルト質粘土層から出土している。このシルト質粘土層の谷部埋積は古墳時代前期までは続いていたことがわかる。以後、離水して黒色腐植質シルトが堆積しているときに浅間Bテフラが降下することになる。

2. 沖積地の古代開発と溝

前章で述べたように沖積地内は、古墳時代前期のある時期から黒色腐植質シルトが堆積する。笹川が開析した沖積地(以後笹川沖積地)の弥生時代以降の遺跡分布は、図34のようである。特に古墳の分布は多く、右岸の段丘上には古式古墳も含む小林古墳群や、土師神社の周辺に古墳群がある。また、左岸の台地上には諏訪神社古墳や、野見塚古墳群、戸塚古墳群が分布しており、笹川沖積地もこれらの支配勢力を支えた生産基盤となっていたことが推定される。

流域に沿って立地していたと思われる集落遺跡は断片的ではあるが、国道254線バイパス用地内で堀之内遺跡が、県道バイパス用地内で株木遺跡が調査されている。堀之内遺跡では古墳時代前期の墓域・居住域を始めとして、奈良・平安時代に亙る住居群が調査された。平安時代まで継続する伝統集落が笹川沖積地内にも成立していたことが判明したのである。また遺跡詳細分布調査の結果を用いて、表採遺物の年代から遺跡の年代を推定し、その継続性で遺跡を分類してみると、伝統集落、第一次新開集落に加え、飛躍的に第二次新開集落が成立しているようすが看取できる。

本郷尺地遺跡周辺の笹川は空中写真で見るとかぎの手状に直角に折れ曲がっている。この流路は周辺の地割とも良く合致しており、一種の方画地割を成している。この地割はあまり広がらず、発掘調査区

III 本郷尺地遺跡調査の成果と問題点

周辺の沖積地内と台地上の市街地の中の数本の道路に及ぶ範囲にしか残存しない。地割の基準線上に笹川がのっているとは限らないので、方面の一辺の規模は不明である。本郷尺地遺跡で調査した浅間A軽石が埋土上層にある2号溝や、それよりやや新しいと思われる1号溝や4号溝がその方面地割の方向に一致していることは興味深い。この方面地割の成立が少なくとも18世紀まで遡ることがわかる。1986年に発表された藤岡市遺跡詳細分布調査報告書Vでは、この河川の屈曲は鎌倉時代の館跡に関連するものと考えられている。

笹川沖積地には、下流の戸塚地内にも方面地割が残っている。これらは2kmほど離れているが、同一河川の沖積地開発の一形態としても考えられる。本

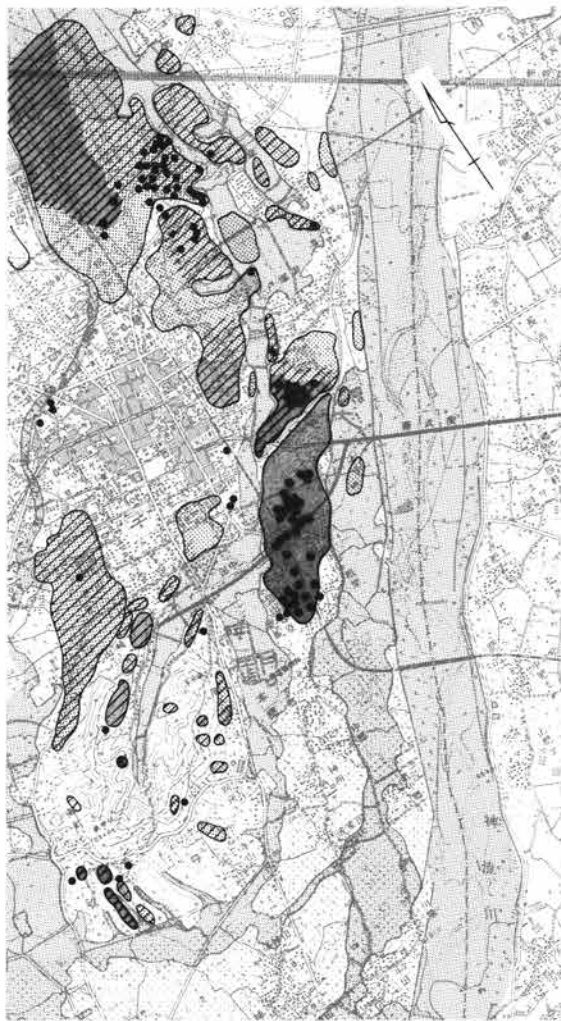


図34 笹川沖積地の遺跡分布図

郷・戸塚ともに、小林古墳群、戸塚古墳群といった古墳の密集地帯である。周辺の沖積地は開発対象としては恰好の場所であったからこそ、古墳時代から支配者たちの押さえるべき場所であったのであろう。先述した遺跡の分布動向からみれば、律令時代の条里制との関連も追及されなければならないだろう。

3. 粘土採掘坑について

本郷尺地遺跡で検出された粘土採掘坑は、現在のような重機による粘土掘削以前の手掘りによる作業痕跡であろうと思われた。地元の人々の話によると、昭和30年代まで手掘りによる粘土採掘が行なわれていたという。本郷尺地遺跡の粘土採掘坑は、沖積地のやや黒っぽい粘性の強い粘土を採っている。地割に沿って作業区画があり、2m四方ほどの方形に残っているのが特色であった。時期は出土遺物から江戸時代末期から明治時代初期と考えられる。そこで、藤岡の手掘り粘土採掘について、年配の瓦製造業者および粘土採掘業者の方に話を聞いてみることにした。藤岡市内も、手掘りの粘土採掘を知っている人はもう少なくなったという。

鬼瓦師中村重太郎氏の紹介で、今は重機で粘土採掘業を営む酒井秀夫氏を訪ねた。当時の粘土採掘は専門の業者によるというよりも農閑期の農家の仕事であった。瓦屋が地主と交渉し、〇坪〇年という契約をし、粘土掘りは瓦屋から頼まれて掘ったという。掘削は「坪請け」で、はねておいた表土と混ざらないように、1.8m四方に「壁」を残して掘った。そして、一日数回、大八車で瓦屋まで掘る人自身が運搬した。したがって、掘る深さは粘土層の厚さによっても違うが、一人一日一坪は掘れないという。本郷田中地区の笹川周辺で掘ったことがあるかという質問には、「谷の粘土は瓦には向かないので採らない。あそこを掘ったのは火鉢屋だ」という答えであった。

粘土採掘業者は、藤岡で採れる粘土のうち、台地の上の粘土と、川沿いの粘土と、南町あたりの沖積地の粘土を経験的に区別している。川沿いの黒っぽい

3. 粘土採掘坑について

い粘土は粘りが強く、焼くと縮むので瓦には使われない。また、南町あたりの沖積地の粘土は風化しており、これも瓦には向かないということであった。瓦には緑町、芦田町あたりの台地上の粘土が最適だという。藤岡の窯業に生きてきた人々は自然的な地形環境の差を自分の生活体験として認知しているのである。

次に本郷の笹川周辺の粘土を採ったという火鉢屋をたづねた。もう既に藤岡にはほうろくや火鉢をつくっている業者はなく、話を聞くことができたのは、15,6年前まで火鉢屋を営んでいた藤井藤太郎氏である。藤井氏は、今はもう道具類も売ってしまったという。火鉢屋の粘土の採りかたは、自ら掘るのではなく、10軒ほどの火鉢屋さんが組合をつくり、共同で地主と交渉して借地し、農家の副業の粘土掘り人夫に掘削を頼んだ。その掘り方も瓦用の粘土採掘と同じであったという。藤井氏が主に作ったのは養蚕火鉢とほうろくであった。本郷尺地遺跡の粘土採掘坑の埋没土からは何種類かの近世・近代土器が出土しているが、焼きもちや豆いりに使ったほうろくや、手あぶり用の小形の火鉢の他に、藤井氏の父親の代にはつくっていたという繭を煮る土鍋＝糸引き鍋も含まれている。

以上のような聞きとり調査で、本郷尺地遺跡の粘土採掘の作業区画と小間割が、借地単位と「坪請」を端的に示していることがわかった。しかし、市史編さん室の関口正己氏によれば、このような火鉢屋に関する文献はなく、その歴史はあまり良くわかっていない。したがって本郷尺地遺跡の粘土採掘坑がいつのものであるかを断定できる決め手を見付けることはできなかった。出土遺物の特徴①埋没土に含まれる陶磁器のうち新しいものは20世紀に入ること、②蹄鉄の普及は明治維新後と考えられること、③糸引き鍋の存在などから明治時代初期のものと考えるのが妥当と思われる。

註1 『年報』5 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

『年報』6 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

なお、中大塚遺跡の調査ではテフラの同定を(株)パリオ・サーベイに委託している。その結果および土層に関する調査所見の掲載に

ついては調査担当斉藤利昭の手を煩せた。

註2 本節の記述にあたっては、(株)パリオ・サーベイの早田勉氏との藤岡地域の地形についての討論が前提となっている。

参 考 文 献

- 1 『藤岡市遺跡詳細分布調査(I) 小野地区』 藤岡市教育委員会 1982.3
- 2 『藤岡市遺跡詳細分布調査(II) 美土里地区』 藤岡市教育委員会 1983.3
- 3 『藤岡市遺跡詳細分布調査(III) 平井地区』 藤岡市教育委員会 1984.3
- 4 『藤岡市遺跡詳細分布調査(IV) 神流地区』 藤岡市教育委員会 1985.3
- 5 『藤岡市遺跡詳細分布調査(V) 藤岡地区』 藤岡市教育委員会 1986.3
- 6 木崎喜雄・野村 哲・中島啓治編 『群馬のおいたちをたずねて(下)』 上毛新聞社出版局 1977.8
- 7 新井房夫 『関東盆地北西部地区の第四紀編年』 群馬大学教育学部紀要 1962
- 8 『関東ローム』 関東ローム研究グループ 1965
- 9 『F 1 竹沼遺跡』 藤岡市教育委員会 1978.3
- 10 『A 1 堀ノ内遺跡群(本文編)』 藤岡市教育委員会 1982.3
- 11 『C 4 小野地区遺跡群発掘調査報告書』 藤岡市教育委員会 1982.3
- 12 『森・中 I・中 II 遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983.3
- 13 『B 4 株木遺跡』 藤岡市教育委員会 1984.3
- 14 『F 9 薬師原遺跡』 藤岡市教育委員会 1985.2
- 15 『上並榎南遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985.3
- 16 『群馬県藤岡市滝下遺跡発掘報告書』 滝前・滝下遺跡調査会 山武考古学研究所 1986.1
- 17 大塚達朗 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(1) —最近の成果の検討と新たな分析—」 『東京大学文学部考古学研究室紀要』 2 東京大学 1983
- 18 大塚達朗 「寿能泥炭遺跡出土加曾利B式土器の様相」 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』 —人工遺物・総括編—(分析調査・考察総括) 埼玉県立博物館・埼玉県教育委員会 1984
- 19 安孫子昭二 「加曾利B式とその細分」 『土器解説』 『縄文土器大成』 第3巻(後期) 講談社 1981
- 20 鈴木正博・鈴木加津子 「中妻貝塚論序説」 『取手と先史文化』 上巻 取手市教育委員会 1979
- 21 鈴木正博 「大森貝塚出土の土器・石器」
「加曾利B 1式精製土器様式(概説)」
「加曾利B 1—2式精製土器様式(概説)」
「加曾利B 2式精製土器様式(概説)」
「加曾利B 3式精製土器様式(概説)」
「加曾利B式粗製土器様式(概説)」 『大田区史(資料編) 考古II』 東京都大田区 1980
- 22 鈴木正博 「遺物特論 —「加曾利B式(古)」研究序説—」 『取手と先史文化』 下巻 取手市教育委員会 1981
- 23 山内清男 『日本先史土器図譜』 第III集 先史考古学会 1939
- 24 山内清男 『日本先史土器図譜』 (再版) 先史考古学会 1967
- 25 山内清男 「縄文土器型式の細別と大別」 『先史考古学』 1—1 先史考古学会 1937
- 26 安孫子昭二 「加曾利B式土器の変遷」 『平尾遺跡調査報告』 I 平尾遺跡調査会 1971
- 27 『高井東遺跡』 埼玉県教育委員会 1974
- 28 坂詰秀一 『図録 歴史考古学の基礎知識』 柏書房株式会社 1980.7
- 29 小泉和子 「桶・樽」 『講座・日本技術の社会史 第7巻』 1983.12
- 30 永野朝栄 『藤岡のかかわら史』 藤岡瓦沿革史編算委員会 1977.3
- 31 松田 鑽 「第七節 国分寺と日野瓦と藤岡瓦」 『藤岡町史』 藤岡町史編算委員会 1957.6
- 32 坪井利弘 『日本の瓦屋根』 理工学社 1976.5
- 33 坪井利弘 『図鑑瓦屋根』 理工学社 1977.6
- 34 駒井綱之助 『かわら日本史』 雄山閣 1981

写 真 图 版



1. A区 全景



2. A区 調査前



3. A区 1号溝



4. A区 2号溝・4号溝と落ち込み



5. C区 1号土坑



1. 沖積地を縦断する
発掘区(航空写真)



2. 本郷尺地遺跡全景(手前が北)航空写真



1. 1号・2号土坑と遺物包含層



2. 5～7号土坑埋没土層断面



3. 土坑群全景



4. 古式土師器の包含層



5. 同左



1. 発掘調査の開始(南から)



2. I区 深掘りトレンチ土層断面



3. IV区 深掘りトレンチ土層断面



4. V区 土層断面



5. I区 全景(北から)



6. I区からII区・III区を望む(北から)



7. II区 全景(北から)



8. III区 全景(南から)



1. 1号溝全景(北から)



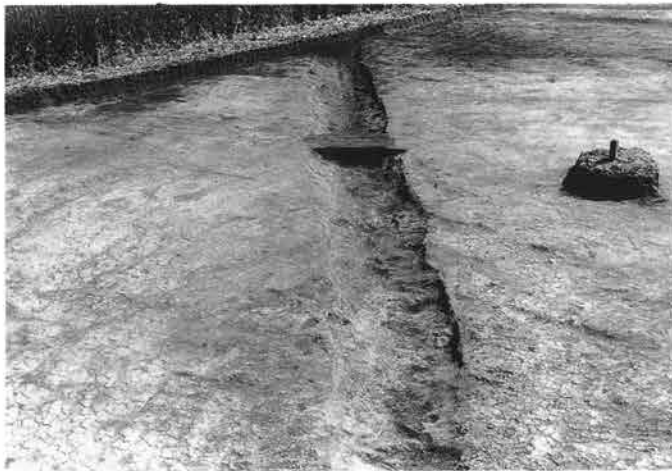
2. 1号溝東壁土層断面



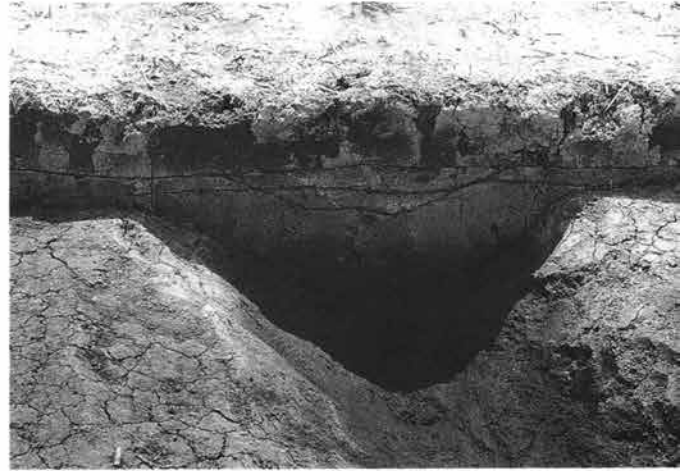
3. 1号溝遺物出土状態



4. I区から庚申山を望む



5. 2号溝全景



6. 2号溝東壁土層断面



7. 3号溝全景(北から)



8. 3号溝東壁土層断面



1. 4号溝全景(北から)



2. 4号溝東壁土層セクション



3. 8号溝全景(西から)



4. 5号・8号溝セクション



5. 9号溝全景(西から)



6. 9号溝東壁セクション



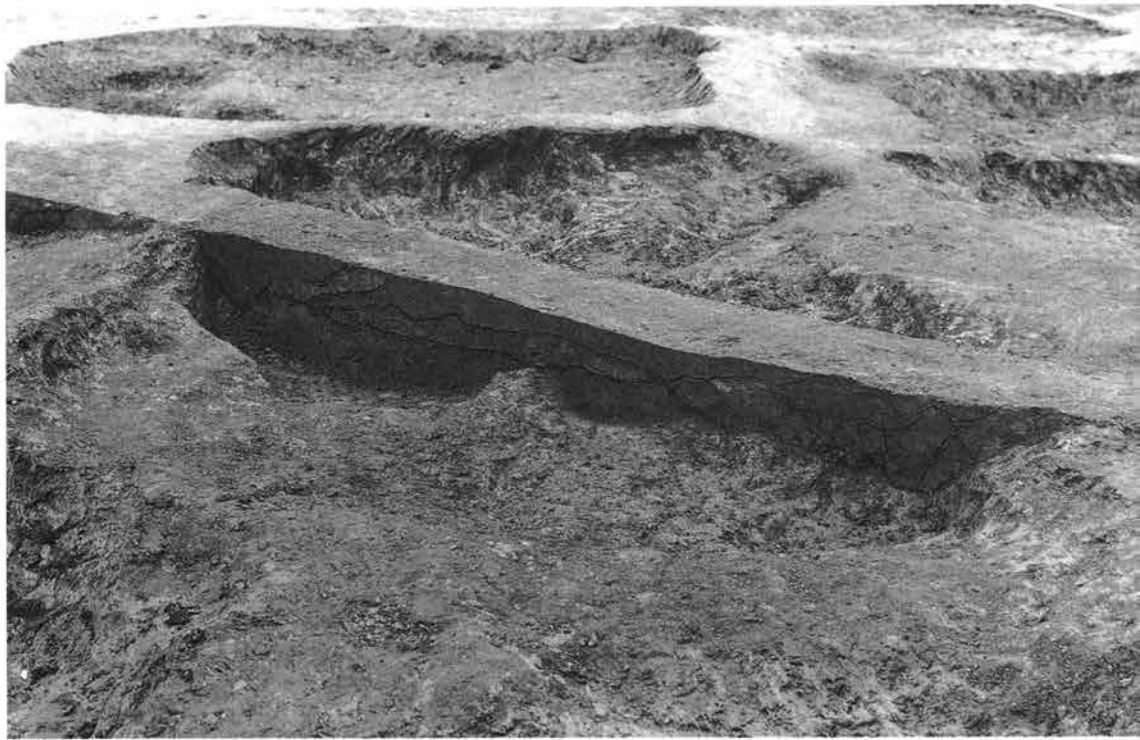
7. 10号溝全景(西から)



8. 10号溝東壁セクション



1. 粘土採掘坑
埋沒土層断面



2. 粘土採掘坑
埋設土層断面



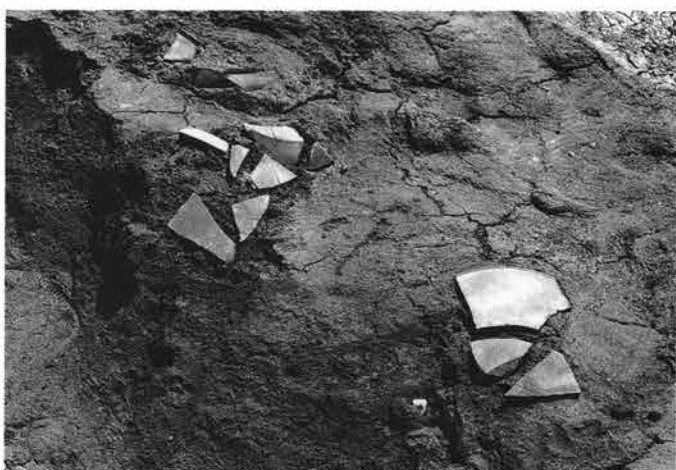
3. 粘土採掘坑
発掘風景



1. 粘土採掘坑C・D-44~46G(南から)



2. 粘土採掘坑小間割52



3. 粘土採掘坑小間割60 遺物出土状態



4. 粘土採掘坑小間割69桶出土状態



5. IV区 粘土採掘坑 掘削痕

縄文土器



図12-1



図12-7



図12-6

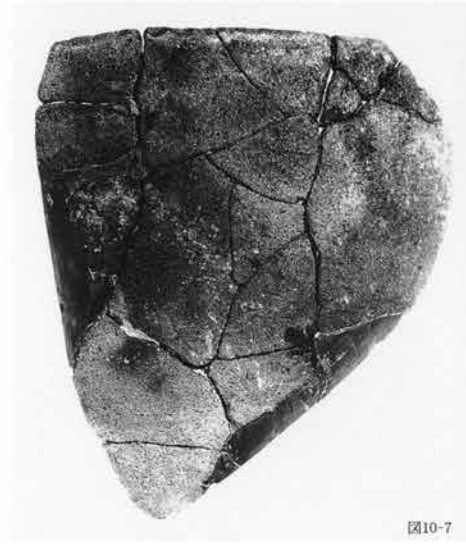


図10-7

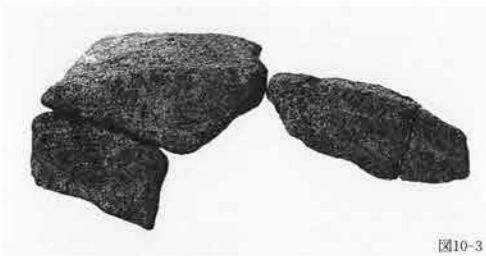


図10-3



図12-2



図10-1



図10-2



図12-8



図12-11



図10-10



図12-9



図10-4

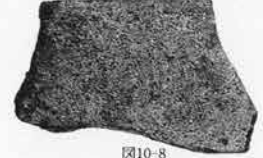


図10-8



図10-9



図12-3

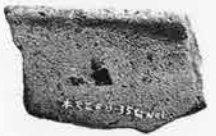


図12-4





図11-1



図11-3



図14-2



図11-4



図14-1



図14-5



図14-3



図14-4

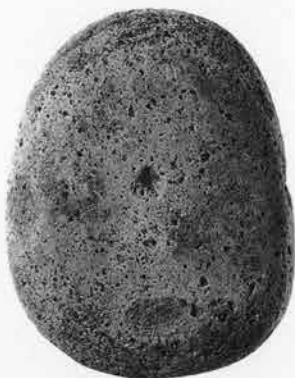


図14-6



図13-1



図13-3



図13-2



図16-1



図15-1



図15-2



図15-3



図15-4



図15-6



図15-4



図11-2



図16-2



図17-1



図18-2





図17-5



図18-3



図17-7



図17-6



図17-8



図17-11



図17-9



図18-1



図17-3



図17-2



シルト層出土の古式土師器



図19-1



図19-2



図19-3

溝の出土遺物

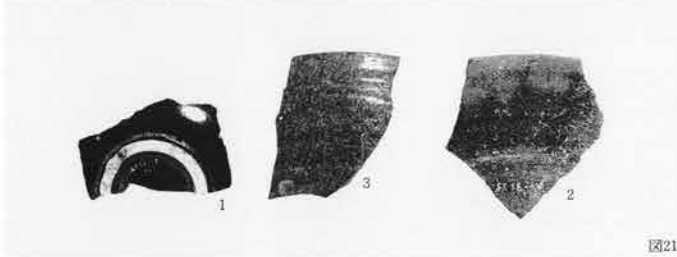


図21



昭和61年度調査地区 A区の出土遺物

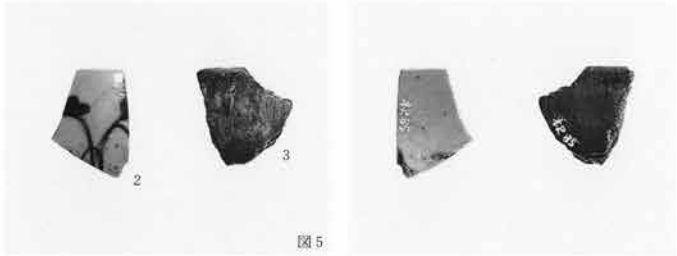


図5

粘土採掘坑の出土遺物 土鍋(1) 糸引き鍋

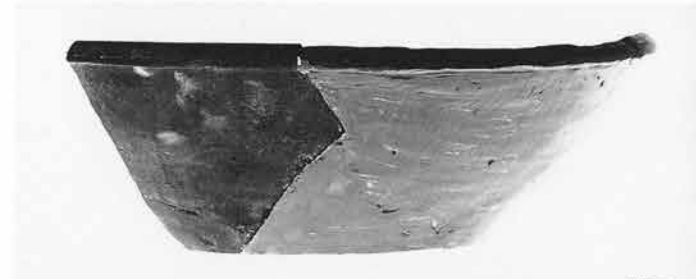


図27-3



図27-2

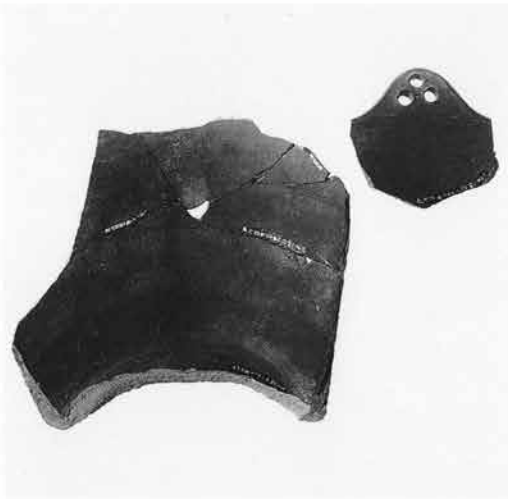


図27-1



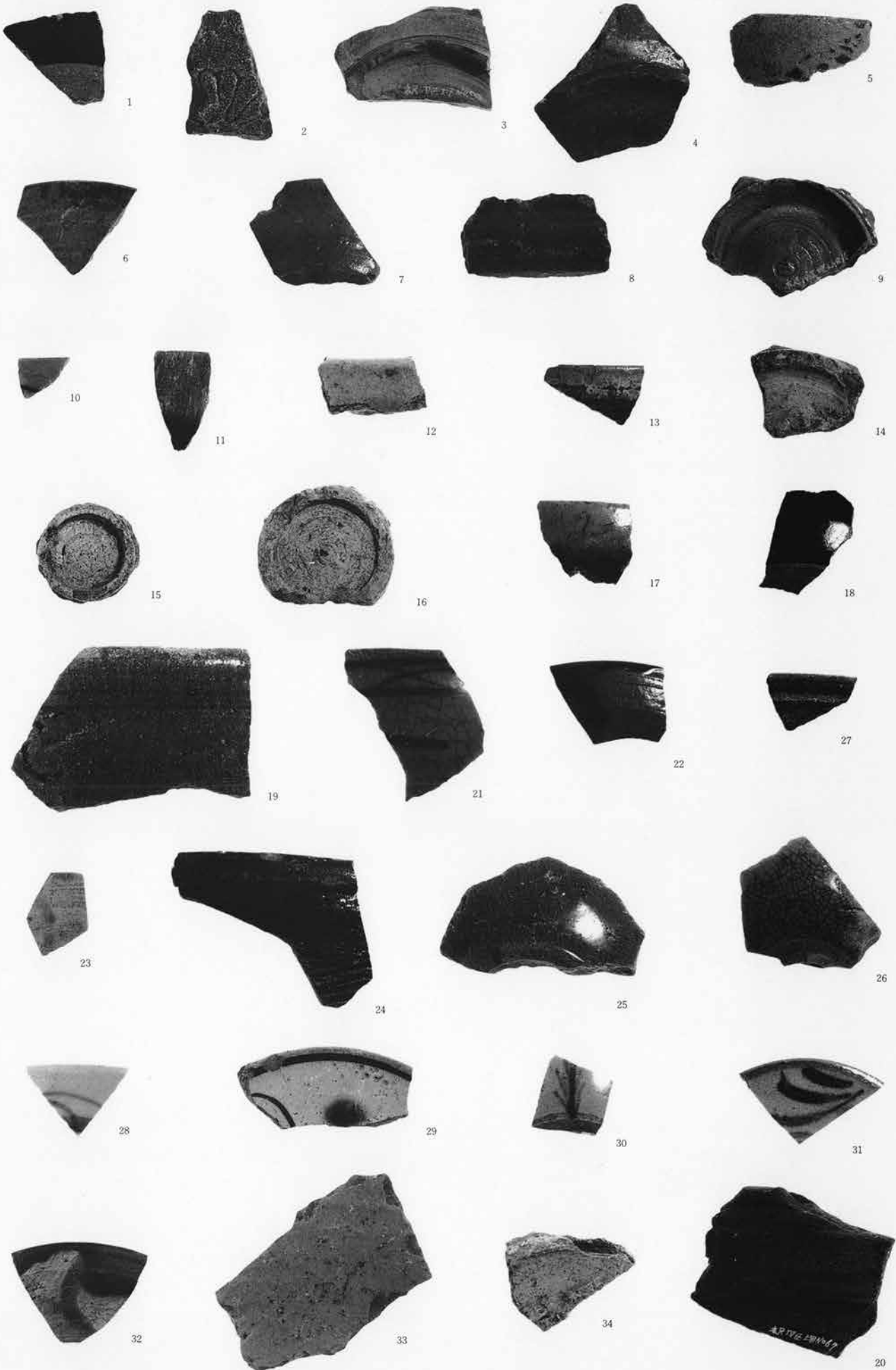
図27-8



図27-6



図27-7



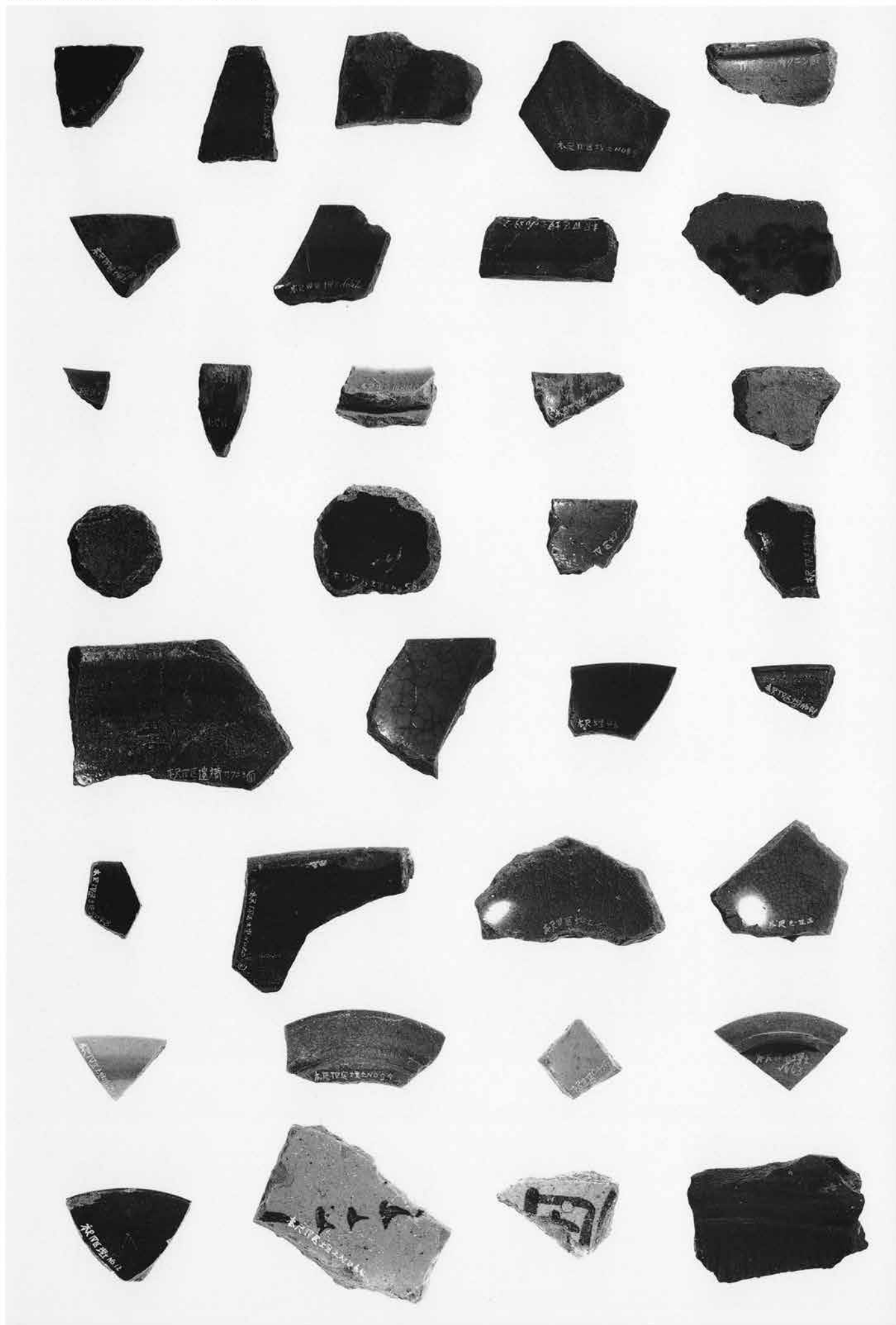
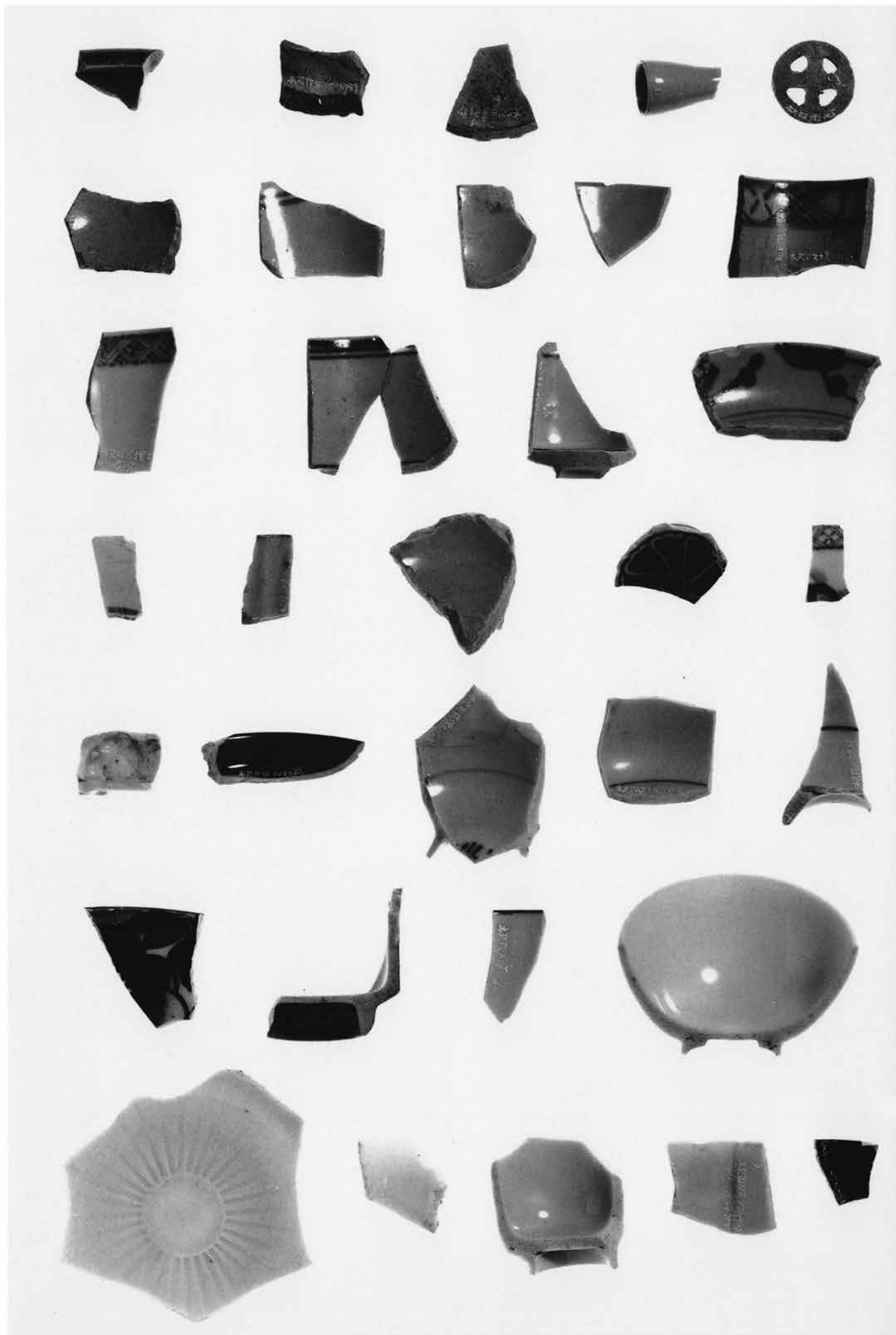




図5-1



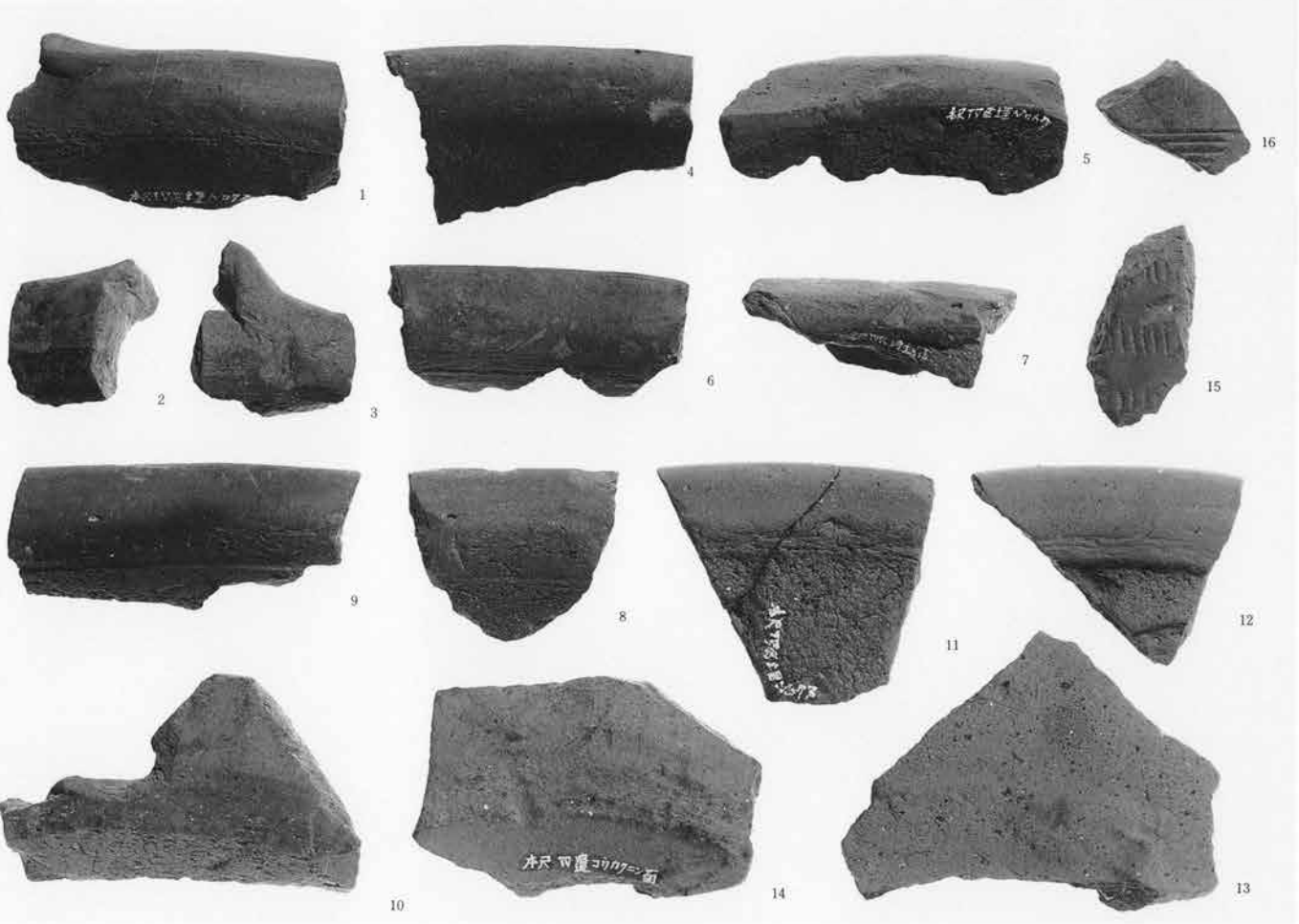




図27-11

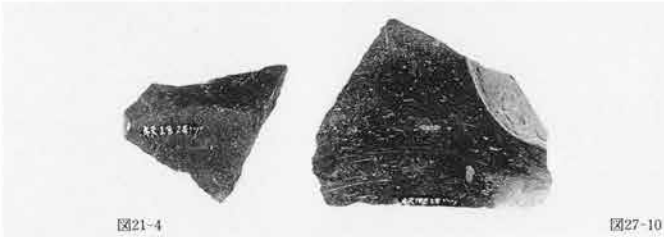


図21-4

図27-10



図29-6

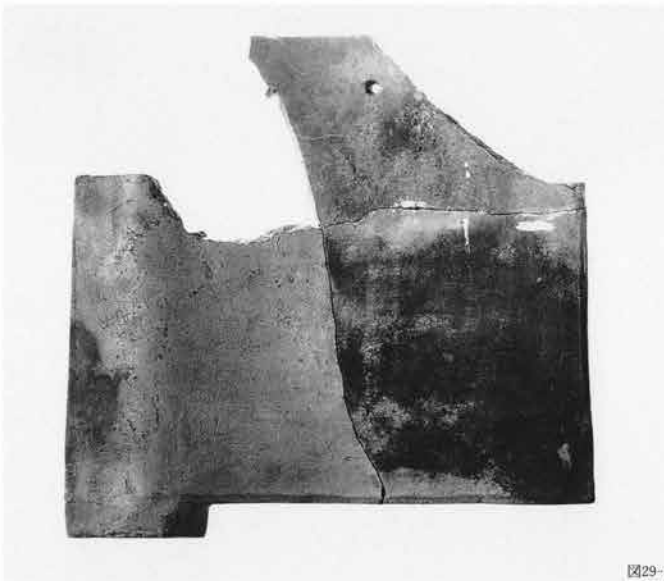


図29-1



図30-12

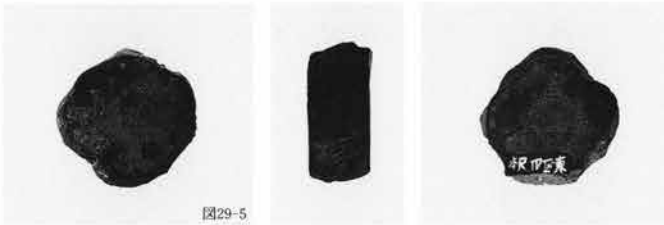


図29-5

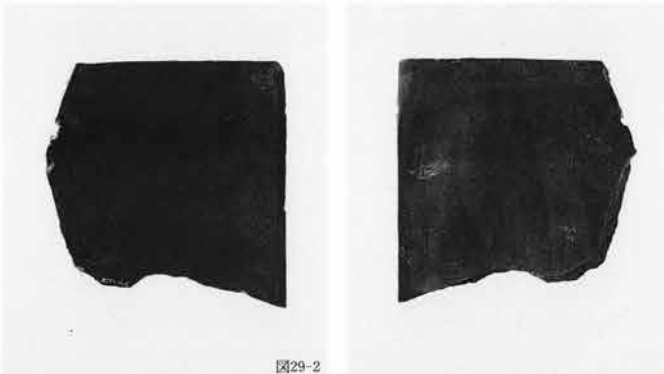


図29-2





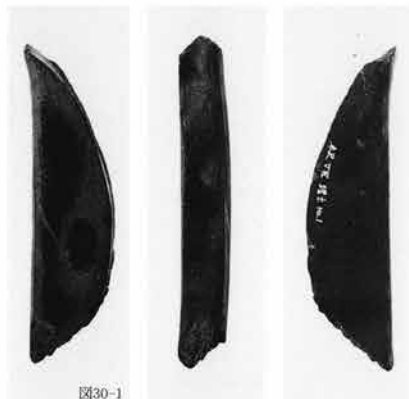


図30-1



図30-2

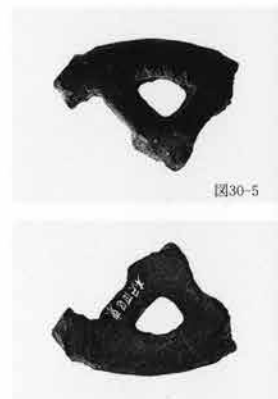


図30-5



図30-3



図30-4



図30-7



図30-6



図30-9



図30-8



図32



図30-10



図30-11



図30-14



図30-13



図30-16



図30-15



本郷尺地遺跡

一級河川笹川河川改修工事に伴
う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

昭和62年9月25日 印刷

昭和62年9月30日 発行

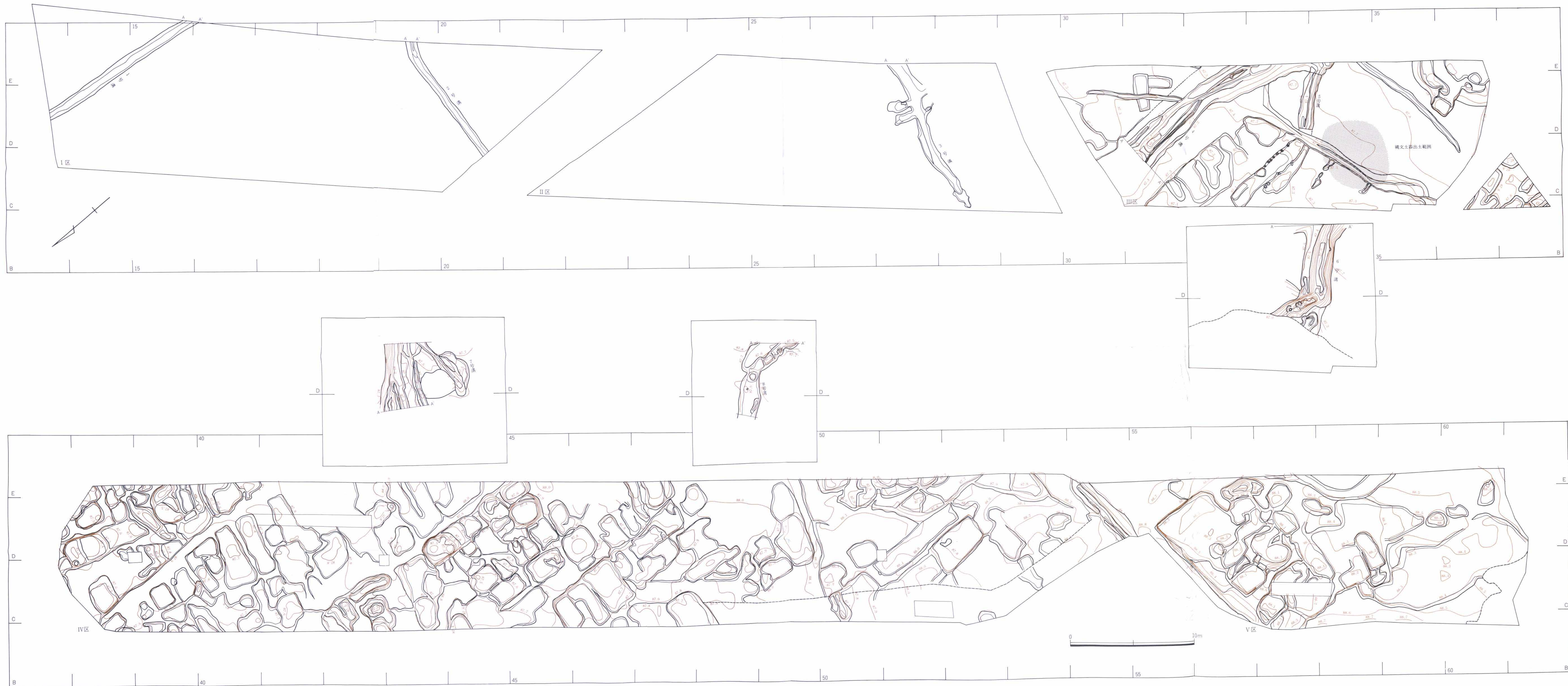
編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

『本郷尺地遺跡』 正誤表

頁	段	行	誤	正
28	左	5行目	堀の内	堀之内
48	右	4行目	1	6
57	左	13行目	教育委会	教育委員会
58	右	22行目	中村重太郎氏	中村宏氏
PL4	3		断面	断面
PL6	3・4		8号溝	6号溝
	5・6		9号溝	7号溝
	7・8		10号溝	8号溝
PL7	1		埋没	埋没
	2		埋設	埋没
11	図7中の○は石器、●は土器を示す。			



付図 本郷尺地遺跡昭和61年度調査地区全体図